〔頭書〕此時能島・來島に、防州八代島一圓に下さるべき由、御約束の由。

則ち兩島へ、謝詞を述べられん爲め、元就よりは兒玉三郎右衞門、元春より二宮木工助、隆景より浦兵部を、伊豫船に遣して、其後三家對面せらる。又防州大島の桑原入道一族は、皆陶に隨ひて、嚴島へ渡ると雖も、其身は毛利家に與す。斯くて元就、嚴島の安否を見て歸るべしとて、同廿七日、能島・來島に、浦兵部・赤川十郎左衞門尉に、二百餘人を添へて差渡さる。此時浦兵部は、毛利家海上の役なる故、兩島に言斷りて、先手に進みたり。陶方大濱・桑原・宇賀島の海賊船、城中へ入れずと、遮り攻むると雖も、兩島・浦・赤川、之を追拂ひて城へ入り、城中の體、又は陶が陣所の構、委しく見て歸る。彼者共、嚴島の體、今一兩日後詰延引に於ては、籠城叶ふまじと申すに依つて、則ち元就、小早川隆景に、熊谷伊豆守父子を相附け、浦兵部を案内者として、同廿八日の夜、有の浦の城に差籠めらる。

〔頭書〕此時、瀨戸の大船を圍ひ、岩際迄乘入れ、夫より小船にて通路仕り、城の體を見て歸る。はや五日以前に、水の手を掘取られ、矢倉をも掘傾けたるを、衣服を破り繩に打繫ぎ、抱へて難儀の由なり。

元就嚴島に後詰す

弘中參河守隆兼、陶が前に出でて、明日未明に城を乘取るべし。城落ちば、元就如何に思ふとも、叶ふまじといへども、陶用ひずして、城乘は來る朔日と議定す。九月晦日、元就父子三人相議して、明朔日、嚴島に於て、陶と無二の合戰を遂ぐべしと極められ、諸士に下知を傳へて、相詞・相印を定め、三日の兵糧を腰に付けさせ、柵の木一本、繩十尋づつ持たせらる。地の御前の陣所には、前々に相變らず、篝を焚かせ、諸士の船には、篝を焚くべからずと謀を定め、九月朔日酉の刻に、諸軍一同に船に乘らる。〔頭書〕相印しめ襟二つ卷、相詞勝々〕然る處に風雨烈しくて、海上穩ならざれば、船頭共、渡海叶ひ難き由いへば、元就、此風雨にこそ、敵も油斷すべけれ。不意に懸つて切崩すべし。急ぎ船を出すべしと命ぜられて、則ち漕出せば、風雨も漸く靜まりたり。斯くて諸船、包の浦に漕著くれば、爰にて父子三人相議して、船悉く、地の御前に漕戻させらる。頓て其黎明に、吉川元春先陣として、新庄勢八百餘人先に進み、聲を揚げ坂を登れば、自ら鬨と聞ゆ。弘中參河守、博奕尾に陣取りたるが、爰にての合戰

惡しかるべしとて、大和伊豆守・三浦越中守に牒じ合せて、陶が本陣塔の岡へ相集る。藝州勢是をば知らず、鯨波を揚げて、弘中參河守が陣へ押寄すれば、敵一人もなし。さらば陶が本陣へ寄せよとて、塔の岡に押寄する。

〔頭書〕元就、船より上らるゝと、鹿一匹其前へ來る。元就、是れ則ち明神より、迎へ給ふらんといはる。父子三人一所に居て、籌を焚かせらる。其時元就、此度の弓矢に勝ちたりといはる。隆元・元春、御意の如く、思召の儘、勝利を得られたる由挨拶せらる。其後、船を二十日市へ戻さる。其時元就の命に、船、地へ著せば、地の御前大野・久波表へ罷出で、幾千萬となく籌を焚くべしと、相觸れ申通ずべしと言含めらる。之に依つて彼表に、螢を散らすが如く、籌夥しく見えたり。能島・來島は、浦々を廻り、稠しく警固す。彼包の浦には、水あるべしと、元就思はれて、諸勢へ、敵前に大山を越すの間、名〻手拭を水に浸し、口すべき由下知せらる。諸士峯へ口登る時は、喉乾き息も繼ぎ難し。此時彼手拭の水を、口へ絞り入れたり。

陶大軍なれども、諸陣夜中に、俄に集りたるに依りて、備しどろなり。殊に所は狹し、駈引自由ならず。之を見て毛利方の將、自ら手を碎きて、攻付けらるれば、陶方、一度に崩れて逃退く。全薑采配を取つて、味方を恥しめ下知すれども、聞入れず。船を求めて落行き、大勢船に込乘りて乘沈め、溺死する者もあり、乘後れて、浦傳に逃行くもあり。弘中參河守・同中務蹈留りて、瀧の小路を後に當て、五百計りにて控へたり。吉川元春一番に追駈けらる。弘中父子、死を一途に定めて、切つて懸れば、吉川勢切立てられ、十四五間引退く。元春槍を提げ、士卒を下知し、駈出でらるれば、味方又取つて返し、命を際と相戰ふ處に、柳小路より、青景・波多野・町野等三百計りにて、横合に突いて懸る。吉川勢危く見えし處に、熊谷伊豆守信直・天野紀伊守隆重、馳合せて切懸れば、青景・波多野等、終に叶はず退きたり。弘中は、瀧小路の左右へ火を懸け、其紛れに、上の山へ退き登る。元春、神殿に、火や懸るべきと氣遣ありて、早速其火を消させらる。隆元の備へ、陶勢五百計り、返し合せ相戰ふ。之に依つて元就より、福原左近將監・兒玉内藏允・粟屋與十郎以下三百計り、加勢せらるれ

晴賢敗る

ば、陶勢忽ち崩れ引く。此時毛利勢内藤河内・永井右衞門大夫、比類なく相働き、粟屋又次郎討死す。陶入道は、爰にて討死すべしとて、落殘る兵を集め控へたる處に、三浦越中守、如何にもして山口へ引取り、重ねて勢を催さるべし。某殿(しんがり)し討死せん。其間に船を求めて乘らるべしと勸むれば、全蕓、さらばとて、船を尋ねて落行くと雖も、何れの浦にも、船なければ、途方に暮れて彳みたり。小早川隆景は、陶入道が退口を、大木の谷迄慕ひ追はるゝ處に、谷陰より羽仁越中・同將監と名乘り、三十餘人切つて出づれば、其邊に隱れ居ける陶方の兵五百餘人馳加はりて、切つて懸る。隆景の兵駈惱まされて、一度に引退けば、吉川元春之を見て、旗を押直し、駈合せられば、小早川勢も、取つて返し戰へば、又石州出羽中務も、扶け來りて相戰ひ、羽仁兄弟を、出羽が手へ討取れば、殘卒悉く逃行くを、三家の勢竝に出羽が手の者共數十人追討したり。吉田勢には庄原兵部少輔・桂善左衞門・福原宗右衞門・同左京・佐藤宗右衞門・中原善左衞門・坪井將監・兒玉四郎兵衞・波多野源兵衞〔頭書〕天文十二年雲州退口討死の源兵衞子か・志道源藏・渡邊甚右衞門、吉川勢には二宮木工助・森脇市郎右衞門・山縣四郎右衞門・

三浦越中守奮戰

小早川隆景苦戰

粟屋參河守・同伯耆守等分捕したり。天野紀伊守・同中務も、數多追討する處に、陶が郎黨手島清左衞門と名乘りたるを、中務討取りたり。小早川隆景は、此戰の半ば羽仁等が勢をば差捨て、彌〻陶が退口を附送らる。三浦越中守は、陶入道が後を押へて、引退くと雖も、船なき故、青海苔といふ所の岨路に控へて、追懸くる敵を待ち居たり。隆景二三百計りにて駈來らるれば、三浦待受けて切つて懸る。隆景も自身槍を取つて馳向はる。赤川左京亮、越中守に渡り合ひ、暫く相働きて勝負付かず。其間に三浦が勢、隆景を目に懸け切懸る。隆景既に危き處に、家人草井市之丞・山縣勘次郎・内海市郎・南勘兵衞・井上一忠等、駈隔て防戰す。草井市之丞、手を負ひて伏し居たるに、赤川・三浦、其邊(あたり)にて切合ひければ、草井倒れ乍ら、越中守が足を捕へて引付けしかば、三浦、草井を切殺したり。三浦が者、彌〻稠しく攻付くれば、山縣勘次郎・内海市郎・南勘兵衞・井上一忠、枕を竝べて討死す。此隙に隆景は、赤川左京を連れて、敵離れせられたり。隆景難儀の通、元春へ告げ來れば、即時に駈付け、切つて懸らる。吉川勢粟屋源藏・清長新三郎・樋口彦三郎・二宮木工助・同七郎兵衞・井尻又右

衞門・高彌三郎、吉田勢には内藤内藏允等駈合ひ、相戰ひけるが、吉川勢清長三郎深手負ひ、樋口彦三郎討死す。三浦が兵悉く討死して、越中守只一人休み居けるを、内藤内藏允と高彌三郎と、同じく射る二つの矢、中りけれども、薄手なれば、三浦事ともせず、槍を取上ぐる處へ、二宮木工助渡り合ひ、暫く突合ひけるが、三浦が左の脇より肩先へ突貫き倒れけるを、井尻又右衞門、首を取らんと取つて押へけるが、片岨なる所を蹈外して、下の谷へ落ちければ、内藤内藏允下合ひて、三浦が首を討取りたり。

〔頭書〕高彌三郎、天文廿一年九月、西條槌山に於て手を負ひ、卽時相果てたる由、異說あり。尤も爰に記したるは、其子彌三郎と稱せるにや。弘治元年は、天文廿四年にして、其年數、纔三四年を隔てたれば、此時、三浦を射たる彌三郎も、槌山にて相果てたるといふ彌三郎も、同人か。然れば彌三郎、槌山にて相果てたるといふ事、僞說なるべきか。但西條槌山にて相果てたるは、高彌右衞門にて、彌三郎とは別人といふ說もあり。諸所討死の記にも、彌右衞門と有之。又私に曰く、彌右衞門は、彌三郎父にして、初め彌三郎といひたるにや。此時三浦を射たる彌三郎は、彌右衞門子にして、槌山にて討死の彌右衞門は、初の名を以て、彌三郎と記したるにや。

大和伊豆守は、手勢七十餘人にて、度々取つて返しけるが、所々にて過半討死して、纔二十餘人になり退く處に、香川左衞門尉光景、追駈けたり。大和・香川は、日來知りたる中なるに依つて、互に後を見せじと、進みて戰ふ。大和、槍を持ちて働く處に、香川が家人香川石見、其槍を打落せば、大和、其儘光景に組付く。此大和伊豆と大庭加賀守とは、武文の達者にて、名譽なる者の由聞えける故、元就、豫て此兩人を召抱へたき由いはれけるを、香川も常々聞及びけるが、此事きつと思出して、伊豆守に此旨を告げて、一生捕りたり。其外の者共をば、香川淡路守・同左馬助・同左衞門尉が家人猿渡壹岐等討果す。又宮左衞門尉をば、杉原若狹守・三須筑前守兩人して、之を生捕り、其外重見因幡守以下、生捕の者數多なり。

〔頭書〕粟屋參河　元春公附屬三十六人の内

- 藤右衛門　始口藏　於二伯州岩倉一討死
  - 彦右衛門　繼二兄跡一
    - 朝枝宗左衛門　初與三太郎　朝枝周防守養子。岩倉に於て岩倉藤右衛門一同討死。
  - 十郎兵衛
  - 七郎兵衛
  - 志谷源右衛門

此系非なり。藤右衛門父源藏といふ。是藤右衛門は參河孫なり。彦右衛門は源藏が弟にして、藤右衛門が伯父なり。

〔同〕粟屋伯耆　元春公附屬三十六人の内

- 豐後
  - 市左衛門
    - 與三右衛門
      - 市右衛門
        - 市左衛門
          - 長右衛門
            - 治左衛門
      - 半右衛門
        - 嘉兵衛
          - 四郎衛門
    - 與三右衛門
    - 三須三右衛門　〔山縣〕
  - 藤右衛門　室香川兵部女
    - 十兵衛

〔同〕筑後

- 木工之助　四郎右衛門

三三　弘中參河守同中務最期の事

三浦隆兼戰死

弘中參河守隆兼同中務大輔隆助は、龍刀馬場へ取登り、百餘人にて控へたるに、元就、一人も洩らさず討殺すべしとて、柵の木を結せて取圍まる。弘中が兵、或は討たれ、或は生捕られて、今は只主從三人になり、隆助敵中へ駈入り、數人切伏せ、手を負はせて引退く處に、吉川衆小坂越中守、遠く隔りて居けるが、若しやと放ちける矢、中務が左の肩先に當り、疼む所を、熊谷伊豆守が手の者、末田新右衛門走り寄り、引組んで首を取る。

〔頭書〕此時切出でたる者をば、手の下に討取り、生捕の者をば山下にて討果す。

弘中父子三人にて三日の朝迄、堪へ居たり。此龍刀馬場大難所故、斯くの如し。

參河守此由を見て、既に自害せんとする所へ、阿曾沼豐後守廣秀が家人井上源右衛門駈寄れば、隆兼暫く戰つて、終に井上に討たれたり。此時迄附從ひて、一人殘りたる弘中が郎黨をば、井尻又右衛門討取りたり。

晴賢自害

〔頭書〕大庭加賀守事も、此時毛利家へ降參したるにや。後年元龜元年、備中國三村元親御退治の時、加賀守狂歌を詠みて、箭に附けて、松山の城に射入れたりといふ說あり。

軍止んで後、生捕の內、渡邊可性といふ者あり。常に狂歌を好き詠めり。元就早く狂歌を詠みたらば、命を助くべしとありければ、其言の下に、

かけてしもたのむやもりのしめだすき命一つに二つ卷して

しめ襷二つ卷は、此度毛利家の相印なり。又陶が同朋に、宗阿彌といふ者、是も同じく歌道に好きて、狂歌を詠みければ、元就右の如くいはるれば、

名を惜む人といふとも身を惜む惜さにかへて名をば惜まじ

元就、此折節、能く詠みたりとて、二人共に命を助けらる。

三四　陶入道全薑最期の事

陶入道全薑は、青海苔の濱迄落行くと雖も、船なければ、今は進退谷りて、終に自害したり。夫迄附從ひたる伊加賀民部・垣並佐渡守・山崎勘解由、全薑の首を紫の小袖に包み、遙か谷奥に隱し置きて、垣並・山崎は、入道と一處に刺違へて死す。伊加賀は、全薑が乳人にて、側を離れざる者なれば、爰にて自害せば、入道も定めて一所にて死したるべしとて、首を搜し出すべし。所を替へて死すべしとて、二三町濱邊へ出でて自害したり。此三人の首をば、兒玉內藏允が手へ取ると雖も、誰が首とも知れず、警固船に取入れて、掛け置きたる所に、吉川勢の粟屋參河守・二宮木工助、落人を尋ねて山中を搜し、敵を數多討留め歸る處に、兒玉が船に首三つ掛けたるを見て、二宮、昔日此三人と睦じき故、能く見知り、陶入道も、定めて彼等と一所にて、自害しつらめとて、粟屋・二宮、此首のある所を尋ぬ。兒玉案內者にて、卽時青海苔の浦へ行き、山谷を搜す處に、陶が草履取乙若とて、十四五なる童、最期迄供して、山に隱れ居けるを見付けて、此者を捕へ、一命を助くべき間、陶が首の有所を敎ふべしと賺しければ、乙若、首を隱したる所を敎へ相渡し、最期の有樣など、委しく物語しければ、則ち其首を搜し得て、元就父子の實檢に備へたり。〔頭書〕陶が首を搜し出したるは十月四日なり。

晴賢の首級を匿す

晴賢の首級を得

が首は、來島通康が手へ取りたるといへり。　頓て其首を、二十日市の洞雲寺に納めて、懇に供養せらる。乙若儀は、命を助けられたり。　大和伊豆守は、豫ては命を助くべしと思はれけれども、行末如何心許なしとて、香川左衞門尉に命じて、終に仁保島に於て、之を討果さる。重見因幡守をば赦免して、奉仕せしむべき由、兒玉内藏允・兼重左衞門尉を以て、言渡さるゝ處に、因幡守、某事元來伊豫國河野一家の者にて、牢浪の身なりしが、先年大内家へ立退き、夫より以來、陶が厚恩を蒙りたれば、其恩忘れ難き間、兎角切腹仕るべき旨言斷りて、檢使を請ふ故、元就許して、入江與三兵衞を差出され、重見切腹したり。子供兩人をば、元就召抱へて奉仕せしむ。木原兵部・同次郎兵衞〔頭書〕一書に喜三郎とあり。是なり。斯くて毛利元就・同元隆・吉川元春・小早川隆景は、十月十一日迄、嚴島に逗留し、仕置等言付けて、同十二日、同國小潟迄歸陣せらる。　十月朔日より同十一日迄、軍士を以て山を搜し、逃隱れたる者を追討せられ、總て得る所の首員四千七百八十五なり。　其外は船に乘り、筏を組んで落失せたり。

〔頭書〕異書に曰く、元就・御勝利の口彼島（後カ）に十一日迄滯留し給ひ、小船一艘に、舸子一人宛乘せ、夜中に、島の廻（めぐり）を漕廻らせ、落人乘せんと呼ばはらせ、嚴島の向火立・赤崎といふ所へ、人數を出し置き、右の船に乘せ來る者を、悉く捕へさせられたり。　其中に進藤彥八といふ者、彼船（船カ）に乘りけるが、船中にて此口をば、何方へ著け申すやと問ひければ、火立・赤崎へ著け候と答へければ、地の御前へ著けよ、さなくば汝が首討落さんと、刀に手をかけいひければ、舸子恐れて、靜まり給へ。仰に隨ひ候はんとて、地の御前へ差著くれば、進藤は虎口を遁れ、立去りたり。此者、元來小早川家の侍なりしが、勘氣を得て立退き、大内家に仕へ、此度此陣に向ひたりしが、此處より直に、備後の在所へ歸りしと云々。

三五　陶長房自害附防州鞍懸城沒落の事

元就、陶を討亡されしかば、大内家の侍防州玖珂の内鞍懸山の城主杉治部大輔隆泰・蓮華山の城主杉森下野守より、三家へ使を以て、陶を誅伐せられし賀詞を述べ、當國へ出張せらるゝに於ては、馳走すべし。其證據の爲とて、人質二人宛差出したり。

杉重輔晴賢の子長房を攻む

其外備藝の侍、多く味方に參りたり。是に依つて元就父子、防州へ入りて、岩國に陣を居ゑらる。爰に陶全薑が嫡子五郎長房は、防州若山に居けるが、大内義長へ、加勢を給はらば、父が弔軍して、元就を亡し、其次に杉治部大輔・杉森下野守等の叛逆人を、悉く退治すべしと言送る。義長、内藤・仁保・青景を集めて詮議せられしに、何れも加勢叶ふまじといひけるに依つて、義長、合力を止められけるに依つて、長房、之を憤り思ふ折節、杉伯耆守重政が子杉十郎重輔、我父伯耆守を、陶全薑故なく殺したれば、今我れ五郎を討つて、父の仇を報せんとて、十月五日の夜、其勢五百餘を帥ゐて、五郎長房が若山の居城へ、夜攻を懸くる。城兵我れ先にと落失せ、纔五十餘人殘り止まれば、長房、とても叶ふまじと思ひて、其弟小次郎をば樣々に宥め落し、其後問田丹後守隆盛と共に自殺したり。

長房自盡

〔頭書〕長房後見として、全薑より、安岡といふ者を附け置きたるが、主と共に切腹せず、出家したり。山口に落書多く立つ。其中に、

安岡は源氏の卷にあらねどもさりとては□腹をきり□ぼ

杉隆泰元就に背く

元就等隆泰を攻む

杉十郎、陶長房竝に問田が首を、元就に送りて、此旨委しく注進し、毛利家に屬したり。閏十月中旬、小早川左衞門佐隆景は、防州由宇・伊賀路の一揆原を、盡く退治して、夫より大島へ渡り、桑原入道等が人質を取りて歸らる。又杉治部大輔隆泰、表向は元就に屬して、人質迄差出すと雖も、底心は大内家への志變らず、如何にもして毛利家を討亡すべしと計りて、下人を道心者に拵へて、義長へ加勢の事を言遣す處に、杉森下野守、家人を行路に出し置き、彼道心者を搦取りて、元就の陣所岩國永興寺へ送り、琻々の趣注進す。〔頭書〕杉森□慶、家人を差川に出し置き、杉が使を搦取る。此時備中守隆元は、同國河内の壇といふ所に陣取られ、元春・隆景は、御庄の市に居られけるに、元就、早飛脚を以て、後刻寅の頭に、鞍懸に出馬あるべしと言遣し、元就、頓て永興寺を發馬して、鞍懸へ急ぎ向はるれば、隆元・元春・隆景も、追々柱野・金坂邊にて馳付き、夫より父子兄弟相共に、三里が間を一時に駈付け、鞍懸の城へ取懸り、貝を相圖に定め。一息に乘崩さんとせらる。城兵も矢間を開き、散々に射けれども、寄手事ともせず、一度に塀の手に乘付くれば、敵堪へず、二の丸へ引退く。

隆泰討たる

〔頭書〕杉隆泰叛逆の事、豫て其聞えありと雖も、御出馬御用意調へ候迄は、御隱密にて、御父子御相談ありけるにや、其頃新庄御留守に、今田上野介差置かれ候處に、早打を以て、急に召寄せられ候。上野介則ち駈付け、防州に於て、金坂乘馬上息(うはいき)仕候へども、漸く駈著き、御手筈にも逢ひ申したりと云々。

寄手續いて攻入れば、城兵暫く防戰すと雖も、終に叶はず、大將隆泰、大勢の中へ駈入り戰ひ、深手を蒙りて、少し弱る處を、小潟太郎左衞門が家人吉山肥後といふ者、押へて首を取る。〔頭書〕隆泰戰死の時、三十一歳と云々。右代々鞍懸城主なり。吉川勢森脇市郎右衞門・二宮七郎兵衞山縣四郎右衞門等、續いて能き敵を討取る。〔頭書〕中村新右衞門眞先に進む云々。其外杉が郎黨家子に至る迄、悉く討果し、諸手へ得る處の首數、八百九十餘なり。斯くて元就父子四人、〔衍カ〕同日閏十月廿七日未の刻に、又岩國へ歸陣せられ、元就は永興寺に、隆元は錦見の琥珀院、元春・隆景は、中州の加屋和泉が宅に宿陣せらる。其後隆泰が人質柳井彌太郎・有長加賀守を、岡又十郎〔頭書〕或書筑前守。末國伊豆守・今岡彌三郎をして、御庄の市に於て討果さるゝ處に、柳井・有長相働き、末國伊豆守・今岡彌三郎討死す。岡又十郎も、疵を蒙ると雖も、終に兩人を討果したり。〔頭書〕此後毛利家一族、嚴島へ社參、萬部執行せらる。種種奇瑞あり。或說、元就是より直に、石州日和出張とあり。

〔頭書〕杉歷代

弘眞(内藏助)　弘重(備後守)　弘恒(飛驒守)　尙弘(備後守)　興泰(土佐守)　隆泰(治部大輔)　島壽丸(後助三郎といふ。)

〔同〕異書に曰く、城兵、城の外廓へ、千二三百計り出でて、防ぎ戰ふ。隆元の曰く、味方の軍士、總懸りにして、諸手一同に取懸らば、落城の功速なるべし。元就曰く、城兵、案の外堅固なり。一時攻にせん事、味方人數損ずべし。然れば先づ山の麓へ、吉川・小早川・宍戸が勢を差廻し、西北の方より攻上せて、敵の樣子を試むべし。城中若し山口より加勢などありて、城外へ張出でたる人數の外に、城内の人數多勢ならば、味方人數を引分け、元就が旗本無勢なるを見ば、城外へ出でたる敵、其儘突懸るべし。又山口より加勢もなく、城に殘る所の軍士少勢ならば、西北の方より、味方攻寄すると見ば、城外へ張出でたる敵、早々城へ引取るべし。其時、旗本より附入にして、引取る敵を追討たば、西北より寄する西川等、攻□せ(寄カ)て、無二に城を攻破ら□□□城半日の内たるべしと、之に依つて西川の人數、竝

に宍戸が勢を引分けて、城の□□廻し、西北の方より、競ひ懸つて攻上れば、城□（虫入）敵之を見て、案の如く、早々城中へ引返さんとする處を、元就の旗本□□□□□せ（虫入）ず附込み、引入る敵を追討すれば、西川・宍戸が勢も、一同三手となり、稠しく懸つて攻戰ひ、城兵多く討死したり。　城主隆泰、今は叶はじと思切つて、自ら槍取つて打出で、死狂に、暫く支へ戰ふと雖も、終に戰ひ勞れ討死して、殘卒悉く死亡す。味方の兵士分の兵士、分捕高名の者多し。　中にも中村新右衞門、眞先に進みて手柄を顯す。　味方にも、手負・討死若干なり。　斯くて當城をば、則ち破却して、毛利家の諸將は、又岩國へ歸り入り給ふと云々。

三六　山内隆通元就に與す（井元春石州發向の事）

山口に同士軍ありて、杉十郎重輔、内藤彈正忠隆世が爲に討たれしかば、杉が一族、又陶五郎長房が弟小次郎を討つて、（頭書）小次郎は富田の龍門寺に隱れ居たり。同二年正月四日、密に其首を岩國の永興寺へ持たせて、去年より申す如く、元就山口へ打入らるゝに於ては、我々申談じ、義長へ後矢射べき由言送る。　其外密に志を通じて、味方すべき由、申す者又多し。　斯くて元就父子、防州岩國に在陣して、是より直に山口へ發向せんや否を、内談せらるゝ折節、雲州に隱し置かれたる山伏、岩國へ立歸りて、尼子晴久議談の趣を訴へけるは、元就山口へ出張するの聞あり、大内義長、定めて豐筑兩國の勢を催すべければ、早速には退治なり難くして、永々山口に在陣すべき間、此隙を伺ひ、石州福島隆包を討亡し、夫より吉川元春が居城藝州新庄へ打入るか、備後の三吉を退治して、吉田・郡山へ發向すべきかと、評議せらるゝの由、告げ來れり。　三家聞かれて、福屋・三吉は、味方に志深き者なれば、彼等を討亡させん事、義に背けりとて、謀を求めらる。　元就、則ち口羽下野守を呼出して、備後の山内新左衞門尉隆通は、尼子に屬すると雖も、毛利家へも亦志を存すべき者なり。　渠、味方とならば、晴久備後より、藝州へ打入る事叶ふまじ。　口羽は、新左衞門と舊好あれば、山内へ行き、語らひ見よとて、其調略を、委しく敎へられければ、下野守、急ぎ山内へ打越え、色色と親しみ馴れ、重ねて懇切の驗（しるし）にとて、隆通が一字を申請け、通良と名乘り、夫よ

山内隆通元就に與す

晴久晴通を攻めて利あらず

り殊に親しく持成し、好き折節に付けて、足下の亡父、毛利家へ志深かりければ、今隆通も、其志を繼ぎて、元就へ隨身せられん事、義の當然ならんといひければ、山内も、内々毛利家一味の志なきにあらざれば、終に同心したり。　山内、毛利家へ成替る由、雲州へ聞えければ、晴久大に憤り、頓て雲・伯・石並に備後半國の勢を率ゐて、山内へ押寄せ、數度攻めらるゝと雖も、晴久戰ふ毎に利を失ひ、軍兵多く討死しければ、終に叶はず引退かる。　斯くて元就・元春にいはれけるは、隆通、既に味方に與したれば、晴久、備後より、我が領國を侵す事叶ふまじ。　唯山口へ發向せば、石州を尼子に奪はるべきなれば、元春は石州へ馳向ひて、尼子を押へらるべしといはれて、同年四月九日、元春、防州岩國を立ちて、石州へ發向せらる。　吉見・出羽・佐波・祖式・福屋等の國士出迎へて、是に服從す。　又備後の山内新左衛門も、家城をば、家人共に守らしめて、石州へ打越え、元春の勢に相加はる。　是等を合せて總勢五千餘騎、烏屋が尾・高見の黑岩兩城を普請して、在陣せらる。　尼子晴久は、雲・石並に伯耆・備後半國の勢、一萬四五千を帥ゐて、石州へ打出でんとせられけるが、俄に傷寒を煩ひて、出陣の事止みたる由、告げ來れり。

三七　防州若山城明退く事

防州若山の城には、陶五郎長房切腹の後、毛利家より、長屋小次郎を大將として、軍士三百餘人、籠め置かれたり。　然る處に大内義長、毛利與三並に陶が郎等野上内藏允に、三千餘人を相添へて、若山の城を攻めさせらる。　爰に陶が家人野田・寺内などいふ者、毛利家へ降參して、當城に籠り居けるが、其者共返忠して、城内の小屋に火を附けて、燒きけるに依つて、長屋小次郎叶ひ難く、則ち野田・寺内を誅して城を明け、岩國へ立退きければ、毛利・野上、頓て城に入替る。　元就重ねて熊谷伊豆守信直・天野紀伊守隆重を差向けらるれば、毛利與三・野上内藏允、城を明けて山口へ引退く。

三八　須々萬城度々合戰の事

元就須々萬城を攻めしむ

防州須々萬の城主山崎伊豆守、〔頭書〕一書に山崎左衛門大夫とあり。同右京進は、元就山口發向の聞あるに依つて、方々の味方に觸れ遣しければ、大内家の侍江良彈正忠・狩野治部少輔、其外所々より多勢馳集りて、須々萬の城に楯籠り、後詰の勢迄定め置き、山口へ中道の通路を差塞ぎたり。是に依つて元就、先づ彼城を攻落し、夫より山口へ發向すべしと評議して、城の様體を窺ひ見よとて、坂新五左衛門尉に、人數千計り添へて、彼表見物として差遣さる。〔頭書〕書異に曰く、坂就清、弘治二年十一月十六日岩國を立ち、翌十七日未明、城近く馳寄す。城兵下合ひて、稠しく相戰ひ、坂、勝利を失ひ、引退きける處に、城中より、白砂子といふ所に、人數を出し置き、坂が退口を取切り、前後より押懸くれば、坂が手の者、多く討死して、坂既に危しと雖も、稠しく相戰ひて、附送りの大將勝屋右馬助を、槍下にて討取りければ、敵、是より引歸りて、坂も難なく引拂ひたり。

〔頭書〕須々萬に於て、坂新五左衛門物見の事、異書に曰く、坂人數千計りにて、須々萬より一里計り此方、白砂子の坂に到り、其下に小川ありける所に、總人勢をば伏せ置き、五十騎にて、城の近邊に到る處に、勝屋右馬允、軍士千計りにて打出で、追

元就再び須々萬城を攻む

拂はんとす。坂一戰にも及ばず、弱々と引退く。勝屋機に乘り、浮鎧にて追詰む る。坂は□□せず、白砂子迄逃延ぶる。敵猶備を亂し、追駈け來る所を、俄に伏兵を起し、追ひ來る敵を打破り、大將勝屋を、馬上より突落せば、城兵叶はず、多勢討たせ乍ら、這々引返したり。尤味方にも、手負討死數多なり。扨討取りたる首三百計り、一々其處に並べ置き、傍に札を立て、毛利之内坂新五左衛門就良□□見馳向遂二一戰一、城中押大將勝屋殿、其外多勢討取畢。右爲二證據一首共殘置所如レ件と書付け立て置き歸りたりと云々。

〔同〕勝屋

右馬允——源右衛門——與三左衛門——源右衛門——九兵衛——善兵衛

元就重ねて、備中守隆元に、宍戸安藝守・熊谷兵庫助並に福原左近將監・桂能登守・志道上野守以下、五千餘騎差添へられ、弘治二年十一月十九日、岩國を打立ちて、翌二十日、彼表へ著陣し、城中少勢なるべしと思侮りて、一時に攻破らんとせられける處に、甲田丹後守、山代の一揆を相催し、二三千にて城中へ加勢して、城兵能く防

ぎける間、毛利勢引退き、暫く休み居たり。

〔頭書〕須々萬を攻めらるべき聞あるに依りて、義長、豫て弘中左衞門大夫隆〔脱字カ〕並に兵三千餘添へて、後詰の爲め、德地迄差出さると云々。

然る處に後詰勢伊加賀左衞門大夫二千計り、其外大内勢一揆交に五六千、總勢一萬計り、前後左右の嶺谷に陣取りたり。

〔頭書〕又異書に曰く、山口より後詰として、伊加賀左衞門大夫、人數二千計りにて馳著け、隆元本陣の近所眞光院といふ寺の上の山に陣取ると云々、

隆元、是は山口より後詰ありと見えたり、城をば旗本を以て押すべき間、各〻は後詰勢を押退けらるべしといはれて、諸方の備を定めらるゝ處に、福原・桂・志道の家臣等、敵案の外大勢なれば、合戰危からん間、先づ此度は引拂はれ然るべき旨、一同に申すに付、翌廿一日、熊谷兵庫助・永井右衞門大夫・渡邊左衞門大夫、殿として隆元陣を引拂はる。

〔頭書〕毛利勢所原木工之助、敵數人討取り、深入して討死すと云々。

〔同〕此時吉田衆所原討死。熊谷兵庫助、數度敵を追拂ひ、家人水落玄蕃を始め、能き兵十七人討死。

敵大勢にて附送れば、熊谷・永井・渡邊數度引返し、稠しく相戰ひ、敵の大將伊加賀左衞門大夫を、渡邊左衞門大夫討取りければ、夫より敵引返すに依つて、隆元恙なく、同日岩國迄打入らる。〔頭書〕敵佛坂比與路より引返したり。

〔頭書〕元就曰く、城手强く相抱へ、其上後詰虫入口るを仕拂ひ、三四里の一騎打の山路を、大勢異議なく引取られたる事、奇特なり。我等は、中々難なく引取る事なるまじ。隆元は、弓矢向、我等より優れりと、感ぜらるゝと云々。

毛利元就、重ねて須々萬を攻落さん爲め、嫡子隆元相共に、翌年弘治三年二月廿七日、岩國を立たる。吉川元春は、其頃石州在陣なりけるが、彼表には人數を殘し置き、防州へ越えて、小早川隆景相共に、一萬餘騎を率ゐて、本道筋を押行かる。〔頭書〕元春、石州より山口發向の時、石州の押として、今田上野介經高に、人數添へられ殘し置かる云々。元就・隆元は、同廿八日、鄕人鬼竹・森田といふ者を案内者にて、佛坂・比與路の坂へ人數を遣し、峯谷つまり〳〵を押しければ、敵悉

元就自ら須々萬城を攻む

く須々萬の城へ引籠る。斯くて元就、三月二日城へ押寄せ、總勢一度に城へ乗入らんとす。狩野治部少輔、去年寄手共、深田・沼のあるを知らず、落入りたれば、今度も亦斯くあるべしと思ひて、城外へ打つて出でたり。元就、豫て足輕共に、竹を編みて、持楯の樣に拵へたるを一つ、又筵菰一枚宛、手毎に持たせられしが、之を沼田へ打入れ〳〵、其上を、軍兵走り渡りて攻付け、狩野治部少輔を、坂新五左衞門、槍にて突伏せ、總勢即時、城の外構を乗り崩せば、山口よりの加勢江良彈正忠、終に降人となれば、大將山崎伊豆守・同右京進、暫く防ぎ戰ふと雖も、叶はずして、甲の丸へ引籠り、妻子を刺殺して後戰死す。其外の者共、命を助けらるべしと、手を摺つて悲むと雖も、元就、豫て下知せられ、此城の者、一人も助けず切殺しければ、首數彼是三千餘に及べり。

須々萬城陷り山崎父子討死

〔頭書〕山崎父子が事、異書に曰く、江良降人となりて、城中彌〻無人なりと雖も、暫く堪へて防ぎ戰ふ。然るに城兵、次第に落失せ、防禦の術盡き、□□□（出入）自害せんとて、檢使を乞ふ。元就より、下城の上は、當家に於て仔細なし、切腹の覺悟に及ばずと宣へども、兎角自殺仕りたき旨、再三達つて申すに依つて、井上四郎兵衞・兒玉内藏允差出されければ、城の麓本條といふ所にて、父子共に堅固に腹を切りたり。元就、彼が武勇節義を守りて、自殺を遂げたるを感心ありて、近所龍門寺に於て、菩提を弔はしめられたりと之あり。

元就大内義長を攻む

三九　毛利元就山口發向附大内義長滅亡の事

三月、毛利元就・同隆元・須々萬表に在りて、大内方の樣子聞合せらるゝに、防府松ヶ崎に、朝倉・鷲頭等二千人計りにて陣取り、右田嶽の城をば、右田右京・野田・波多野以下、一千餘人を以て守らしめ、山口・姫山には、宍戸遠江守を入置き、又石州吉見正賴が押として、陶が家人野上隱岐守・同入道道友・山崎左馬允以下、渡河へ差出し、義長は五千餘にて、山口に控へらるゝ由聞えければ、元就父子、則ち須々萬を發して、元春・隆景と一手になる。然る處に大内方内藤左衞門尉隆春・同太郎・吉田若狹守・仁保右衞門大夫・杉の一族等、多く毛利家へ降らん事を乞ふ。元就其請に任せ、頓て防

府へ陣を寄せらるれば、朝倉・鷲頭、山口へ引入りたり。右田嶽の城兵も、降參する
に依つて、其城に、南方宮内を籠め置かる。又姫山の宍戸遠江守も味方に屬し、吉
見が押に居たる野上・山崎等も、山口へ逃入りければ、義長彌〻勢衰へて、今は元就
退治の義勢迄もなく、只山口に敵を引受け、自害すべしといはれけるを、内藤彈正
忠、一先づ長州へ落ちて、問田を頼まるべしと、再三諫めけるに依つて、内藤彈正忠・
杉民部以下二千餘人にて、山口を□(虫〔引カ〕)退かる。元就、其身は防府に留まり居て、福原左
近將監・桂能登守、其外備・藝の國侍を、山口へ差向けらる。然るに大内方長山入道・
小幡以下三百餘人、山口・築山に殘り居けるを、毛利勢木原兵部〔頭書〕重見因幡が子なり。同次郎兵
衛・藏田市助・兒玉四郎兵衛・桂善左衛門・宍戸善兵衛・山縣筑後守・鵜飼新右衛門等、一
番に乘入り、悉く討取りたり。〔頭書〕或書に、毛利勢の中に、中都四人の衆は、井原・内藤・秋吉見山・保垣とあり。又備後衆檜崎の下に、有地・長田之を載す。
大藏大輔正頼も、同日山口へ押入り、退き後れたる敵を、數多討取りぬ。〔頭書〕三田能登守をば、藝州佐東金
山城番に心當て、山口に殘し置かると云々。元就は、山口掟の爲に、先立ちて赤川・國司・兒玉・粟屋等を差遣し
て、三日以後、父子四人相共に、山口へ打入り、彼地に五三日在陣して、長州所々の

義長山口を脱れ勝山に匿る

降人の人質を取堅め、逃隱れたる敵を搜し求めらるゝ處に、大内義長、長府の勝山
に籠城せらるゝの由、告げ來れば、元就、則ち福原左近將監を大將として、庄原兵部
少輔・福原内藏助・國宗左衛門・長屋小次郎・井上五郎三郎・福原宗右衛門・赤川又七郎・
八幡原六郎右衛門・志道源藏・渡邊源五郎・飯田與市左衛門・兒玉與次郎・同四郎兵衛・
長沼宮内・渡邊新右衛門以下一千餘。國侍には、熊谷伊豆守信直父子四人・阿曾沼豐
後守廣秀・福島三郎左衛門尉・三須筑前守・羽仁右衛門大夫・遠藤左京亮・檜崎右衛門(左カ)
尉・木梨治部大輔・葦(桑カ)原藤左衛門尉等、總勢五千餘騎、長府へ差向けらる。又大友よ
り、後詰する事もあるべしとて、其押の爲に、渡邊左衛門大夫・赤川左京亮・市川式部
少輔經好等に、千餘人を相添へて、下の關へ遣さる。
〔頭書〕或記に曰く、元就公、山口へ打入り給ひ、諸事仕置の沙汰し給ふ。小早川
衆は、外郭四五里が間を警固し、宍戸は、近邊の押として、晝夜山口中を打□(虫入)吉見
正頼・□(虫入)田民部も、同じく山口方岳を打廻りて、不常を糺す。赤川十郎左衛門・粟
屋掃部助・國司右京・□□□(虫入)は、寺社・町中の掟の事を沙汰すと云々。

〔頭書〕或記に曰く、弘治三年三月中旬、元就父子、防府に著陣。然るに天神山・松ヶ崎の木蔭に、敵、陣を構へて、爰彼に見ゆ。宍戸・福原・志道・口羽を先手として、本道筋に向ひ、元就父子は、戰半ばに入替り、打拂ふべしとて、後詰の如く備へらる。扨又隆景の一手に、楢崎・古志・有地を加へて、くけ野より海邊へ向はる。朝倉驚頭、一戰に及ばず引退くを、宍戸・福原、佐渡川の邊迄追詰め、敵殘り少なに討取りて引返す云々。

〔同〕此時木原兵部・山縣筑後と鵜飼新右衞門、槍爭あり。木原は荒口にて、其外違目多く、雲州洗合御在陣の中、粟屋彦右衞門源次郎といひて、十六七の時、木原を討果すべしと仰付けらる。源次郎、兵部が碁を打ち申す處を、一刀に切殺せり。木原事口の者にて、討果す事なり難し。粟屋、此内も手柄仕候へば、一定仕澄すべし。彼内々別けて申合せ、第一若年なれば、彼者討手を承るべしとは、木原思寄るまじとの事にて、粟屋に仰付けられたるとなり。

斯くて福原並に國侍熊谷・阿會沼以下、勝山の城を取圍んで、攻むると雖も、城地嶮

岨なる上、而も城兵勇を勵み、堅固に城を抱へたり。〔頭書〕粟重左衞門尉を目代として、先手に定めらる云々。元就、此由を聞かれて、則ち福原等が方へ、城を拔くの術をいひやらる。福原其旨に任せて、城中へ矢文を以て、内藤彈正忠隆世、〔頭書〕一書に内藤下野守とあり。陶全薑に與し、叛逆の者なれば、切腹させらるべし。義長に於ては、別に遺恨なき間、一命を助けて、豐後へ送り返すべしと言ひ入れければ、義長は、兎角一所にて、自害すべしといはれけれども、内藤・杉等、樣々に申宥め、義長をば、長府の正福院へ移し退け、〔頭書〕或書に曰く、義長、長福院の後、正山寺といふ寺へ移り居られしとあり。其後内藤隆世切腹を極め、福原に檢使を請ひければ、則ち粟重左衞門尉を差遣し、内藤彈正切腹す。福原、其後長福院へ押寄せ、義長も切腹せらるべき由、元就より申來れり、速に自害あるべしといひければ、義長、覺悟したる事乍ら、福原に出拔かれし事口惜しとて、甚だ怒らるゝと雖も、力及ばず、頓て行水にて身を清め、終に自害せられたり。〔頭書〕或書に、義長自害三月十八日と見えたり。吉弘右衞門大夫・橋爪美濃守・安田入道・杉民部等の宗徒、續いて皆切腹す。又陶が家臣野上隱岐守房忠、全薑が末子鶴壽丸、六歲なるを、山口に隱し置きしが、敵、よも助けじと思ひ、長福院へ抱き來りて刺殺し、

防長兩州全く元就に歸す

自身も共に死したり。

〔頭書〕或書に曰く、野上、長府春音院といふ寺に來りて、長屋小二郎を賴み、檢使を請ひて自害すべしといふ。福原聞きて、足下は陶が臣なり。然るに全薑戰死の時は、其覺悟に及ばず、今義長死期に至りて、殉死の事、筋目違ひたり。切腹無用なりといふ。野上が云く、陶入道、嚴島渡海の時、口軍下に從ひ、存亡を俱にすべき事、勿論なりと雖も、其時石州吉見が押として、山口に殘し置き、入道が最期に居合はさず、心ならず今日迄の命を存命たり。晴賢存命ならば、今義長と共に自害すべし。然れば某主人全薑が、義長の爲にする殉死に代り、且某、入道に對しては舊恩の屆とも存じ、旁、思究めたる由云ひ切り、自害したりと云々。

其後福原左近將監義長竝に切腹の者共の首を、山口に取歸り、元就父子四人の實檢に入るれば、元就、長福院に於て、義長の爲に葬禮を執行ひ、墳墓を營ませらる。斯くて義長滅亡の後は、防長悉く元就の手に入りぬ。又豐前の長野・高橋・宗像等も、使を以て、味方に屬して馳走すべき由申越す。防長平均しければ、山口鴻の峯の城に市川式部少輔經好、下の關の城に吉見大藏大輔正賴、豐前門司の城には、仁保右衞門大夫を入れ置きて、分國の仕置し、元就父子四人、四月二日に、岩國迄打入り、夫より元就・隆元は、藝州吉田へ、元春は新庄へ、隆景は沼田へ歸陣せらる。

元就益田藤包を討たんとす

四〇　所々一揆蜂起幷益田越中守降參の事

同十一月、陶入道全薑が舊臣深野某は、防州富田の近鄕を掠め、杉治部大輔が家人柳井が一族は、同國德地の邊に集り、一揆三千餘人を相催す。又內藤隆世が家人葛西、其外民部が家人問田が殘黨共、所々の一揆を催し、山口鴻の峯の城を攻むべき企する由、到來あるに依つて、同月十六日、三家より軍士を遣して、之を討亡さるゝに、一揆原叶はず、其中の大將、或は自害し或は降參し、其外皆逃去りければ、防・長兩國早速靜まりぬ。爰に石州益田越中守藤包〔頭書〕法體の後は、大內家の旗下なりしを、近年宍戸安藝守、毛利家に屬し然るべき旨、度々意見すと雖も、益田、曾て大內家一味の約を變せず。是に依つて、元就益田を退治せらるべしとて、父子四人相共

元就益田藤包と和平す

に、石州へ赴かる。藤包此由を聞きて、三隅の高城は、地嶮岨にして、究竟の要害なれば、爰にて敵を防ぐべしとて、家城を出でて、三隅の城へ引籠る。元就、一萬餘騎を引率して、既に攻戰を催さる。然る處に、吉川元春いはれけるは、益田は義理深き勇士なれば、和平を以て本領安堵せしめ味方に屬させば、向後異心なく、石州の敵を押へ候はんといはれければ、元就も同意せられ、兎も角も元春計らはるべし。然れば長安入道、先年家城を明退きて後は、益田を頼み居るの由、此者當家に於ては、遺恨最も深き間、益田降參の驗(しるし)に、長安入道を討つて出さば、本領安堵せしむべき旨いはれければ、元春則ち使を以て、此旨を城中へ言ひ送らるれば、益田悅びて、毛利家服從の事、豫て宍戸安藝守より、度々意見をうくると雖も、義長存生の間は、大内家一味の約を違ひ難く、彼家滅亡の上は、降を乞ふといふとも、許容あるまじければ、當城に於て一戰を遂げ、自害すべき覺悟に候處に、本領安堵の事、大望之に過ぎずとて、則ち長安入道が首を切つて、元春の方へ贈りたり。之に依つて本領相違なく益田に與へらる。又吉見正頼をも、本領に安堵せしめらるれば、正頼、頓て吉

防長藝備悉く元就の有となる

田に到り、種々の重寶を元就に獻じて、謝詞を述べたり。〔頭書〕正頼□忠義長州安武郡を給ふ。是より防長・備・藝、悉く元就の有となりて靜謐す。

〔頭書〕或書に曰く、毛利元就、石州小笠原退治の爲め、出羽庄河本邊に打出で、溫湯の城へ取懸らるべしとの評定之ある處に、此長安入道、出家一人を使として、某事、尼子一味の志淺からず。此度毛利家と一番に鋒を交へ、勝敗を試み、自餘の味方に先立ちて、其軍忠を顯はしたき念願に候條、願はくは溫湯發向を閣かれ、先づ某が居城へ御馬を向けられ候へかしと、申入れたりと云々。

〔同〕此說、信ずるに足らず。元就石州發向は、後年永祿元年五月なり。長安入道滅後翌年なり。其上彼の入道、長安城をば、去る廿三年毛利家へ明渡し、其後は、益田を頼み居たる由なり。

藝侯三家誌　卷二終

所々一揆蜂起并益田西中守降參の事

藝侯三家誌　卷三

一　石見國出羽合戰の事

吉川元春小笠原長雄討伐

永祿元年二月初旬、石見國溫湯の城主小笠原彌次郎長雄、尼子晴久と一味なるに依つて、渠を退治の爲め、先づ吉川治部少輔元春、石州發向として、藝州新庄日之山の城を打出で、其勢一千餘騎、石州出羽へ出張せらるれば、出羽中務少輔元實三百餘騎・福屋式部大輔隆包一千五百餘騎、追々元春の勢に相加はる。（頭書）此時元春、下出原紀伊守が館に居らる。然るに同國上出羽に在りける本庄越中守、小笠原長雄へ、使を以て言ひ遣しけるは、元就父子數萬騎を率ゐ、近日其表出張の聞あり。溫湯若し元就の所存に任せらるれば、某が城を攻むべしとの用意の由なり。然るに元春、頃日小人數にて、當國出張の事、尤も貴方と某申合さば、一戰に勝利を得べしと雖も、對々の人數を以て、危き働如何なれば、大軍を以て、安々と打勝つべき爲め、雲州へ早打を以て、注進せしめ候へば、晴久より、牛尾遠江守・宇山飛驒守・湯信濃守に五千餘騎相添へ、來る十五日、當地迄差出さるべしとの返事に候。然れば其刻貴方も出羽出張せらるれば、兩方より挾みて、元春を討取るべしと言ひ送る。長雄悅びて、則ち其約を堅め、相圖の日限を待ち居たり。頓て晴久、小笠原が後詰として、牛尾・宇山・湯以下五千餘人差出され、其勢、本庄が上出羽の館に到れば、小笠原も家城を出で、後詰勢と一手に成る。斯て石州方、彼此八千餘騎を二手に分けて、吉川元春の陣下出羽へ寄せ來る。先陣本庄・小笠原、二陣牛尾・宇山と定めて、同廿七日、先陣の勢三千餘騎、一番に押寄せたり。藝州勢は、先づ自國なるに依つて、福屋式部大輔・同彥太郎千五百餘騎先陣に進みて、元春は千餘騎にて二陣に備へらる。出羽中務少輔は、三百餘騎にて、弱からん陣を救はん爲めに控へたり。斯て福屋父子、元來小勢なれば、柵の木を結ひ、之を便とし待懸くる。本庄父子柵を破らんとする處を、福屋勢散々に射れば、敵少し漂ふ處を、福屋一文字に突いて懸る。本庄・小笠原、忽ち崩れて引退

尼子晴久の後詰

く。牛尾遠江守一千計りにて、入替りて相戰ひ、既に福屋を破らんとする處に、出羽元實來つて、入亂れ戰ひしが、元實も終に押立てられぬべく見ゆれば、宇山・湯四千餘、爰を揉破るべしと下知して、元春の本陣へ切つて懸る。　吉川勢渡合せ、辰の上刻より、午の刻迄爭ひ戰ふ。　爰に杉原播磨守盛重、元春へ加勢の爲め、八百餘騎を率ゐて、備後國神邊より、石州へ打出でしが、道にて、雲州勢多く發向したる由聞きて、終夜急ぎけるが、戰ひ半ばなるに、鞭鐙を合せ馳せ來りたり。　敵陣に、之を吉見よりの加勢と見て色めけば、元春自ら眞先に進み、采配を振つて、味方を進めらるれば、雲州悚へず引退く。　本庄は猶踏止りて戰ふ處へ、杉原馳著き横合に駈けて、小笠原・本庄を突崩す。　敵逃行くを追駈け〳〵、百五十餘人討取る。　味方小勢なる故、長追せず引返す。　此の杉原播磨守盛重事、元來山名宮内少輔忠興が家老なり。　山名忠興、去る天文十九年、大内家の爲に、家城備後國神邊の城を奪はれてより、尼子を頼み、數年雲州に居住せしが、元就陶入道と手切の後、忠興達つて、元就に申斷り、去る弘治元年、再び家城神邊へ入る處に、程なく病に依つて死す。　忠興子なく家斷絶す。　是に依つて元春肝煎を以て、山名が四番目の家老杉原播磨守盛重に、忠興が領地殘らず相續させられ、是よりして盛重、神邊の城に入りて、毛利家に屬し忠志を勵めり。　斯て毛利元就、石州へ後詰として、尼子晴久多勢を向けられ、合戰ある由聞かれければ、熊谷伊豆守信直・同兵庫助・三須筑前守房清・天野民部大輔以下三千餘騎、石州へ差向けらる。　其外當國の益田越中守・佐波常陸介二千餘騎、元春の陣へ馳加はれば、牛尾・宇山・湯は、雲州へ逃歸らんとして、太田邊迄引退けば、小笠原・本庄、各〻家城へ引籠りぬ。其後元春、小笠原押として、山吹の城に、刺東治部少輔・高畠源四郎、並に元春家人山縣小七郎を籠めて、守らしめらるゝに、小笠原も、山吹の押として、此近邊日和の城に、寺本伊賀守・同玄蕃・河邊讃岐守などいふ家人、多く籠置きたり。（頭書）西田表打廻として打出づるといへり。然る處に同年三月七日、山縣小七郎三百餘にて、養老坂近邊の民家を放火し、日暮に及びける故、引拂はんとする處に、日和の城より、寺本以下駈付け、稠しく戰ひけるが、寺本伊賀守、山縣小七郎を突伏せければ、同玄蕃則ち首を討取る。　其外伊志彦九郎以下數多討死す。　味方へも、

日和城陷る

首四級討取ると雖も、其日の大將山縣小七郎、討死したる故、殘る者共、皆山吹の城へ引入りたり。　其後吉川元春、杉原播磨守盛重に、日和の城を圍み攻むべき由命ぜられければ、盛重卽ち勢を率ゐて、同年三月廿四日、日和の城へ押寄せて、數日城を圍み攻むる處に、寺本伊賀守・河邊讃岐守、終に防ぐ事能はずして、城を明けて降りぬ。

〔頭書〕異書に曰く、石州小笠原彈正、其外同國在城の國士申合せ、尼子晴久へ申送る趣は、毛利元就、近年大内家と梓楯をなし、既に陶尾張守をば、去年嚴島に於て討果し、其後大内義長を、山口より追落し、終に長府に於て討亡し、防・長二箇國、思の儘に切隨へ、頃日又豐前・筑前へも手遣仕り、威を近國に振ひ候。　是に依つて大友宗麟、分國の勢を盡し、既に大軍を以て、豐前門司關に於て、數日合戰を挑み勝負半ばに候。　是れ幸の時節に候へば、不日に當國へ御馬を向けらるれば、吾等先頭に進みて、吉田郡山元就本城を乘崩し、夫より防・長の間に發向あるに於ては、元就前には大友の口軍（虫〔大カ〕）を引受け、口（虫〔後カ〕）には味方多勢を以て、押懸くるに於ては、元就前後に大敵を受け、進退途を失ひ、味方の勝利、掌の中に候。　急ぎ領國の御勢を催され、不日に御出馬希ひ奉る由、言ひ送りたりと云々。

但此說信じ難し。　毛利・大友取合は、永祿四年より起る。　此節の事にあらず。

又永祿四年、大友、門司の城に於て合戰の時は、本城と小笠原、共に毛利家に降りて、忠志を勵めり。　且其頃は、元就父子元春・隆景、共に雲州在陣にて、門司關へは、隆元計り雲州より下りて、合戰あり。　旁、不審。

〔頭書〕山縣小七郎系に云ふ

- 康政（山縣越後。於吉和討死。）
  - 就政（越後。後號向原三郎左衞門。）
  - 康長（越前。始木工之助。世稱大越前。）
  - 康基（日同）
  - 小七郎（於日和討死。）

二　元就父子石州發向附尼子後詰并小笠原降參の事

元就父子石州發向附尼子後詰并小笠原降參の事

元就等溫湯城を攻む

同年五月二十日、毛利元就・同隆元・小早川隆景、石州へ發向せらる。〔頭書〕或說に云、元就此時石州出羽庄河本邊に陣取り、溫湯發向の評定ありと云々。吉川元春は、先達つて彼國在陣なりける故、父子兄弟一つになり。總勢一萬二千餘騎にて、同廿四日溫湯の城を取圍む。隆元は、城の尾頭笠取山へ打登りて陣取られ、隆景は、西の方小栖山に備へらる。〔頭書〕或書に、隆景は、雲州より後詰の押として、大田近口岡屋原といふ所に陣を屯し給ふと之あり。元就も西の方に本陣を居ゑられ、又城より一里計り北に、赤城といふ端城あり。敵五百計り籠り居る、其中間を取斷つて、元春、陣を居ゑらる。溫湯の城の向ひ青岩寺の城には、尼子よりの援兵八百餘騎楯籠る。斯くて同月晦日、溫湯の城より、赤城へ加勢の者三百餘人、手毎に槍長刀を提げて、旗谷といふ所まで打出でたるに、吉川勢粟屋源藏・森脇市郎右衞門、元就の近習瓜破といふ者、彼是四百計りにて切懸れば、敵叶はず、後の會下谷へ引退く。森脇市郎右衞門追駈けて、大將河邊八郎左衞門を討捕りたり。

〔頭書〕此頃吉川家にも、河邊八郎左衞門といふ者あり。大野合戰の時檢使として遣さるゝ處に、尼子勢俄に起る。河邊白猪の空穗を付け、河中に立て防矢する處に、弓の弦切れたる處を森脇市正馳寄り、終に討取りたり。一子を一房丸といふ。此八郎左衞門は、小笠原家の河邊八郎左衞門とは別人なり。石州の河邊は吉川家にて、河邊治口兵衞先祖といへり。

同六月朔日、敵、赤城を明けて、溫湯の城へつぼむ。又尼子の援兵も、青岩寺の城を明退きて、大田迄引歸る。斯くて石州尼子の味方共、藝州勢溫湯の城を取圍みて、沒落遠かるまじき旨、雲州へ注進す。是に依つて尼子晴久、領國の兵一萬八千餘騎を從へ、七月五日、小笠原が後詰として、石州へ出張し、江の河を隔てゝ陣取らる。晴久、兼ては琵琶頭といふ山に、陣を居ゑんと巧まれけれども、元就、其機を察して、其上に人數を入置かれたり。斯くて雲州勢、先づ河上の松山の城を攻退け、即ち其城を本陣として、其後船筏にて、江の河を越ゆべしとて、同十四日、總勢松山へ押寄せ、関を作る。當城には、福屋隆包、其臣呻村下野守に、兵六百餘を添へて籠置きしが、敵を間近く引受け、散々に射、進み兼ねたる處を、一同に突いて出で、寄手を數多討取る。城兵も、森脇右馬允以下、多く討死す。此城、輙く落つべしとも見

えざれば、雲州勢、先づ虎口を引退きて、陣を堅め居たり。扨晴久は、五日一處に陣を張りて、何卒小笠原を見續ぐべしと、詮議せらるゝと雖も、日本に三つの大河の名を得たる江の河なれば、渡るべきやうなくして、日を送らる。然る處に、本庄太郎兵衞尉・牛尾太郎左衞門二人、爰にて徒に日を送る事やあるとて、只二人、河へ打入らんとせしが、宇山飛驒守、頻に制して止めたり。同十九日、尼子晴久、斯く徒に對陣して、士卒を苦めて益なしとて、鷹取山に引上げて、陣取られけるが、又彼山をも引拂ひて、大田迄打入れられたり。小笠原長雄、是に力を落し、小早川隆景に賴みて、終に降參したり。元就父子四人は、其邊の仕置を下知して、歸陣せらる。（頭書）長雄、三原の閑阿彌寺へ下城せらる。

小笠原長雄降る

三　福屋隆包毛利家に背く事

同二年、小笠原長雄降參せしかば、渠が領內、溫湯の川より城地の方は、悉く元春に附與せられ、小笠原長雄へは、伊田・はづみ二箇所を、替地に給はる。此二箇所は、福屋隆包が領地なれば、福屋へは、邇摩郡の內にて、替地を本領に倍して與へられたり。福屋、是に心行かず思ひけるに處、小笠原、家人を替地へ入部せしめ、隆景よりも、檢使を添へられたるに、隆包、若黨數多遣し、小笠原が家人、並に隆景よりの檢使を追立て、馬物具を剝取りたり。隆景此由を聞かれ、大に怒りて福屋を誅伐すべしといはれけれども、元就、樣々言ひ宥められければ、隆景、其儀を思止まられたり。重ねて元就、小早川・福屋互の恨を和げ、眞實の親みをなすべき由、命ぜられければ、兩人其旨に任せて、福屋則ち德田刑部少輔といふ者を、隆景の居城沼田へ差出す。隆景よりは、磯兼左近を、福屋が在所石州音明へ遣さる。

（頭書）福屋、再び逆意を企つべしと思ふ折節、元春より、隆包へ、次郎を人質として差出すべき旨、いはれければ、福屋則ち領掌して、用意の間、名代神主越後守を、吉田へ遣し、其間に尼子へ內通し、鰐走に牛尾太郎左衞門居たるに加勢を乞ひ、河山・松山の城へ、雲州衆を引入れ、剩へ福屋次郎をも、彼衆へ渡したりと云々。

福屋隆包逆意

福屋隆包尼子に内通

然りと雖も福屋隆包、終には隆景、其事を忘らるまじとや存じけん、毛利家多年の好を變じて、尼子へ歸服したり。斯くて福屋隆包、毛利家と手切の爲め、近里近郷を放火し、暴逆を振ひけるが、同國福光の物不言の城に、吉川和泉守經安並に都治三河守隆行、纔の勢にて籠り居ける處に、福屋が郎黨神村下野守・福屋越中守・千代延藤左衞門より使を以て、都治參河守方へ、福光の城は、雲州と福屋との中間なれば、兩方より挾みて攻むるに於ては、籠城叶ふまじ。和泉守は、吉川の一族なれば、定めて別心あるまじ。隆行には、是非隆包と同心せられ然るべき旨、言ひ送ると雖も、都治曾て承引せず、隆包毛利家の太刀影を以て、尼子大敵の難を免れし、其恩を忘れたる事、侍の本意を失へり。何樣當城發向の上、一戰の刻、申談ずべき旨、足輕を以て返事し、彼使をば首を刎ねたり。〔頭書〕此使の者、右の書狀と共に、藝州新庄へ送りたりと云々。隆包此由を聞きて、其儀ならば、一人も殘さず攻殺すべしとて、尼子へ加勢を乞ふ。晴久、湯信濃守に、三千餘を添へて、石州へ差向けらる。福屋が手勢を合せて五千餘騎、福光の城を遠攻にしたり。城主經安・隆行は、寄手急に攻付けざるに依つて、家人共多く山下へ下し、休息させけるに、城中に野心の者ありて、敵に内通をやしたりけん、足輕大將と覺しき者、二百計りにて、城山の尾頭より、不圖寄せ來りたり。城兵纔數十人、俄に周章す。其頃迄、中國に鐵炮多からず。當城にも、只一挺ありけるが、吉川和泉守、鐵炮に未だ練磨はせざれども、敵を七八間程に近付けて放掛けしが、敵の大將の心元を、後へ打拔きければ、俯伏に倒れて死す。敵是に肝を消して、色めく處へ、經安槍を提げ、十餘人の兵を前後に立て、數百人の中へ突き懸れば、寄手忍びず、山下へ颯と引退く。其後よりは、此城には鐵炮の上手ありとて、敵敢て攻め近付かず。斯くて福光の城を、敵取圍むの由、吉川・都治、藝州へ注進しければ、毛利元就・同隆元・吉川元春・小早川隆景、其勢八千餘騎にて、十一月下旬、石州へ發向せらる。元春先陣として、宍戸安藝守隆景・熊谷伊豆守信直、相共に二千餘騎、大江の市迄打出でられ、元就・隆元・隆景は、六千餘騎にて、河下の渡口迄、出張せられければ、福屋隆包、松山の城へ引退き、湯信濃守は、湯の在所迄逃入りたり。

元就等福光の城を援く

〔頭書〕或記に曰く、福屋、元春の居城新庄へ、軍士を差向くるの由、物聞の者より注

進せしむるに依りて、父子相談ありて、森脇春近に、人數三□□□（虫入）添へ、彼が住所大朝村へ差出さる。又堺備後守春家に、軍士二百計り差添へて、日之山の加勢として、新庄へ差返（遣カ）さる。朝□□□（虫入）て、森脇敵軍に行逢ひ相戰ひ、終に敵を追散らす。板垣内藏助、大塚妻鹿原へ逃ぐる敵を追駈け、福屋三郎左衞門を、手の者板垣與四郎討取り、下市木折敷坂といふ所にて、板垣弟九兵衞、福屋が弟五兵衞を組討にし、又大塚村關ヶ平にて、武者一人を討取り、都て其日、味方へ首五十餘討取り、片山河原に掛置く云々。

此時經安、まのりそねといふ所へ打出で、槍仕り、名譽の合戰の由。

〔頭書〕或書に、中の村城に於て、吉川勢綿貫左馬助・宍戸が軍士江田木工允・小瀧七郎右衞門、眞先に城へ乘入り、數人討取り、戰死すとあり。

〔同〕中之村に於て、福原が組福原左京・門田宮内（問カ）・長屋小次郎・國司雅楽・宍戸善兵衞・波多野源兵衞・桂善左衞門・永井右衞門・長左衞門・兒玉四郎兵衞・福原彌二郎・兒玉木工殿・平佐東助・赤川又七郎等、勇み懸りて、城中へ乘入りたりと有之。

元就等中之村城を陷る

四　石州中之村城沒落の事

福光の寄手引拂ひしかば、元就父子四人、同十二月上旬、福屋が端城中村山城守が楯籠る中の村の城を取圍まる。吉川元春先陣に進み、元就後陣に詰懸けて、下知せらるれば、吉川勢、射れども切れども、少しも疼まず、二重の柵の木を乘越え、大手の門を打破りて、城中へ込入りたり。中村山城守も、勇剛の者なる故 稠しく防戰すと雖も、宍戸・熊谷が勢も、相續いて押入れば、山城守終に叶はず、三百人計りにて、搦手より切拔け、矢上の城へ逃入り、矢上筑前守と一手になる。城に殘れる者を、悉く誅戮して、首數八百五十餘を得たり。三家又、矢上の城へ寄せらるれば、矢上筑前守・中村山城守、又當城をも明退きたり。是に依つて元就・隆元・隆景は、矢上の城へ移り、元春は、日和の城に陣を居るて、越年せらる。

〔頭書〕此合戰に、吉川勢綿貫左馬助、大力にて、鐵の大槌二十貫目に誘て持ちたるが、是にて門の扉を打破る。其時内より、綿貫が兩眼の間を、槍にて後へ突貫く

に依つて、終に死したり。宍戸が家人江田木工允討死。其外手負數多有之云々。

〔頭書〕一書に曰く、宍戸が手の者江田木工允・小瀧七郎右衛門・吉川勢綿貫左馬助、眞先に乘入り戰死す。福原が組福原左京・門田〔問カ〕・長屋・國司・宍戸善兵衛・波多野・桂・永井・長・兒玉・殿平・福原彌二郎・赤川又七郎等、城へ乘込み、相働きたり云々。

〔同〕吉川勢の中、井上又左衛門・春山何某も、此時討死すと云々。然れども井下は、翌年六月、山吹の城へ兵糧送り、警固の十八人の中に加はり、別府にて武功を顯せり。旁〻此說用ひるに足らず。□此時討死は、井上又左衛門なりとなり。書寫の誤を以て、疑を傳ふるか。

元就松山城を攻む

五　石州松山落城の事 井福屋隆包漂泊の事

永祿三年二月二日、元就、河上の松山の城を攻むべしとて、父子四人、大江へ陣を移され、同五日、松山の尾頭とうとことといふ山に、陣を寄せらる。〔頭書〕今年二月十□日、元就陸奥守に任じ、從四位に敍し、公方御相伴衆に加へらる。此山は、元就豫て、福屋終には心變すべしと察せられ、松山を攻めらるべき時の爲に、此邊を繪圖にさせて見られしが、此度とうとこを陣場に定められたり。熊谷伊豆守は、井下の渡を越えて、十合に陣を取る。扨松山の城には、福屋次郎・神村下野守、並に尼子よりの加勢彼此一千五百計り楯籠る。〔頭書〕尼子よりの加勢牛尾太郎左衛門と云々。同六日、寄手總軍一萬餘騎、一同に鬨を作れば、城中總懸りと思ひて周章す。元就采配を揮つて、味方を進めらるれば、諸勢勇みて、櫃の城とて、取出のありけるを乘取らんとす。城兵も專ら防ぐと雖も、吉川勢井下新兵衛、一番に乘込み、一番に首を取り、今日の一番乘・一番首と名乘れば、熊谷が家人末田勘解由、續いて分捕して、吉川・熊谷兩手の者共、先陣に進んで切入れば、櫃の城をば、難なく乘取りたり。

櫃城陷る

〔頭書〕或說に云く、井下新兵衛事、本文に吉川勢とあり。井下家の事、元來福屋の家中にて、福屋家より別れ、領内井下に居住して、井下と名乘り、隆包斷絶の後、吉川家へ出でたり□いへり。□□にて吉川勢に加はり働きたるは、福屋敗亡せざる中に、降參したるにやと云々。井下の鄕の事、本文にも、井下の渡といふ事あり。

〔頭書〕異書に曰く、此時寄手の中より、高聲に、本城𨻶(あつかひ)になりたり、猥に城へ押入るなと、聲々に呼ばらせければ、城兵聞きて不審し乍ら、自然と矢鐵炮打出す事、少したるみたる虚に乘りて、寄手ひたりと城へ乘付けたりと云々。

其外香川左衞門尉・飯田越中守・山縣筑前守・遠藤左京亮・入江・羽仁・山田以下、後れ馳せに切入ると雖も、敵或は討たれ、或は松山へ逃入りたれば、此等が手には分捕なし。

三吉式部少輔廣隆、櫃の城にて、手に合はざる事を無念に思ひけるが、松山の城へ一番に押寄せ、聲を揚げて攻上れば、總軍備後勢に先を懸けられじと、我れ劣らじと切岸に付き、一度に乘崩さんとす。城兵も命を惜まず防戰すと雖も、終に吉川元春の攻口大手の門破れて、森脇采女正駈入り、一番に首取つて來る。二番境孫次郎、能き首取つて歸る處に、後より又分捕して、一人來るを見て、誰も一つは取るなれば、我は二つ取るべしとて、又城中へ馳入る處に、城中より、究竟の兵七八人、打出でけるに行逢ひ、境渡合ひ戰ひけるが、胸板を突き拔かれ、終に討たれたり。〔頭書〕吉田勢にも、福原が手の者共兒玉三郎右衞門・國司右京・桂右衞門大夫等、一番に乘入ると云々。山縣四郎右衞門主從二人分捕す。其外小河内石見守・小坂越中守、比類なく相働き分捕す。香川左衞門尉光景、深入して戰ひしが、緣の上より突き落され、起上るべき隙なければ、空しく死して居たるを、敵首を取るべしと、二刀迄切る折節、門外より、味方名乘りて切入りけるに力を得て、俄に起上り、當の敵の諸膝を薙ぎ倒して、則ち首を取る。

〔頭書〕小河内石見元春公狩雪三十六人之内石見――久兵衞隱岐就賴附屬

或說に云く、朝枝市之允事、實は武田左近將監の子、始め小河内石見養子たるに依りて、小河内久兵衞と稱し、後朝枝を繼ぎ、朝枝市之允と稱し、其後、因幡守と改む云々。

此石見事、市之允、朝枝を繼ぐに依りて、其後小河内家を繼ぐか。詳ならず。

吉田勢には、福原宗右衞門・渡邊甚右衞門・内藤六郎右衞門・桂善左衞門・三戸小三郎・井上木工之助など分捕す。扨味方の討死は、藝州佐東の福島三郎左衞門、吉田勢に福原十郎三郎、吉川勢に境孫次郎・井尻又右衞門、宍戸が手の者江田市允・市原四兵衞以下百餘人、其外雜兵數多討たれたり。扨諸勢城中に亂れ入りしかば、城兵竝に雲

松山城陷る

州よりの援兵迄、悉く討死せしかば、福屋次郎・神村下野守、終に自害して城落つる。寄手へ得る處の首數、一千七十三之を討取る。福屋隆包は、松山の城、利を失ふ由を聞きて、興醒めて居たりしが、急度思寄りけるは、吉川元春の居城藝州新庄には、宗徒の者をば、皆此表へ召具せられてあるべきなれば、甲斐々々しき者あるまじ。〔頭書〕或書に曰く、新庄へ福屋勢働の時、元春、堺備後を、新庄留守居加勢として、差戻さる。森脇彌三を、石州堺大塚大朝に差置かれ、彌三相戰ひ、敵を退くと云々。此隙に軍兵を遣して、攻崩さんに、難き事あらじと思案して、則ち福屋が抱の城雲井・丸原・神宮寺より、兵千餘人を遣して、元春の居城日の山の麓へ働かせ、放火せんとする處に、城代森脇和泉守等、大塚迄駈出で、即時に討崩し、首百三十餘討取りければ、殘兵皆散々に逃失せたり。〔頭書〕此時森脇、石州市木迄敵を追討す。此由使を以て、元春の陣所河上へ注進しければ、元春聞きて、感賞せらる。〔頭書〕戸津川佐渡守を以て、河上へ注進するなり。斯くて元就は、元春を先陣として、隆包が居城音明を攻むべしとて、阿刀の市迄打入られけるに、隆包、一族郎黨を集めて評議せしが、味方皆氣屈し力盡きたれば、重ねての防戰なり難し。一旦城を開き、尼子を頼み、重ねて國入あるべき由、何れも申すに依りて、隆包急ぎ夜中に城を落ち

福屋隆包松永彈正を頼る

て、濱田の湊細越といふ山に隱れ居る。此由頓て注進ありければ、元春、續いて押寄せらるれば、隆包其子彦太郎相共に、侍五六人にて小船に取乘り、雲州へ逃行きしが、其後松永彈正を頼みて、大和國へ上り、終に志貴の城に、あるもなきが如くにて居たる由聞えたり。隆包が家人福屋兵部少輔以下千餘人、和田の神宮寺に殘り居たるを、方便りて降參せしめ、其後元春、新庄に於て之を殺さる。其内神主内藏丞・稻光内藏大夫兩人は、能く働きけるに依つて、元春其勇を感じ、命を助け、給仕せしめらる。

〔領書〕吉川内板垣與四郎・同弟九兵衞・福屋三郎左衞門・同弟五兵衞といふ兄弟を、大塚妻鹿原にて討取りたりと、或書にあり。此時石州市木村迄、敵を追詰め迫合あり。今に至りて、市木村軍場とは、此合戰の所なりと云々。

〔同〕福屋兵部以下降參して、新庄迄召連れられ、二月十六日相圖を定め、同時に宿々へ、手宛の勢押寄せて、悉く討果す。其内神主・稻光兩人は、大朝の養性寺に居たるが、稻光弓の達者にて、熊谷が手杉原太郎左衞門を、一矢に射殺し、其外數人に

手を負はせ、餘り手柄の働仕りたる故、元春より助け置かるべき□て、粟屋源三・森脇市郎右衛門言宥めて引取る。又千代延藤左衛門も、別所に居たるが、是も大に働き戰死す。其外は珍しき覺悟の者無之云々。

虫入

六　別府合戰井新原軍の事

同年六月、石州山吹の城に在番しける刺束治部少輔長信・高畠源四郎より、毛利家へ注進しけるは、城中糧乏しく、本城人數を出して、山吹への通路を塞ぎ、敵城下へ相働く由告げたり。

〔頭書〕長信（石州刺賀城主）―元信（治部左衛門　長信自害之時幼少、元春御取立、成仁之上、毛利家被二差出一。其後從二輝元一安國寺へ被二附置一。妻竹下左馬助娘。）―信重（治部左衛門）―信正（治部左衛門）
　―就信（治部左衛門）

是に依つて同月下旬、元就は北池田、元春は津賀の養老坂迄出張せらる。佐波常陸介・出羽次郎左衛門、其外方角の國士に命じて、山吹の城へ兵糧を入れらる。又酒、野菜などを、商人に武士を添へて、城中へ送らせらる。此警固の武士、藝・石の人々番に作りて、商人を送る處に、元春之を送らせらるゝ番に當りて、商人等は夜半に打立ち、少し後れて、元春の近習二宮木工助・山縣四郎右衛門・井上又左衛門・二宮七郎兵衛・山縣源右衛門・田中新兵衛・佐伯源左衛門・岡崎新十郎、其外合せて十八人、〔頭書〕一書に、十八人の内に井上四郎右衛門之を載す。三里計り引下り、外侍三百計りにて、商人を送る。漸く二三里程行きて、外侍の中より十八人の者共へ、尼子勢河添美作守を大將として、總勢二千五百餘人、〔頭書〕或說、總勢三百人程といへり。中途に待伏せする由聞ゆる間、今日の送りは止めて歸るなり、各〻も引返され然るべき由、言ひおこせたり。

〔頭書〕別府といふ所に待伏す。岡崎七郎太郎・山縣小七郎、別府にて討死と、或記に見えたり。然れども非なり。岡崎は、新原へ物見として遣され、彼處に於て討死するなり。

十八人の者共、道の邊の石に腰掛けて、此事詮議しけるが、二宮木工助、我々商人共を送るは、斯樣の時の爲にてこそあれば、某に於ては、今日討死すべしといひければ、

山縣四郎右衞門も、是に同意しければ、殘る者共、何れも是に隨ひて、纔十八人、死を一途に定め進み行く處に、鳶一つ飛び來りて、二宮木工助が左の肩を蹴つて飛去りぬ。二宮悅びて、伏兵のある事を、軍神の告示さるゝなるべしと、一入勇みて進み行く處に、道の傍の田の水濁り、大勢の足跡之あるを、二宮見付けて、敵此處に待伏すべき間、各、油斷あるまじといふ時、案の如く伏兵二百五六十、一度に起りて打つて懸る。二宮、此所は平地にて、多勢と戰ふ地にあらず、向の小高き丸山、究竟の所なりとて、十八人走登りて待懸けたり。河添美作守、小勢とて侮る事なかれ、備を亂さず、四方より攻登るべしと下知して、彼山を取圍みて、聲を揚げて攻登る。十八人の者共、十八張の弓を揃へて、散々に射れば、敵手負死を致す者多し。（頭書）或說に、弓十六挺、槍二本と云々。されども敵、手負死人を乘越え、間近く攻登りければ、二宮木工助、槍を提げて、名乘り懸けて突懸れば、敵十間計り引退き、頓て又攻登れば、射拂ひ突崩し、數刻攻め戰ひ、矢種盡きぬれば、十八人の者共、一同に突懸る。敵堪へず、山下へ颯と引退き、夫より次第に引去りぬ。

（頭書）此合戰の事、井上豐後守竹下四郎兵衞、其節雲州に居て、右の伏の人數に相加はりて出で、其後藝州に歸參して、慥に雲州方の樣子迄、物語したり。

二宮利を得たりと雖も、首一つも取らず、武勇の證據なし。追駈けて討取るべしとて走行けば、舍弟七郎兵衞・山縣四郎右衞門、其外二人、續いて追行く處に、左の山の尾崎より、引退く敵に行逢ひ、二宮を見て、足早に逃げけるを、突伏せ首を取る。其外は、皆早く逃去る間、山縣以下は、追討つ事を得ず、引兼ねたる手負の首四つ取りて、本の陣へ歸る。雲州勢、手負二百四十餘ありと聞えし。元春此由を聞き、甚だ感賞せられたり。

（頭書）或說に、佐波傳右衞門、山吹へ兵糧を入るゝとて、此先手の勢、新原迄出で、敵に合ひて合戰に及ぶ處に、中陣より、何と見及びてか崩れて敗軍す。先手に相戰ふ者も、之を見て引退くを、尼子勢追駈けて、分捕すと云々。

扨石州の尼子一味の侍共、元就父子一萬五千餘の勢を率ゐ、當國へ出張せられたり。急ぎ晴久出馬なきに於ては、石州、皆敵に屬すべき由、雲州へ羽檄を飛ばす。晴

久驚き、卽ち伯耆・美作・隱岐・備中半國の勢を催し、其外一族家人都合二萬三千餘騎、七月十日、石州大田に陣を居ゑられ、先陣は同國河井・堂原に支へて、銀山の道を差塞げり。此邊には、宍戸安藝守・山內新左衞門・佐波常陸介・出羽次郎左衞門・羽根彈正忠・三吉修理亮・岡本大藏・小笠原彌次郎長雄・楢崎・木梨・池上・田房・周布・津野・久利・兩祖式以下、七千餘騎にて、新原に陣取りけるが、小勢なる故、元就へ加勢あるべき由注進す。晴久は、尼子孫四郎〔頭書〕下野守義勝嫡子なり。・三澤三郎左衞門尉爲清・三刀屋彈正左衞門尉久扶・龜井能登守・宇山飛驒守・佐世伊豆守・河添美作守・河本彌兵衞尉・牛尾遠江守・同嫡子太郎左衞門尉・同參河守・森脇治部大輔・櫻井入道・立原備前守・秋上三郎左衞門・熊野兵庫助・同次郎・古志田因幡守・赤穴右京亮・田中三郎左衞門尉・高尾縫殿助・同右馬允・引田右近・同甚九郎・伯州小鴨の一族日野孫左衞門尉・蜂塚入道・小引彈正・福奇治部大輔、作州の住人市五郎兵衞尉・葦田五郎太郎・三浦の一族兩齋藤・隱岐隱岐守など相隨へ、勢を二手に分けて、一手は、山吹の城を急に攻めさせ、又一手は、新原へ寄せられけるが、敵の後陣の續かぬ先に、新原の陣を切崩すべき由下知して、射手を先立て、寄懸けらる。宍戸以下の備後・石見の勢七千餘騎、三手に備へて防ぎ戰ひしが、敵大勢なるに依つて、終に打負け崩れ引く。此時宍戸が家人奥垣大藏左衞門〔頭書〕一書に宍戸大藏とあり。・淺原將監・高橋某、山田が手の者須澤など討死す。〔頭書〕此合戰を、新原崩といふなり。下々數百人手負ふと云々。又元春より、軍の樣體を見て來れとて、遣されける岡崎七郎次郎討死したり。〔頭書〕或說、此時小早川の內小泉宮內少輔も討死すと云々。

元春の先陣新原に敗る

〔頭書〕或書に曰く、此岡崎七郎が妻は、吉川の內堺備後が娘なるが、今歲十八歲にて夫に後れ、尼となり、大朝村の內備後守知行の內、小枝といふ所に庵室を結び、一生を送りたり。元春貞心を感じて、扶持を給ふ。夫より其處を、比丘尼迫といふとなり。

元春は、熊谷伊豆守・天野紀伊守を先陣として、四千餘騎を二手に備へて、打出でられ、元就も一里計り後れて押續き、向はると雖も、味方はや打負けて、逃來りければ、元春敗軍を押返し、駈向はるれば、敵の先陣河添美作守、元春の旗先を見て、早く勢を引上げけるに依つて、元春も力なく、勢を納めらる。斯くて尼子勢、新原に於て

勝利を得、彌〻銀山の路を取切りければ、山吹の城糧盡きて、刺束治部少輔・高畠源四郎、終に後詰を待ち得ず、諸卒の命に代りて、自害すべき由乞ひければ、晴久其請に任せられ、兩人溫泉の津開藏寺に於て自害し、諸卒城を明退きければ、彼城に本庄越中守を入置きて、晴久雲州へ歸陣せらるれば、元就・元春は、暫く石州に在陣し、味方の城に兵糧を籠め、境目の仕置言付けて、藝州へ軍を班されたり。〔頭書〕殘る者共をば、此方へ送り返さるるとなり。

元就等山吹の城を圍む

七　石州山吹城攻の事

同八月下旬、元就・元春・隆景、一萬餘騎を從へて、石州へ發向せらるれば、小笠原・佐波・出羽、其外當國の勢四千餘騎相加はり、小笠原等を先手として、本庄越中守が籠り居る銀山の山吹の城を取圍まる。元就は、仙の山に本陣を居ゑられたり。吉川勢山縣四郎右衞門・井上又左衞門・山縣助十郎・鐵炮の小頭溝挾次郎兵衞、今日の先陣と名乘りて、切岸近く寄る處に、城兵も同じく打出でたるに、溝挾次郎兵衞、組下の鐵炮を散々に打たせ、城よりも互に射立て打立てけるが、後には、手毎に槍を提げて突合ひたり。〔頭書〕口書に云く、三口より攻上られ、吉川衆、本道筋より寄するとあり。井上・山縣・溝挾等は、太刀にて渡合ひ、敵の槍のしほ首を取りて、引挫き數本奪ひ取りたり。之を初として、三方より取圍みて、三日攻めけるに、此城、地の利を得て、本庄能く防ぐ故に、城兵少し弱らず。元就巡見して、此城、力攻にしては、落城輙すからじと思はれければ、先づ一旦引退きて、謀を以て、本庄を挫くべしといはるれば、若き人々は、今一攻仕寄を丈夫に付けて、攻められ候へかしといひけれ共、元就、此の如き城を急に攻むれば、人數多く損ずるなり。本庄は勇力は勝れたれども、智謀淺き者なれば、謀略を以て從はしむべしとて、陣所を引拂はれ、元春は八百餘騎にて、殿として後陣に引下りて、馬を歩ませらる。本庄越中守父子、其勢二千餘騎にて後を慕ひ、弓・鐵炮を打懸け攻め懸る。元春、馬を控へて追拂はるれば、本庄が足輕、物馴れたる者共にて、敵返せば、十方へ散亂し、又引けば、一所に集りて敵を惱し、行先迫り、敵引兼ぬべき所を計りて、本庄一際味方を進め、采配を振つて、手滋く付けさせける間、手勢二千餘騎一手に

元就退陣

なりて、打つて懸る。元春は、少し小高き所に馬を乗上げ、八百餘騎を前後に立て控へらるれば、本庄が兵、左右なく懸り得ず。一度に颯と退きて、頓て踏止り鬨を作る。吉川の家人森脇若狭守、元春に向つて、是にて自ら手を碎かるゝに及ばず、心安く引拂はせらるべし。某一命を抛ち、敵を追崩し候はんとて、頓て取つて返し、先に進みたる兵一人突伏せ、首を取りて、猶敵に逢はんとするを、元春、續けや者共とて、馬を駈出さるれば、新庄勢八百餘騎、一度に敵の眞中へ切入り、半時計り相戰ふ處に、本庄が宗徒十三人討死しければ、終に叶はず、突立てられたり。〔頭書〕或書に、福原・志道・口羽三人、殿を追駈くる敵數十人討取るとあり。元就も、後陣に軍ある由聞かれて、加勢を越さるゝと雖も、敵早や退けるに依つて、吉川勢と一手になり、總軍共に祖式迄打入りたり。〔頭書〕祖式に、四五日御逗留ありて、本庄降參の手立し給ふとなり。

八　本庄越中守毛利家に屬する事

元就、兒玉三郎右衞門を以て、元春へいはれけるは、本庄越中守、剛勇世に勝ると雖も、智計短し。殊に欲心深き者なれば、所領を與へんと方便るに於ては、尼子の約を翻し、味方に降るべき間、元春宜しく計らはるべき由□□□□□（原本缺）元春頓て、粟屋參河守・山縣越前守を、河本迄差出して、本庄が家老服部若狭守・井戸次郎左衞門・椿雅樂助を語らはる。其頃防州山口瀧の法泉寺に、越中守が弟住持して居たるを呼寄せて、本庄味方に屬せば、石州の銀山に、雲州原手郡殘らず相添へて、宛行ふべき旨言ひ遣さる。本庄卽ち次男大藏左衞門・三男兵部大輔・四男四郎次郎・高橋次郎左衞門、其外一族郎黨を集めて、詮議しけるに、皆いひけるは、當時毛利・尼子の勝劣を計り見るに、元就智仁勇を兼備して、矛先次第に盛にして、尼子の領國も、早や備後一國・石州半國、元就に切取られ、毛利家の威獰、日を追うて强大なり。向後尼子の幕下として、元就に楯を衝かん事、自ら滅亡を招くに似たり。尼子とても、譜代の主にもあらず。元就に對して、從來の怨讐あるにもあらず。大將の賢を見て從ふは、侍の習なれば、此方よりも降參をも乞はるべきに、幸ひ彼方より、味方に招かるゝ上は、急ぎ毛利家へ一味の領掌ありて然るべき旨、いひけるに依りて、本庄合旨して、

元春本庄越中守を誑る

本庄越中守毛利に屬す

毛利家合體の約盟をなす。是に依つて本庄が本領に、石州の銀山竝に雲州の原手郡、全く知行すべき旨、元就父子四人、判を出されたり。本庄が嫡子太郎兵衞尉は、人質として富田に居けるが、越中守、之を方便り落すべしとて、豫て其謀の樣を、密に太郎兵衞が方へ言ひ送り、重ねて家人を似せ馬喰に出立たせ、鞍置馬二三十匹牽かせて、九州の馬喰と披露して、雲州へ差遣し、此馬喰引上ぐる馬數百匹なれば、一日路二日路も、後より數多引上ぐると號して、富田より山吹の間の道々に、一里二里ほど隔てゝ、道筋の川に鞍置馬のすそを冷させて置きたり。彼馬喰、富田に到りて、厩の別當に案内して、九國の馬喰責山の某といふ者なりと披露して、馬共召さるべき由申し入る。扨石州を通りし時、本庄殿へも、馬二三匹召置かれたり。然れば當城に、子息太郎兵衞尉おはする由なれば、馬召置かるゝ樣に、披計賴入る由いひければ、太郎兵衞尉、豫ねて相圖の事なれば、傍輩一兩人を伴ひて、馬見ん爲に出づべしと約束して、横目の者共に申斷りければ、少しも苦しからず、各、も相伴ひて出づべしとて、八幡の馬場へ伴ひ出づ。責山、馬共牽出し見せければ、太郎兵衞、乘替へ〳〵二三匹乘りて、其後越中守が祕藏せし、名月といふ鹿毛の馬の勝れたる駿足あるに、豫て此馬に乘りて、駈拔けよとの相圖なれば、責山、此馬は極めて口强ければ、召されん事如何なりといへば、太郎兵衞大に怒れる氣色にて、何條口の强きとて、乘り得まじきか、馬とだにいはゞ、鬼なりとも蛇なりとも、乘るべきものをとて、乘らんとすれば、責山、此上は力なし、さり乍ら用心あるべしといひければ、太郎兵衞二三返乘りて、少し手綱に心をしければ、此馬眞黑に駈出でたり。引留むる樣に持成し、一繰くつて、手綱を强く引きける程に、馬は是に力を得、馬場を上りに駈拔けたり。伴ひ出でたる者共、斯る隱謀ありとは知らず、初の荒言には違ひたりとて、笑ひ合へり。責山は、君落馬やあるべしと走行けば、若黨共も、共に追付き行きけるが、終に歸る事なく、何國(いづく)ともなく駈失せたり。太郎兵衞は、道々構へ置きたる馬共に乘替へ〳〵、三日路を半日が程に駈付けて、石州へ歸りたり。斯くて本庄、富田を方便り落ちたりと披露しければ、晴久驚き、本庄敵に降るに於ては、石州味方力を落し、悉く攻め亡され、又は降參すべし。本庄に於ては、二心あらじ

と深く頼み、種々の重寶を與へ、所領をも、本領に倍して之を遣し、殊に目黒が娘、容色勝れたる故、我が妾として召置きたるを、越中守に嫁せしめて、我壻なりといひなづけぬ。此女、昔日宍道左馬助、我に恨ありて、刺違へんと思ひ、唯一人去る宵の間に、我が常の居所まで來りけるを、渠と我れ、從子どちなれば、怪しむ者もなく、思ふ圖に忍入りて隠れ居、我が寢入るべき夜半に、外より戸を押破らんとせしを聞付け、其儘起きて板戸を押へしに、宍道は聞ゆる大力にて、腕に任せて押す程に、我も叶ひ難く、一張張りて、其儘餘しければ、宍戸戸板の上に乘つて、俯伏に倒るゝ處を押へたれば、宍戸我にしがみ付きて、上を下へと組合ひしが、某も餘り微力にもなかりし故、終に上になりけれども、搦むべき物のなき間、何にても得させよといひけれども、宿直したる者、皆女なれば、周章てたるのみにて、繩を求め與ふる者なし。其中に目黒が娘、氣の利きたる女にて、小鼓の調を解きて得させし間、即ち夫にて縛め、其夜首を刎ねたりし。斯る仔細の女なれども、本庄が心を取らんが爲、愛念を捨て與へしかば、專ら拔群の軍功を勵みし間、よも二心あらじと深く頼み、石州山吹の城は、敵地に隣りて、肝要の地なる故、彼を籠めて守らしめつる處に、忽ち敵に一味せし事の腹立したさよと、大に怒られけるとなり。

〔頭書〕或說に、小笠原彈正長勝（雄カ）にも、其方角にて舊好あれば、內應を求め、本庄和順の計略あるべしと、元就宣ひ、是に依つて、彈正も種々才覺を廻らし、越中守□（出カ）様々利害を說聞かせければ、本庄、終に得心したりと云々。

〔同〕又異書に曰く、元就宣ひけるは、當國に於て、歷々の國侍、或は敗亡し或は降參を乞うて、味方に從ひ、今度中の村・阿登に於ても、雲州より大軍を以て、加勢ありと雖も、悉く我等勝利を得、其外累年中國に於て、數箇所の敵を討從へし事、恐らくは近國に於て、其隠れあるまじ。然るに本庄越中守、小身の侍、纔なる軍士を從へて、味方の大軍を引受け、少しも臆したる體なく、堅固に城を守りて、味方の虛實を窺ひ、透間あらば打つて出で、寄手を一捲の中に揉破らんと、思入りたる勇氣、顯然として、大剛强の勇士なり。あはれ何卒調略を以て、渠を味方に賺し成し、向後先陣に備へしめば、當家の弓矢、彌〻繁榮の端たるべしとて、種々工

夫を廻らされけるが、其頃越中守懇切して、出入する遁世者を召寄せ、懇に連々持成されけるが、或時物語の序に、本庄越中守事、當時近國に於て、類稀なる弓取なり。今度山吹に於て、血氣盛なる若き者共は、大軍一同に乘入りて攻崩し、越中守を討果すべき旨、達つて申斷りつれども、若し敵に越度もありては、敵乍ら、越中程なる者を、無下に討果さん事、弓矢冥加も却て如何と思ひ、攻懸りたる城を卷きほぐして、陣を開きし事、元就が太刀先枉りたりと、世上の批判も覺束なしと、宣ひければ、彼僧感口（虫入〔じか〕）、斯くばかりの口（虫入〔御カ〕）懇志ありとは、本庄努々思も寄るまじ。若し承り候ては、如何かばかりか本懷仕るべきと申しければ、只今の雜談、少しにても、越中守方へ洩らし給ふなと、口堅めして、頓て彼僧は退去したり。元就其後、小笠原長勝（雄カ）を呼びて、本城味方に降參の調略に於ては、元春に申聞かせ置きたり。猶其方方角なれば、内應を求め、宜しく計略仕られ候へかしと宣へば、小笠原領掌して、其後元春に相伺ひ、種々才覺を廻らし、本庄へも様々利害を說聞かせければ、越中守、終に尼子幕下の約に背きて、毛利家へ人質を出し、服從の約を堅うすと云々。

〔頭書〕目黑が娘云々。父は不詳。弟をば孫七郎といふ、越中守生害の後、孫七郎と一所に住む。此女故實を知り、能書なり。元春、吉川河内守女を養女として、南條元續へ婚禮調へられし時、倩て付けられ、離別の後、一同に歸り、一生吉川家に生はる。越中守が子供、皆此腹なり。末の女子、元春の大方の方に置かれたるが、成長して、今田左衞門尉春信妻となる。目黑孫七郎は、本庄と一同に、毛利家に屬し、後石州に居住して、鄕侍となる。此時は清休といふ。

九　本庄越中守一揆原退治の事

永祿三年十月、毛利元就・同隆元・吉川元春・小早川隆景、雲州へ發向せらるべき由、評定之ある處に、同國の國侍赤穴右京亮・三澤三郎右衞門・三刀屋彈正左衞門より、使を以て、向後味方に屬し、馳走すべき旨言送る。〔頭書〕永祿□年十月廿三日、吉田を打立ち給ふと云々。是に依つて、彼等が人質を取堅め、其後三家藝州を發して、雲州赤穴に著陣せらる。此所にて元

本庄越中守一揆を剿討

春、本庄父子へ對面せらる。〔頭書〕或書、同國三刀屋に於て、本庄父子へ對面せらるとあり。此所に此邊の一揆共二三千人、森田の某、大將として山へ登り、切所を構へ居たり。本城越中守、今度味方に參りたる驗に、某一手を以て、此一揆原を討崩すべき由乞ふ。三家其請を免さるれば、越中守手勢三千餘人を帥ゐて、一揆共、昨日迄味方にありける者の所領にして、一張の弓に、二つの箭をはげける事、誠に陋し。一揆原の義に當りて、志を違へざる我々には、劣りたる本庄なりと匂りけれども、越中守稠しく攻懸け、半時計り相戰ひ、一揆原を忽ち追散らし、首三百餘討取りぬ。元就父子四人、今歳永祿三年より、同五年に至る迄、富田傍角へは、少しも構はず、本庄を先陣とし、軍士に命じて、其餘の諸所へ働をさせらるれば、雲州高瀨の城主米原平内兵衞尉綱寛、最初に毛利家に屬して、人質を差出す。夫より阿與の櫻井入道、大道の童山の城主馬田入道、白鹿の城主松田兵部少輔、其外牛尾信濃守・熊野兵庫助、伯州の丁臺寺、岩坪の日野孫左衞門、江見の城主蜂塚右衞門尉等、何れも詫言して降參したり。押鍋の城主村井越中守も、米原平内兵衞が扱にて、城を明渡し、富田の城へ引窄む。元就は赤穴より、大津・鹽冶・今市へ陣を替へられ、元春取次にて、本庄父子へ目見せらる。此の如く、皆咏方に屬するに依つて、元就心易く、岩坂・引所迄押入り、在家殘らず放火し、一揆原薙切にして、頓て打入られたり。

〔頭書〕或書に曰く、富田に附置かれたる物聞の者、赤穴の御陣へ歸りて、尼子方の沙汰申上ぐる。三家雲州發向の聞あるに依りて、義久を初め、倫久・秀久、其他尼子の一族家老を召集め、時久の前に於て、評定を遂げ、義久・倫久・秀久をして大將とし、宇山飛驒守・佐世伊豆守・牛尾遠江守・中井駿河守、侍大將として諸陣の備を定め、立原源太兵衞・本田豐前守・平野又右衞門三人、防戰の手段、諸陣の掟を定む。足輕大將には、大西十兵衞・加藤彦四郎・神西三郎左衞門・山中鹿之助・古志玄蕃・津森源左衞門、扨又北野・富田・瀧山の城山下へ集る勢三萬六千と□由なり。又或書に曰く、元就、頓て大野宍戸表へ陣を寄せられ、隆元は掛屋村、宍戸は三刀屋に陣取り、吉川・小早川は、元就の陣近所に、陣を居る給ふと云々。

一〇　本庄越中守本田豐前守と乃木に於て相戰ふ事

本庄越中守常光、毛利家の先陣に進み、諸所へ打入り、亂暴放火する由、富田の城へ聞えしかば、晴久忿激斜ならず。然るに本田豐前守、晴久に申しけるは、某に軍士一千餘を給はらば、本庄が働の道筋に出でて一戰し、一鹽付けさせ申すべき旨、請ひければ、晴久、卽ち一千五百餘騎を差添へらる。本田卽時に乃木に到りて、打出づる處に、本庄父子二千餘騎にて、白潟を放火して、引退きけるが、乃木に於て、本田に行逢ひ、互に大剛の者なる故、聊か猶豫の氣象なく、既に矛を交へんとす。本庄が先陣は、嫡子太郎兵衞・椿雅樂助以下八百餘騎、其次越中守・二男兵部大輔、相共に一千餘騎にて進んだり。服部若狹守は、一族を伴ひて、少し引下りて、後陣に備へて控へたり。本田は、敵の樣を見て、多からぬ味方を、數に分けては惡しかりぬべしとて、豐前守、自ら一千餘騎を從へて先陣に進み、嫡子與次郎に五百餘騎を附けて、二陣に控へさせ、戰半ばなる時、横合に懸つて討崩すべしとて、定め置きたり。本庄太郎兵衞、勇氣盛なれば、急に雌雄を決せんと、鐵炮一頻打たせて、拔連れて切つて懸る。本田、敵の逸るを見て、態と引靜め、弓・鐵炮二揆に備へて、入替へ〳〵打たせたれば、本庄が魁兵、射すくめられて、既に引色になれば、太郎兵衞、此所にて猶豫せば、彌〻的に立ちて、多く味方を損ずべし。無二に懸つて突崩すべしと、軍士に下知して、眞先に進めば、手勢一同に、無二無三に突懸れば、本田が足輕押立てられて、颯と引く。豐前守少しも騷がず、嚴重に備へて、靜々と渡合ひ、鋒先尖に攻め戰ふ。太郎兵衞之を見て、尼子家に於て、昔は若林伯耆守、今は本田豐前守とて、其武名揭焉なり。願はくは渠と渡合せんと志し、雜兵共を追拂ひ〳〵、本田を目に懸け、近付き寄る。本田は大力の古兵なれば、三間柄の槍の石突を取つて突き懸れば、本庄は九尺餘の槍を構へて、透間を數へて突合ひたり。何れも命を際と見えし處に、二人が郎黨押隔て、互に死生の勝負はなし。本庄は若く壯なれば、勇に誇りて進みける間、しどろになり、本田は老功の侍大將なる故、備を亂さず進退すれば、本庄が

軍士、終に突崩されんとす。父の越中守之を見て、一千餘騎、本田が右の方へ押廻して突き懸れば、豊前守が嫡子與次郎、五百餘騎にて、相懸りに懸つて攻合はす。之を見て服部若狭守も堪へ兼ねて、二百餘騎にて駈合はす。本庄は多勢なれば、入替へ〳〵攻戰へば、本田少勢と雖も、案内者なる故、田の畔・畠の屯を傳ひ、散々に射させ、藪原を廻りて、不意に打出で相戰ふ故、本田屢〻勝に乘れり。斯くて互に戰に勞れ、相引に颯と引退けば、屍道路に横たはり、血は野草を染めたり。本庄敵地へ深く働きたれば、日暮れなば、引取らん事難かるべしとて、頓て勢を打入るれば、本田は素より小勢なる故、重ねて戰はん勢疲れて、是も俱に引退きたり。

〔頭書〕異書に曰く、元就、今度本庄が働の様子を聞き給ひ、永井右衞門大夫・林木工之助を以て、父子勇剛甚だ感じ入り候。併し向後少勢を以て、危き働用捨あるべき旨、仰遣されたりと云々。

一一　宍道多賀南條行松等家城に歸入る事

吉川元春南條宗勝を攻む

爰に宍道遠江守正隆・多賀左京亮は、先年大内義隆、雲州發向の時、尼子に背き、大内の味方に成替りし故、義隆退軍の後、尼子の爲に國を追出され、防州に下りて居住せしが、其後大内家滅亡に依りて、又毛利家に降りて、元就を頼み居たる處に、今度本領を取返して、家城に歸入りたり。又爰に伯耆國の住人南條豐後守宗勝は、本は同國羽衣石の城主たりしが、去る天文三年、山名と相俱に、尼子の爲に本國を除かれ、其後但馬の國へ打越え、山名但馬入道宗全を頼み居たる處に、山名が家臣垣屋が一族共、逆威を領國に振ひ、山名をも、敵の如く振舞ひける折節なれば、頼むに甲斐なく、頓て但州を立退き、本國なればとて、又伯州に立歸りて、同國倉吉に小城を構へ引籠り、暫く身の興立を謀り居たり。吉川元春、此由を聞き給ひて、此者今迄は三家に對し、強ちに敵對の色をば顯さずと雖も、國中に居ながら、味方に服從せず、己が自立を慮りて、居城に引籠る事、如何様時節を以ては、味方の虚に乘じ、當家に讐する事もあるべしと覺ゆるなり。然れば近日馳向ひて、渠を攻討ち、後の積蟲を除くべしとて、其勢數千騎を引率し、倉吉に出張し給ふ。南條も、さしも老

功の勇士なりける間、寄手の多勢にも、曾て疹まず、防禦の手段賢くも、堅固に城を抱へたり。茲に因つて元春も、城下に宿陣を張りて、日々軍士を差向け、數日攻戰ひ給ふ。斯る處に永祿四年七月中旬、城中より軍使を以て、元春の陣所へ申しけるは、今月十四日より同十六日迄の間、互に合戰を差止められ候はゞ、城中の軍士、戰鬪の爲に死亡せし者共の、佛事施餓鬼をも營み度候。此旨御同心に於ては、長陣の御鬱朦をも散せらるべき爲め、來る十四日の晩、城中の者共、御陣前に於て、踊張行仕らせ度候。所作輕忽の趣向に候へども、陣中の一興と思召され、御見物あるに於ては、本懷に叶ふべき旨、申送りたり。元春、使者に對面ありて、示仰せらるゝ趣、具に其旨を得候。誠に于蘭盆供佛施僧の儀は、古今僧俗、共に世間の風俗に候へば、暫く梓楯を措き、佛事經營の儀、尤も其志に任せらるべき事、勿論に候。殊に踊の儀は、陣中輕卒共、一入競望の壯觀に候へば、是又兎も角も、來意の趣に任せ置き候由、卽答に及ばれたり。是に依つて南條、豫て用意を整へ、城中諸勢の中にて、大きなる男を三十人選び出し、表紋の帷子に、高尻を挑げ、一樣の行膝して、布鉢卷に兩刀を帶し、銘々同樣の四手團を持ち、太鼓十挺に貝鉦を添へ、外に甲冑したる武者五十人、踊警固として差添へ、警固の大將には、入江彈正とて、其頃雲・伯兩州に雙びなき大力の勇者をぞ差添へける。是に依つて元春の方よりも、其受引挨拶の爲として、今田兄弟を差出されける。〔頭書〕今田兄弟云々。一說、新見左衞門尉春信、今田玄蕃兄春佳なり云々。斯くて程なく七月十四日、豫て約束の刻限に至りしかば、南條が踊子、元春の陣庭に入破して、鉦・太鼓を打立て、音頭さつさの聲を揃へ、入亂れたる踊の業作、尋常の如く、華麗優美の和した曲はなけれども、遉に是も一樣の異風ありて、暫時の興をぞ催しける。〔頭書〕樂書に云、曲終繁聲名ニ入破。斯くて踊も既に終りて、各踊子共、暇申すと謠ひ捨て、城中指して引歸れば、警固の武者入江彈正を始として、皆一同に、色代してぞ歸りける。其後元春より、禮謝の爲め、城中へ使を立てられ、昨夜の踊手の者共、見物殊に感に堪へず候に付、返謝の爲め、今晩城中へ踊を返し申度し、達つて懇望致し候。此旨御納得に於ては、申付くべき由、演達に及ばれければ、南條、則ち夫こそ庶幾する處に候。必ず待受け申候由、返辭したりければ、同じく元春の內にて、大きなる男を選びて、是も

三十人、異様に染成したる湯帷子を著、尻高く挑げ、一色の行膝濯染にして、白絹にて鉢巻し、兩刀を帶し、俄に四手・團扇を拵へて、面々一様に手に持ち、太鼓二十挺に貝鉦を添へ、甲冑の武者六十人差添へ、警固大將として、今田を差出さる。斯くて七月十五日、前夜の同刻に至りしかば、踊子敵城の一の城戸口に支へて、太鼓の拍子に足並を揃へ、總勢城門に込入りて、さゞめき渡りて、踊る手の左右を捲くるゆり踊、前後に當る返り脚、籠手・薙手・開手の團扇の術も盡し果て、各〻暇の歌諷うて、城外指して引歸れば、南條席をすと起ち、母屋の庇に躍り出で、今一庭と招きたり。頻に太鼓の調子を進め、上は梵天非々想天、下は奈落の底迄も、響き渡れる貝・鉦の、競ふ勇氣も傍を拂ひ、亂れ引き行く踊子も、呼返されて荒鷹の、空立つ鳥も立戻れ、斯くて唱歌の拍子を易へ、様々踊の手を盡せば、見物の上下、喝采の聲とり〴〵に、揚貝頻に吹立つる。浪に荒らすな松島や、雄島の苫屋立歸り、又參らうと謠ひ捨て、風に散飛ぶ木葉の如く、破羅々々引きて立歸れば、警固の大將今田を元め、城内の案内に氣を付けて、皆宿陣へぞ歸りける。斯くて同十七日、城中暫時の和談の日限も過ぎければ、同日早天、寄手城下へ押寄せたり。城中よりも、勇兵を勝つて、城外へ打出で、城中よりは、箭・鐵炮手滋く射出し打出し、雄卒猛威を振うて、手ひどく駈立つれば、寄手の先陣突立てられ、半町計り引退く。城兵機に乘り、引かせも立てじと、勇み進み、鎧を背けて小がくを打ち、無二無三に駈立つれば、寄手は蹄に當てられじと、前後の備靡き立ち、既に此陣崩れんとす。森脇越後（頭書）父は彌十郎、森脇源右衛門・同名與一兵衛等父なり。軍中を乘廻り、味方を勇め恥しめて、引くな戻せと下知をなす。今田中務之を見て、馬を陣頭に躍らせ、追ひ來る敵の前路を遮り、味方の備を立直さんとす。南條が手の者鹽屋惣左衛門、鐵炮を携へ、今田を目に懸け、畔を傳うて近付き寄る。今田は田の岸を片取り、五人張の弓に、渡六寸の雁俣の矢を打番ひ、岸蔭より出づる處を、鹽屋鐵炮にて、今田が左の眼尻を打かすれば、鹽屋打損じたりと思ひ、其儘味方の中へ逃入らんとする處を、今田能引いて射たりけるが、鹽屋が運も盡きざりけるにや、弓矢外れて恙なく、味方の中へぞ逃入りける。其後今田立直りて、中差三筋拔出し、押取り〴〵打番ひ、甲の眞甲弦走を志して、矢繼早に差續け、差矢肩に射出

したりければ、尖箭一筋に、敵二騎宛射落して、三筋の矢にて、六騎の敵を射伏せければ、木實を振ひ落すが如く、はら〳〵鞍より扱落ちたり。城兵是に辟易して、進退猶豫して控へたり。寄手の軍兵力を得、一同に取つて返し、群る敵を駈捲つて、難なく城内へ追込みたり。其後南條、始終籠城叶ひ難しとや思ひけん、降を乞うて申しけるは、宗勝事、先年尼子の爲に、本國を除かれ、代々の居城羽衣石を追出され し事、遺恨止む期なし。然れば往時の科を御宥免ありて、御幕下に屬せらるれば、向後富田御發向の御先を仕り、二心なく戰志を勵むべし。尤も尼子家に對しては、多年怨讐の某に候へば、さのみ深く御疑を蒙るべしとも、存ぜず候へども、諸事御隔意なき爲に候間、愚息にて候者を、膝下に暫く預け置き奉るべく候間、偏に御哀憐を以て、代々の居城羽衣石へ歸參の儀、御赦免を蒙り度き旨、達つて懇望致しければ、三家評定ありて、終に渠が願を許容し給ひ、宗勝頓て本城羽衣石へ歸入れば、嫡子千代熊をば、元春之を受取りて、藝州大朝の養性寺に、差置かれけるが、其後疱瘡を煩ひ、十五歳にて。終に病死したりと聞えし。斯くて又同國尾高（頭書）尾高、泉の城山城といふ。

南條宗勝降參

主行松入道も、先年南條と俱に、本國を除かれけるが、是も此般尾高の本城へ歸參したり。是れ皆毛利家の武恩に依れり。

大友義鎮門司城を攻めしむ

一二　豐前國門司城合戰の事

隆元隆景門司へ出陣

永祿四年九月中旬、大友金吾義鎮、一族郎黨を集めて、毛利元就、尼子晴久と矛盾をなすの由、此隙を窺ひ、豐前門司の城を攻破るに於ては、宗像・高橋・長野等は、自づと味方に降るべしと、評議一決して、吉廣嘉兵衞尉 大友駿河守を大將とし、一萬五千餘騎、豐前小倉に到りて陣を取る。門司の城の在番仁保右衞門大夫、此由注進しければ、毛利備中守隆元、（頭書）隆元、此時大膳大夫と號す。防・長の勢を催して、長府へ下向せらるれば、小早川隆景も、共に雲州より打出で、一手となり、都合一萬八千餘騎、門司の關へ押渡らる。（頭書）粟屋掃部・赤川左京亮・兼豐後勢暫く思惟して、敢て懸らず。後詰勢も敵の强重左衞門以下相從ふと云々。弱を計り兼ねて控へたり。斯くて十月十日、豐後勢武田志摩守・本庄新兵衞尉・今江土佐守、門司の城へ押寄せたり。隆元、藝州の警固船へ軍使を立て、船手より打上

りて、敵の不意を擊つべしと、下知せらるれば、兒玉内藏允・浦兵部丞等、其命に從ひて、頓て打上り、横合に懸りて、稠しく相戰ひたり。爰に伊美彈正左衞門と名乘りて、眞先に進みて戰ひける武者と、浦兵部丞槍を合せ、浦、鼻の脇をしたゝかに突かるゝと雖も、終に伊美を突伏せ、首を取れば、中國勢力を得て、進み懸る間、豐後勢忽ち突立てられて引退く。〔頭書〕或書、此時毛利勢には、福原・志道、船手には兒玉周防守、其外飯田・豐島・桑原・山縣等、比類なき高名したりと云々。同廿六日、又大友勢、城の麓へ押寄する。小早川衆井上又右衞門・兼久内藏允・眞田孫兵衞尉・豐島市助・山田新右衞門・南兵庫・河井大隅介〔頭書〕或書、隆景衆の内井上・眞田以下の外に、大乃美兵部之を載す。など、比類なき働す。吉田勢には、渡邊小三郎・山縣善右衞門・飯田七郎右衞門・同彌七郎・宍戸が家人深瀨・末兼・江田・朝原以下高名す。〔頭書〕或書に、此時味方にも、山田新右衞門・南方源右衞門を始め、數人討死したりとあり。〔頭書〕或書、宍戸が家人深瀨・末兼以下の外に、奥・垣内・小瀧之を載す。日既に暮に及びて、兩陣互に引分る。霜月五日の夜、豐後勢、密に陣を引拂ふ。船手より井上又右衞門・飯田七郎右衞門・同彌七郎一番に駈付け、敵一人宛討取りたり。福原左近將監、續いて後を付くれば、敵踏止りて防戰す。末國與次郎、〔頭書〕末國は福原が寄子と一書にあり。究竟の敵一人突伏せて首を取る。其外福原宗右衞

大友軍退障

門〔問カ〕・内田宮内・井上五郎三郎・長屋小次郎・渡邊左衞門大夫・志道源三・渡邊源五郎・同新右衞門・赤川又五郎・井上雅樂允・桂善左衞門・庄原某〔頭書〕庄原某一書に兵部と有り之。など、分捕したり。敵、同國神田の松山をも明退きて、國中に足を止めざれば、天野紀伊守隆重を松山に入置き、隆元・隆景、防州へ歸陣し、夫より隆景は、宍戸隆家・福原貞俊を伴ひて、雲州へ赴かる。隆元は九州表の事聞合せん爲め、粟屋掃部助・赤川左京亮・内藤孫十郎・兼重左衞門以下、三千餘騎を從へて、防州岩國に在陣せらる。

一三　本庄父子誅戮の事

本庄越中守父子五人、元就の先陣として、雲州所々に働きければ、國人皆手に立つ者なく逃走る。越中守、己が勇に驕りて、打入りたる在所には、私に制札を立て、味方の軍勢に、秣をも刈らせず、味方に勸賞に行はれたる所をも、我が武威に任せて押領し、入部の輩を追立て、神社に入りては、寶物を掠め取り、其毛利と尼子の國爭は、何れへ勝たせんも、本庄が儘なりと、常に荒言し、樣々不禮なる事、超過せし

かば、或時元就、元春・隆景に向つて、今之を懲らさずんば、行先莫大の過出で來るべし。急ぎ誅を加ふべしと、密談せらるれば、兩川も、尤も宜しかるべし。本庄尼子の重恩を得てだに、其懇款を變易したれば、毛利家に對し、野心を存せん事、猶亦掌を返す如くなるべし。渠剛强にして、敵を取挫ぐ事、速なりと雖も、若し聊も恨ありて、隱謀を企てば、味方の大事なるべしと、終に本庄誅戮の儀に、内談を極めらる。

〔頭書〕異書に曰く、本庄越中守、外には毛利家服從の志を顯すと雖も、内心には、尼子へ志を通ずる事、御見かどりの廉も之有りけるにや、元就潛に、元春・隆景に御密談ありて、富田への通路に、夜々兩川より忍番を替へ〳〵、附け置き給ふ處に、或夜元春より、森脇三郎左衞門・筏源介・井上孫兵衞三人、差出されたるに、夜中過ぐる頃、月山の方より、怪しき者三人本庄が陣屋へ來り、暫くありて歸りけるを、見咎めければ、其儘左右へ分れて逃行きけるを、三人の者共追駈け、悉く討止め、腰に附けたる兵糧袋を開き見れば、一封の書あり。是れ尼子家内通の書なりと云々。扨元春いはれけるは、北表は、我が請取の弓矢なれば、其一手にて、討果すべし。大勢を催さば、陣々騷動し、又他の勢を交へば、味方討などありて、討漏らす事もあるべしといはるれば、終に元春一手にて、討果さるゝに定りぬ。其頃宍道の丸倉を、傳の城に普請せんとて、元就、機屋といふ所に陣を居ゑられ、此處にて、本庄越中守・同二男大藏左衞門・其次兵部大輔・四郎次郎父子四人、諸所へ引分けらる。扨元春・粟屋源藏・二宮木工助・森脇市郎右衞門を、本庄越中守が討手と定めらる。

〔頭書〕粟屋源藏、參河守子。系圖に、藤右衞門は、參河守孫なり。

參河―源藏―藤右衞門（始源藏。於二岩倉一討死。）
　　―彦右衞門（藤右衞門依二討死一繼二本家一。）―朝枝惣左衞門（始與三太郎。兄弟一同討死。）

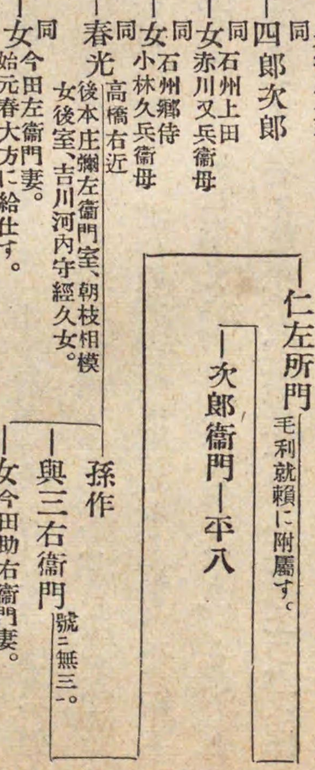
兵部大輔・四郎次郎が陣へは、今田上野介經高・吉川和泉守經安を差向けらる。次男大藏左衞門は、人質として、吉川衆と役所を竝べて居けるを、山縣越前守・森脇大藏大夫に討手を言付け、其外陣所々々へ、一勢々々差向けらる。隆景は、元春少勢なる故、若し討漏らさるゝ事もあるべしとて、向の尾崎へ人數を出し、討手仕損じなば、入替らんと守り居らる。斯くて永祿五年十一月五日寅の下刻、諸陣一同に討入るべしと、

相圖を定めたれば、四日の夜半より、忍び〳〵に敵陣へ近付き入り、柵際に付く。越中守は、吉川衆小坂越中守と、陣屋を竝べ居たる間、粟屋・二宮・森脇、小坂が陣に忍び居て、相圖を待つ。斯くて定めし刻限に至りて、久利左馬助、上の山より、笛を盤渉に上げて、音どりを吹く。之を聞くと等しく、本庄が陣へ切入りたり。此所に敵一人、陣中より出で來りけるを、二宮木工助、槍にて突きけれども、少しも徽らざる故、槍をば捨て、太刀を拔き、一刀に討捨てたり。又一人、淺黄に七所紋の小袖を著て出でたるを、粟屋源藏渡合ひ、下なる谷に切伏せける處に、敵一人扶け來るを、同じく討取つて、首二つ提げて出で來りぬ。扨粟屋・二宮・森脇、本庄が陣へ詰懸け、立竝びて樣體を窺ふ處に、本庄が家の子服部若狹守、外よりつと、三人の者共の中を押通り、陣中へ入りけるが、足具を著んとや思ひけん、櫃の蓋をからめかしけるが、著る隙なく、櫃の蓋を楯に突きて、三尺餘に見えし太刀を拔持ち、服部若狹守と名乘り、搦手口へ切つて出づる。粟屋と森脇は、敵若し後へ出づる事もやあるべしとて、二手に分れて、後口へ廻りけるが、此口には、森脇槍持ちて居たるが、服部が持ちたる櫃の蓋ごめに、突きたれば、服部が胴中を突拔きたり。若狹守、其槍かなぐり寄せ、石突共に、後へすら〳〵貫取りて、森脇に討つて懸る。市郎右衞門、太刀拔く隙もなければ、走り懸つて、無手と組みたり。服部大力なりと雖も、只中を突拔かれたれば、目くるめき、押付くる事ならず。森脇は、力、服部には劣りければ、組伏する事を得ず、暫く組合ひけるが、後の柴垣一重押貫き、二三間計りの岸を、轉び落ちたるが、落付く所にて、森脇上になり、首搔切つて起上りぬ。二宮は、越中守を心懸けて、幔幕つかんで打上げ、切つて入る。本庄は、具足櫃に腰を掛けて居たるが、其儘立ちて拔合はせ、二宮が太刀を受流し、暫く斬結びしが、終に是も組合ひて、庭上迄躍り出でしが、前なる岸際を踏崩して、遙の谷へ落ちたるが、是も落付く所にて、二宮上になり、越中守を押付けたるに、本庄、其間に脇差を引拔き、上突にせんと、二宮が小脇に、冷々と差當つる。二宮力に任せ、二の腕したゝかにしめたれば、本庄腕たるみて、後へ突外したり。其儘押へて、首を搔かんとする所を、隆景の家臣井上又右衞門、三十人計りにて押懸け、本庄が首を奪はんとす。二宮見て、さしも

本庄討たる

小早川の家臣として、奪首する事、主人迄の瑕瑾なりといひければ、井上少しも構はず、二宮が刀を奪ひ取り、頭を押付け、手足を捕へて引きける間、二宮力なく、さらば首をば渡すべき間、人を除けらるべしといへば、井上下知して人を除け、終に本庄が首を討取りたり。井上、本庄が首を、元就の實檢に備へて、二宮木工助仕伏せたるを、首をば某討ち申したりといひければ、元就感じて、相高名の由、兩人に一紙の證文を出されたり。

〔頭書〕或書に曰く、二宮・越中守を組伏せ、首を掻かんとする處に、小早川の手の者共、懸り來りて、無理に、本庄が首を奪ひ取らんとす。其所へ、同じく小早川の内井上又右衞門走り來り、此樣子を見て、狼藉の擧動、勇將の下に居て、奪首する事、主人迄の恥辱、甚だ未練卑怯なりと、眼を張りて大に恥しめければ、二宮聞きて、足下の下知、甚だ感じ入候。然らば首をば、其方に討たせ口（虫〔申ヵ〕）べしとて、井上に討たせたりと云々。此說、さもありつべき事か云々。



越中守が次男大藏左衞門をば、末永彌六左衞門組討にす。三男兵部大輔・四男四郎次郎をも、即時討果す。第五男高橋左近允は、未だ二三歲なるを、乳人抱きて落ちたるが、藝州嚴島の祝師に隱れ居たるを、吉川の老臣今田上野介、仔細ありて之を懇して、成長の後、今田廣家に詫言しければ、知行三百石遣して、給仕せしめられしが、後本城彌左衞門と名を替へて、朝鮮國に於て討死したり。嫡子太郎兵衞は、石

本庄の一類悉く誅戮

州都賀の興宅寺に居たるを、天野紀伊守隆重に命じて討たせらる。天野三百餘を帥ゐて、押寄せたるに、太郎兵衛、散々に防戰し、終に討死す。

〔頭書〕異書に、嫡子太郎兵衛をば、森脇三郎左衛門、討取るとあり。同又曰く、越中守が本城須佐の高矢倉には、天野隆重を籠置き、又山吹の城へは、上山兵庫助を遣して、本城が所帶、闕所せらると云々。

其外椿雅樂助・高橋次郎左衛門・服部が一類以下、悉く討果さる。斯くて元春は、越中守二男大藏左衛門・三男兵部大輔・四男四郎次郎父子四人を始め、同日晝過迄に、悉く誅戮せられ、首一千三百餘を討取り、其外の者共は、逃失すると雖も、本庄が手の者、勇士多き故、寅の下刻より、未の刻に至りて、何れも强く働きたり。されども吉川勢、手負は多しと雖も、死人一人もなし。翌六日、元春二千餘人にて、上の郷へ陣を寄せらる。是は須佐の高矢倉・原手の屋仁山兩城に、本庄人數を入置く故、若し異議に及ばゝ、攻亡さん爲なり。されども大將討たれたれば、兩城共に明渡したり。山吹の城にも、本庄家人服部治部少輔を殘し置きける故、元就より、平佐藤右衛門・上山兵庫・吉原藤左衛門、元春より吉川和泉守・山縣左京亮に、人數を付けて差向けらる。即ち使を以て、當城明渡さるべし。さなくば是非なく攻崩すべしと言ひ送れば、服部異議なく城を明渡し、我身も元春に奉仕せん事を願ふに依りて、即ち許して、池田の某に相添へ、銀山の代官として差置かる。其後元就父子は、赤穴へ打入りて、越年せられたり。

尼子晴久逝去

一四　降參諸侍再び毛利家に背く事并尼子晴久卒去の事

本庄越中守誅せられければ、熊野兵庫助・松田兵部少輔・櫻井入道・馬田入道・牛尾信濃守・日野孫左衛門・蜂塚右衛門尉・丁臺寺等、毛利家降參の約に背きて、再び尼子方に成替りたり。今歲永祿五年十二月、尼子修理大夫晴久、行年四十七歳にして、病死せらる。

〔頭書〕此時、三澤家中布廣・鍋坂の城を持ち居たるが、是も尼子方へ成替る。志

違へざる者は、三澤・三刀屋・米原三人なり。

一五　毛利大友和平井毛利隆元卒去の事

大友義鎭松山城を圍む

永祿六年、大友左衞門督義鎭、毛利元就雲州本陣の隙に、毛利家より人數を籠置きける豐前神田の松山の城を攻破るべしとて、二月中旬、其勢二萬餘騎にて、松山を取圍まる。當城の在番天野紀伊守隆重、堅固に城を抱ふるに依りて、當城侮り難しとて、大友勢、陣を少し引退きて、遠攻にしたり。宗像・高橋・長野等の味方、飛脚を以て、此由隆元の陣所防州岩國へ注進しければ、隆元後詰として、防府迄出馬し、防長の勢を催されける處に、大樹義輝公より、毛利・大友和平せしむべき旨、台命を承りて、毛利家へは聖護院准后道增、大友へは久我大納言通興を下されて、頃年諸國私の鬪爭、止むを得ず大亂に及ぶ事、偏に上を蔑如にするが致す處なり。然れば兩家早く和睦せしめ、中國・九州靜謐ならしむべき旨仰下さる。此時吉川元春へ給はりたる御內書に云く、

毛利大友兩家和睦

當國與豐州及鉾楯、儀、餘無盡期之條、不可然候。所詮此砌閣是非、令和睦者可目出候。仍聖護院門跡御下向候。對元就・隆元、可加意見事肝要候。猶信孝可申候也。

正月廿七日　義輝　御判

吉川駿河守殿

之に依つて毛利・大友和睦して、其上義鎭の息女を、隆元の嫡男少輔太郎と、緣邊の契約ありて、毛利家より、神田の松山を、大友に返し與へられたり。斯くて隆元、防州岩國に於て、聖護院宮を饗應せらる。夫より道增は、嚴島へ社參し、御弟子道澄は殘し置かれて、道增は歸洛せられたり。毛利・大友和睦の上は、九州の押へ、强ちに入るまじとて、門司・下の關の城に、在番を殘し置きて、隆元は、雲州元就の陣所へ赴かんとて、防州岩國を打立たれけるが、藝州佐々部の宿に於て、俄に煩はれ、八月四日、行年四十一にして、終に卒去せられたり。

隆元逝去

〔頭書〕或書に曰く、公方御扱の事、豐前門司の城、大內家より領し來る郡領を限

り、毛利家領分とし、神田松山の城より、大友領と定め、輝元を以て、宗麟壻とし給ふと云々。

〔頭書〕隆元、此時粟屋掃部・赤川左京・兼重左衞門、侍大將として、近習外樣の口都（虫入）合三千餘人にて、出馬し給ふと云々。

〔同〕口護（虫聖）院殿、嚴島渡海の節、元就より、名代として、福原左近を、彼島へ渡さるゝと云々。

〔同〕聖護院殿へ、岩國永興寺に於て饗應、能の御馳走あり。鞍置馬其外數々寄興せらる。其後隆元も、嚴島迄渡られ、道增に暇乞して、七月十日、吉田郡山の麓迄、著かせらるゝと雖も、元就雲州に長々在陣せられ、辛勞し、一日にても家城に入りて、自由に休息如何との遠慮にて、嫡子輝元、未だ幸鶴丸といひて、十一歳になられけるを、山下へ呼下し、對面せられ、追付け發馬して、同十二日、佐々部に到り、此所にて軍勢を相催され、八月五日、發足すべしと議定せられ、八月四日の曉に、卒去せらるゝと云々。此說、異本に見ゆ。隆元嚴島迄渡海の事、別書に見えず。

〔同〕或書に曰、口元（虫隆）、門跡歸帆を見送り、翌月七月八日、二十日市を立ちて、備後へ打越え、同國和知彈正が居館に口逗（虫入）留して、夫より雲州へ直に打越えんとて、吉田へ立寄り給ひ、今度公方よりの台命を、幸鶴丸へ仰聞かさるべき爲め、城下へ呼下し、御對面あり。頓て打立ち給ひ、佐々部に著陣し給ひ、暫く此處に滯留して、人馬を休め、八月五日、發馬し給はんとて、四日の夜、俄に卒去し給ふとなり。行年四十一歳云々。

〔同〕又云、此時、和知が館に於て、彈正毒を飼ひし事、後露れて、永祿十一年、和知・湯谷兄弟を嚴島にて討果さると云々。

一六　雲州白鹿城攻の事

毛利陸奥守元就・吉川駿河守元春・小早川左衞門佐隆景、今歳二月より、雲州大野表に在陣して、所々放火せられければ、牛尾信濃守を始め、當國の敵城十餘箇所明け退き、富田へ逃集りたり。元就は豫て藝州傳ひの城々に、人數丈夫に籠置き、隆元防州

元春隆景白鹿城を攻む

よりの參著を待合せて、雲州白鹿を攻めらるべしと、擬せられける處に、隆元卒去の由、到來あるに依りて、其事を默止さる。然る處に、元春・隆景相談せられけるは、隆元死後、幾程ならず、元就の愁涙、未だ乾かずと雖も、白鹿の城攻、差置くべき事、隆元の心にも叶ふべからず。彼弔にもなるべければ、近日白鹿に陣を寄すべしと、兄弟言ひ合はせ、八月十三日、元春・隆景相共に一萬五千餘騎にて、白鹿の城を取圍まる。城主松田兵部少輔、一旦毛利家に降りしが、去年又、尼子方に成替りたるに依つて、富田より、牛尾太郎左衞門以下八百餘人、加勢して守らしむ。翌十四日、石州の出羽中務少輔、手勢三百計りにて切岸へ付けば、城兵二百餘人突出で、稠しく相戰ふ。熊谷兵庫助、出羽を扶けて駈合すれば、城中より又一千餘騎打出で戰ふ間、寄手押立てられぬべく見ゆる處に、熊谷兵庫助隆直、士卒を勵まし攻懸れば、家人末田源次郎、其外出羽が家の子、彼此九人迄討死して、熊谷・出羽も、危く見えければ、元春八百餘騎にて、之を救はんとて、眞先に進んで懸らるれば、牛尾・松田、城兵を盡して二千五百餘騎、打出でて防ぎ戰ふ。杉原播磨守盛重も、元春に從ひて、駈付くれば、牛尾忽ち駈立てられ、郎黨數人討死し、自身も疵を蒙りて引退けば、熊谷・杉原、透さず攻懸れば、牛尾・松田堪へ兼ねて、越中へ打入りたり。

〔頭書〕當城に、若林伯耆守孫若林宗八郎・同宗五郎といふ兄弟籠り居て、城中より打出で、比類なき働仕ると雖も、分捕なくして、城に歸り入る。彼母之を見て、其方なる祖父伯耆殿は、世に鬼神の樣にいはれし人なり。其子孫として、兄は十七歳、弟は十五歳になる者の、初めての合戰に、首一つ提げ來らざる事、言甲斐なしと、大に恥しめければ、兄弟此詞を聞き、又取つて返し打出で、大勢の中へ駈入り、若林伯耆守が孫同宗八郎・同宗五郎と名乘り、大に手柄を盡し、終に討死せりと云々。

吉川の家人二宮右京亮・井下新兵衞、熊谷が郎黨末田勘解由・岸添大隅、出羽が手の者東越前、杉原が家人高橋右馬允等分捕す。其首三十餘討取りたり。其後寄手、仕寄を付けて攻寄すれども、城中にも、雲・伯の勇者を選びて、大勢籠りたれば、輙く落つべしとも見えざれば、寄手、石州銀山より、銀掘を數多召寄せて、城壁の下を掘らせ、仕寄を付けて、城中へ入らんと巧みける處に、城中にも、豫て覺悟し、同じく穴を掘りけ

る處に、内外より掘合せて、其間近く、物音も聞ゆる程なるに、頃は九月十一日、彼穴の間に、一二間もあるべしと思ふ程になりて、穴の上土活（とくわつ）と崩れたり。〔頭書〕穴を掘り候事、銀山衆鹽冶豐後に言ひ付けられ、佐伯太郎左衛門・小谷内藏允肝煎す。寄手の掘穴の奉行には、吉川勢山縣四郎右衛門・朝枝市丞等なるが、敵味方、目と目を見合せたり。城兵久村久左衛門を始め、數人槍を持つて突懸る。寄手には、吉田勢赤川木工允・兒玉四郎右衛門・波多野源兵衛・粟屋彌四郎・井上雅樂允、吉川勢粟屋彦右衛門〔頭書〕本書には粟屋彦右衛門參河二男なり。・三須孫兵衛・山縣宗右衛門取合ひ、其外吉田衆井上新三郎など、穴の中にて突合へば、城中叶ひ難く思ひて、頓て大石など投込み、穴をば終に埋めたり。〔頭書〕或書に、井上新三郎は、此時討死とあり。其後寄手、透間なく攻むれば、城兵難儀して、富田へ後詰を請ひければ、尼子義久、舍弟倫久を大將として、龜井能登守・佐世伊豆守・牛尾遠江守・山中鹿之助以下一萬騎、九月二十三日、白鹿表へ差出さる。

尼子倫久白鹿城後詰

〔頭書〕或書、此時富田より後詰として、口（虫入）郎倫久大將として、立原源太兵衛・加藤彦四郎・神西三郎左衛門・池田藤兵衛・津森宗兵衛・龜井・河添・馬木・馬田以下、七千の勢にて、毛利方よりの押の勢を切破りて、白鹿の城下へ打出でんとすとあり。

〔同〕或說に、隆元弔の爲め、白鹿の城、急に攻崩すべしとて、福原貞俊が手、一番に攻寄せ、吉川・小早川を始め、宍戸・志道・桂等、一手々々口（虫〔にカ〕）進め、南方宮内・長屋小二郎・末國與次郎・福原惣右衛門・中村大藏大夫・志道源藏・渡邊甚右衛門・坪井將監・中村大藏允、稠しく相働き、城兵力盡き、降を乞ふと云々。

元就、白鹿の城をば、初より攻手の外に、益田・佐波を相加へて、城を攻めさせ、其外をば、後詰の敵に差向けらる。雲州勢、巳の刻計りより打出で、樣々呼引くと雖も、藝州勢 豫ての掟なれば、少しも取合はず。申の刻に至りて、敵引退かんとする時、小早川隆景・天野民部少輔・平賀太郎左衛門を先手として、一番に打出でらる。二陣は、吉川元春・杉原播磨守・三刀屋彈正左衛門を、先陣として進まる。吉田勢は、弱からん陣を救はんとて控へたり。牛尾遠江・河添美作、藝州勢の打出でたるを見て、馬を立直して、一戰せんとすれども、後陣既に引拂はんとする折節、敵大勢嚴に備へて、打出でたれば、皆我れ先にと逃退く。牛尾遠江守・龜井能登守等、味方を勵まし、押返さんとすれども、引立ちたる勢なる故、共に押立てられて引退く。天野・平

白鹿開城

賀・杉原等、頻に進みて追駈くれば、二陣の立原備前守・山中鹿之助以下、入替らんとしけれども、先陣七千餘騎、崩れ懸つて逃來る故、力及ばず、共に引退きたり。大將、長追を制して、頓て引入られる。其日、尼子勢、早く引取りたる故、追討にして、首を得たる事、元春の家人、其外天野・平賀・杉原が手の者、彼此十七を得たり。斯くて白鹿の城、糧米盡きて、松田・牛尾、一命を助けらるれば、城を明渡すべき由、詫言しければ、卽ち其旨に任せて、九月廿九日、城を請取り、牛尾をば、富田へ送り歸され、其外雜人千餘人には、資財異議なく與へられ、心閑に富田へ歸らる。松田兵部少輔は、面目なしとて、隱岐國へ渡りたり。

〔頭書〕異書に曰く、白鹿の城、落去の後、破却せられたり。此城は、富田に差次ぎ、國中第一の名城なり。昔此城を攻むるに、年月を經ると雖も、奇代の名城なるに依りて、落し得る事能はず、其大將、壯年の時より攻□、白髮に及ぶ迄、攻めたるに依りて、白髮の城と云ひ傳へたりと云々。

〔同〕或書に曰く、尼子勢、小早川の手に於て、稠しく相戰ひ、隆景の備、既に崩れんとす。隆景自ら馬を駈出で、倫久の旗本を目懸け、一文字に乘入り、采配を取つて、味方を勵まし給ふ氣色常ならず。今を限りの合戰と、一途に思定められたるやと、手の者共も思ひければ、此を後れて、何を期せんと、身命を惜まず防戰す。尼子勢馬田・河添、眞先に進みて、戰鬪時を移す。斯る處に、備後の國衆長左衞門・楢崎彦左衞門、後陣より助け來り、馬田・河添と槍を合□、兩人を討取る。味方力を得て勇み懸り、隆景猶も軍士を進めらるれば、尼子勢、突崩されたりと云々。

元就洗合に築城

一七　元就洗合に陣城を築かるゝ事

同年十月初旬、元就・元春・隆景父子三人、宍戸・平賀・天野・三吉・山內・高野山・熊谷・古志・有地・益田・出羽・佐波以下、一萬八千餘騎を從へて、白鹿より打出で、白潟の賀羅々橋を渡りて、所々放火し、頓て富田より數里隔たりたる洗合へ打入り、此所の山頭に陣城を構へ、堀を掘り、芝土手を高く上げ、物見櫓を構へ、十月十日より、彼處に陣を居ゑられ、富田の道口には、押を置き、諸方よりの兵糧運送を差留め、數年

在陣の覺悟なりと、敵方にも見及ぶやうに、萬悠々の體にせられ、味方の掟には、縱ひ敵、近方へ相働くといふとも、下知なきに、出合ふまじき旨下知せられ、種々の計策を廻らさる。之に依つて、今歳秋冬の交、但馬國に山名但馬守豐員・同左馬助豐弘・大田垣軍監・鹽冶駿河守、因州に山名大藏大輔豐國・武田高信・草刈三郎左衞門・同太郎左衞門、美作に三浦・兩齋藤・市葦田・備前に浦上・宇喜田、丹後に一色の一族、丹波に荻野惡七・波多野伯耆守・同右衞門尉、播磨に神吉民部大輔・別所小三郎・同山城守・同孫右衞門・上月・矢島、隱岐に隱岐守が一類等、追々洗合へ使を以て、味方に屬すべき由言送りて、人質を出す者多し。

〔頭書〕或書、雲州熊野の城打廻られ、高つばに二三日在陣せられ□引退く時に、多分敵附送る事あるべしとて、吉川衆待伏して、城兵後を慕ひ候を返合せ、敵二人討取るなり。前後共に、堺與三右衞門調議して、堺も敵一人討取り、其儘引取られ、島根・洗合に陣を居ゑらるゝと云々。

〔同〕洗合の總構の内を町割をして、京堺より商人・諸職人を呼下し、長陣の用意なりと云々。

〔同〕□に、洗合□洗骸といへり。

一八　雲州伊藤城明退く事

尼子義久倫久伊藤城を圍む

伊藤開城

十月廿三日、雲州伊藤の城主作間入道といふ者、尼子を背きて、毛利家へ屬するに依つて、尼子義久、卽ち秋上伊織助以下をして、作間を攻めさせらる。〔頭書〕或書に、伊藤のふくち山とあり。秋山以下伊藤へ押寄せ、忽ち作間を攻殺し、城を乘取りたり。其後伊藤の城には、吉岡・波多野といふ者を籠めて守らせける處に、彼兩人相議して、元就に組しければ、元就卽ち小川右衞門兵衞に、鐵炮三百挺差添へて、伊藤の城へ加勢せしめらる。此由、富田へ聞えければ、尼子義久・同倫久、軍士を率ゐて、彼城を取圍まる。小川・吉岡、波多野城を堅固に抱へると雖も、兵糧盡きければ、城兵防ぐに力なくて、小川・吉岡以下の城兵、城を明けて、洗合へ立退く。是に依つて尼子方より、伊藤並に矢杉・十神の城に、人數を差籠めて、義久・倫久は、富田へ歸陣せらる。

弓の濱合戰

一九　弓濱合戰の事

同十一月、因幡・但馬より、富田の城へ送る兵糧船數十艘、沖に見えたる由、洗合へ注進あるに依つて、即ち兒玉内藏允・飯田七郎右衞門・香川少輔五郎・山縣善右衞門・大多味宗兵衞等に、隆景より、浦・豐島を加へられて、美保關弓の濱邊へ船を乘廻し、兵糧船を防ぎ留むべしと命ぜられて、陸地へは福原左近將監を大將として、飛落七郎右衞門に、鐵炮二百挺差添へられ、元春より森脇・小坂等差添へられ、弓の濱へ著きて、陣取しける處に、同十五日の夜、富田勢二千餘騎にて、押寄せたるに、福原稠しく相戰ひ、警固船よりも、兒玉・飯田等打上り、切懸るに依つて、富田勢、叶はず引退くを、追討にして數多討取りたり。陸勢には、福原宗右衞門・末國與次郎・志道源藏・長谷小次郎・門田宮内（問カ）・波多野源兵衞・秋山・内藤等、船手には飯田七郎右衞門・大多和宗兵衞・山縣善右衞門・香川少輔五郎等、比類なく相働きたり。其外吉川勢の森脇・小坂、小早川家の浦豐島、何れも分捕したり。扨兒玉・飯田等、警固船を乘廻して、兵糧船數艘乘取りて、洗合へ歸りたり。

二〇　郷人一揆退治の事

雲州所々の郷人共、野田の小屋に集り居て、毛利方の馬の草刈・薪取者共に、妨をなしければ、元就の旗本の者共、彼等を討果すべき旨、望みければ、元就、働の樣子委しく言ひ含め、桂左衞門大夫・兒玉三郎右衞門尉を大將として、庄原兵部・坂新左衞門・粟屋彌四郎・兒玉四郎兵衞・林木工允以下數多遣され、各〻彼處へ押寄する處に、郷人共も、多勢集りて、稠しく相働く。然れども早速追崩し、數百人討取りければ、其後は、郷人一揆靜まりたり。此時木原兵部・兒玉木工允・波多野源兵衞・福原彌次郎・同左京・同源右衞門・飯田新四郎・井上雅樂允・同新五郎・平佐源七郎・志道源三・三戸小三郎・粟屋又左衞門・同宗兵衞等、分捕したり。

二一　三村修理亮伯州發向の事

伯州一揆征伐

永祿七年、伯耆國に於て、鄉人共、動もすれば蜂起して、毛利家一味の國侍に、楯を突かんとする由聞えければ、元就、三村修理亮家親に命じて、伯州に打越え、南條・小森・行松等の國士に、力を添ふべき旨下知せられ、元就より、香川左衞門尉光景・入江與三兵衞尉、元春より、境備後守を差添へらる。各、三月上旬、雲州を發して、伯州へ打越え、不動嵩に在陣すれば、其邊の鄉人、早速靜まりたり。同六月七日、三村は不動嵩に留り、香川・入江、麓の如來堂に陣取りける處に、富田より、福山備後守を大將として、差出されけるが、福山、伯州の日野に著きて、鄉人を相催し、金澤・石邊・鷹巢などいふ者共、一揆交りに六七百人計りの人數にて、先づ香川・入江を夜討にすべしとて、同夜如來堂へ押寄せたり。されども豫て敵方より、香川に內通の者あるに依つて用心し、堅固に相働き、先に進める者を討取れば、富田勢、終に引退きたり。香川・入江も、少勢なる故、其儘不動嵩に引窄みたり。翌八日、三村・香川以下、福山が日野の陣所へ押懸け、稠しく迫合ひけるが、福山終に打負け、退散したり。其後三村・香川等、伯州の押へとして、同國法性寺の城に移りて守りぬ。

泉山城合戰

二三　杉原播磨守伯州泉山入城の事

伯耆國泉山〔頭書〕尾高の泉山の城の城主行松入道は、先年毛利家を賴みて、再び家城に歸り入る處に、頓て病死したり。男子二人ありと雖も、幼少なるに依つて、其家相續し難ければ、元就・元春へ談合して、行松が後家と、杉原播磨守盛重を嫁宿せしめ、彼城を守らしむべき由、父子內談の上、盛重に此旨命せられければ、播磨守領掌して、家城備後の神邊の城をば、家人に預け置き、泉山に入城したり。然るに同年、雲州勢山中鹿之助・立原源太兵衞尉・牛尾彈正忠・秋上伊織・吉田八郎左衞門以下、四千五百餘騎にて、泉山の近邊へ、度々相働きたり。杉原盛重、一千五百餘騎にて城を出で、雲州陣に逆寄して、數刻相戰ひけるが、杉原散々利を失ひて、引退きたり。其後山中・立原以下、泉山へ押寄せんとす。盛重聞きて、湖上の釣人に賄して、漁船一艘に、武士五六人乘せて、百艘計り漕浮べ、又土肥內藏允に、一揆原四五百人相添へて、山頂へ押上げ、旗三流持せて、見せ勢に置きたり。扨雲州勢は、二手に分れて、寄せ來る處、

杉原は一千餘騎にて、二十町計り打出でたり。富田勢、敵、案の外に張出でたりとて、追手・搦手一手になりて、前後の手分をし、山中鹿之助・立原源太兵衞等、先陣に進みて二千五百、二陣は秋上伊織・吉田八郎左衞門、二千餘騎にて進みたり。杉原、豫ての配立なりし故、敵の近付くに隨ひて、次第々々に退きて、十町計り引退く。富田勢、敵は引退くぞとて、前後一つになりて、進み近付く。然る處に彼山上の見せ勢、旗を差上げ、勢を立てければ、富田勢之を見て、敵搦手をも廻したり。されども さして多勢にてはあるまじとて、平野嘉兵衞父子七百餘騎、此勢を、押へん爲に向ひたり。杉原は、敵を思ふ圖に引受け、射手を進めて會釋ひ、雲州勢も、足輕を出して、矢軍する其間に、彼釣船共、半ば渚へ漕著けて、三百餘人、敵の後を遮り、一手は二百計り、湖水に船を漕並べて、横合に矢を放てば、富田勢、思寄らざる事なる故、俄に色めき合ふ處を、杉原盛重一千餘騎、無二に突懸る。湖上の船共、猶渚近く差寄せ、頻に射れば、後を遮る兵共、鬨を作つて進み懸る。敵、三方に敵を受けて、防ぐに術なしとて、周章騒げば、雜兵一支にも及ばず、散々に逃行く。山中・立原以下の宗徒七八百計り、一所に集ると雖も、引立ちたる味方に途を失ひ、一戰の中に突立てられて、數十町引きけるが、三箇度に及び、既に危く見えけるを、後藤・眞野・福塚など、所所に返し合せ、討死せし其隙に、宗徒の兵辛うじて、美保の關へ引退く。

輝元元長雲州へ出陣

二三　輝元元長雲州發向幷富田麓合戰の事

永祿八年、故隆元の嫡男少輔太郎、當年十三歳になられけるが、祖父元就、久しく雲州在陣に依つて、見參の爲め、又は富田働の先をも懸けたき旨、望まれければ、元就卽ち其旨を許さる。又吉川元春の嫡子少輔次郎元長（此時元資）は、年十八歳なるが、是より先、雲州へ赴かん事を、度々願はれける處に、元春之を許されず、少輔太郎、頓て出陣あるべき間、其時相共に、出馬すべき旨いはれけるに依りて、此度同道し、二月中旬、雲州洗合へ到りて、元就父子へ對面せらる。其後兩人、今度當國初陣の驗に、急に富田へ押寄せ、一戰を遂げたき旨、望まれければ、元就、其望に任せられ、近日富田の城へ押寄すべき旨、諸軍へ觸傳へらる。（頭書）ほしかし山輝元本陣、淨安寺山口上田の山迄陣取らるゝと云々。元春・隆景

評談せられけるは、元就、豫ては富田の城、力攻にしては、落城の功を立て難し。謀を以て、城を乘取るべき由、思慮せらる。然るに今合戰を催さるゝ事、若し危き働もやあるべきなれば、先づ兩人城近く打出で、敵の强弱を試み、其後元就・輝元の出張然るべしとて、其事を元就に告げらるれば、元就卽ち同意せらる。之に依つて元春・隆景は、宍戸・熊谷・益田・小笠原・三澤・三刀屋・南條以下、一萬餘騎を從へて、富田鄕中の麥を薙捨てさせらる。城兵七千計り、岩倉寺の邊に備へて待懸くる。寄手は、唯鄕中の働計りして、城をば攻めんともせざる間、尼子勢、山下へ下合せ、敵味方互に射手を進めて、野伏軍を始めたり。吉川長元、父元春と一所に、向はれたるが、先陣を某に給ふべき旨、元春にいひて、つと駈拔けて進まるれば、元春之を制する事能はず。同じく續いて駈出でらる。之に依つて新庄勢、一同に進むを見て、先陣の杉原盛重・南條宗勝も、共に劣らず懸りたり。隆景見て、あれ元春の陣より懸るはと、いはるゝ程こそあれ、備後竝に宍戸以下、我れ劣らずと押懸る間、富田勢叶はず、遙山上へ引退きたり。兩川の手の者は、いふに及ばず、吉田勢には、桂善左衞門・井上民部・福原宗右衞門以下、强く相働きたり。其後は城兵も打出でず。日既に暮に及ぶに依りて、元春・隆景も、頓て勢を打入れらる。

〔頭書〕□歳永祿八□、公方義輝□□□□左京大夫義繼・松永彈正弼久秀、蔑ゝ上而運ニ追討之謀一、五月十九日、三好義繼・松永右衞門佐□通等、俄來攻ニ御所一、□兵防戰皆死。將軍家使ニ放ニ火御所一、自出戰遂薨。一乘院覺慶・鹿苑院周暠、皆將軍家弟也。三好・松永誘ニ殺周暠于路一、次覺慶越ニ春日山一奔ニ于江州一、還俗改ニ名義昭一。

〔同〕或書に曰く、三家、雲州在陣の中、或時吉川元長十八歳、人數五六百にて、麥薙として打出でらる。富田より人數を出さば、相圖に笛を吹くべしとて、鹽谷口の向の山上に、久利參河守を差置かれたる處に、富田より山中鹿之助、人數千計りにて懸り來りたり。元長卽ち人數を引上げ、田堤を前に當て、手勢を分け備へ、矢・鐵炮手ひどく打□せら□れば、敵少し疹む處を、井上又左衞門も、□□□者を二手に分け、一手は、敵の歸路鹽谷口の方、一手は、鹿之助が備へたる後の方へ差廻せば、鹿之助、其謀計を察して、早々人數を引上げ、引退かんとする處を、元長

討留めんとして、急に突懸り、井上も、横合に駈入りて、敵數多討取りければ、山中漸□□□城中へ打入りたり。（虫入）久利參河守由□□□□の相圖を違へ、元長危難に及ばんとしたりければ、久利も覺悟して、身命これ限なりと思ひ居たる處に、先年大内、雲州より敗軍の時、元就も共に引取り給ふ。此時石州羽根浦に於て、同國の國侍、元就へ馳走ありたるに、此參河守も、其人數たるに依つて、死罪一等を宥められ、身上改易せられたりと云々。（虫入）

二四　富田城下三所に於て合戰の事

毛利少輔太郎輝元、兎角尼子勢と、一戰を望まるゝに依つて、同年四月十七日、三家、富田の麓の麥薙として、出張せらる。城兵、若し打出づる事もあるべしとて、三口へ備を分けらる。先づ尾小森口へは、國士を交へず、福原左近將監・桂能登守・志道上野介・口羽下野守・兒玉三郎右衞門尉・渡邊・赤川を先陣として、毛利家譜代の侍、段々に備へ、粟屋掃部・國司左京等を左右にして、輝元の旗本とにて、其外兒玉四郎右衞門・内藤六郎右衞門以下、歴々相從ふ。足輕大將渡邊太郎左衞門・飛落七郎右衞門、二百挺の鐵炮足輕を率ゐて進めば、其外備後・安藝・石見・周防・長門の國侍、何れも旗本に相加はる。元就は、夫より後陣に備を立てられたり。鹽谷口へは、熊谷伊豆守信直・同嫡子兵庫助隆直・阿曾沼豐後守廣秀を先手として、吉川元春・同元長向はる。（頭書）或書に曰、元春父子、一旦小森口へ向はれけるが、元就下知に依りて、攻口を替へて、鹽谷口へ向はるとなり。吉川の手へ、其外香川左衞門・三須兵部・遠藤等相從ふと云々。菅谷口へは、小早川隆景・米原平内兵衞綱寛・杉原播磨守盛重・南條豐後守宗勝を先陣として、向はれたり。此時城中よりも、三口へ手分を定めて、打出でたり。（頭書）或書に曰、天野民部・同中務も、福原・志道に斷りて□福原・志道を始め、近習の若者押續きて、攻懸りたりと有り之。先づ尾小森口へは、細矢木工助・河本彌兵衞を先陣として、尼子右衞門督義久、鹽谷口には、森脇市正・平野又右衞門・秋上・福山・山中・立原先陣にして、尼子九郎倫久、備を立てらる。又菅谷口には、池田入道・宇山飛驒守・本田豐前守等を魁として、尼子八郎四郎秀久、備へられたり。元就、豫て諸勢の拔駈を掟てせらるゝと雖も、當國數年の在陣に、總勢富田表の働、今度初めての事なれば、三口共に、寄手多く拔駈す。尾小森口に於ては、木原兵部・同次郎兵衞・香川少

輔五郎・粟屋源次郎・井上宗右衞門・藏田市助・粟屋右京・櫻井與次郎・南方宮内・兒玉四郎兵衞・横見など、五百騎計り先駈して、富田勢細矢木工助・河本彌兵衞が、二百計りの勢と駈合せ、稠しく相戰ひけるが、終に富田勢を駈立つる。毛利勢、逃ぐるを追うて進む處に、尼子勢、金尾の洞光寺の後畠邊にて、返合せ相戰ふに、城中よりも追々相加はりて、毛利勢を追立つれば、寄手終に駈立てられて引退けば、尼子義久四千餘騎にて、尾小森の谷口に人數を立て、備へ居らる。〔頭書〕此時櫻井與次郎・井上宗右衞門・三須兵部が被官三人、香川左衞門尉が被官四人、討死と云々。〔頭書〕渡邊左衞門大夫・粟屋右京・兒玉四郎兵衞・木原兵部・同喜三郎・庄原兵部・櫻井與次郎・粟屋源次郎とあり。其中櫻井與次郎槍下にて、數人を戰ひ、討死すと云々。然る處元就・輝元、此所へ駈寄せて、稠しく迫合ひ、輝元眞先に馬を乘入れらるれば、志道・福原其外の者、一際相働けば、尼子勢、終に打負け引退くを、七八町程追駈けたるが、元就長追を止めて、頓て勢を打入れらる。此時渡邊・粟屋・兒玉・櫻井・木原・香川・内藤・飯田・佐藤・南方・門田〔問カ〕・長屋・坪井・永井・赤川・林・中原・三戸・三宅等、槍を合せ、比類なく相働きたり。都て此口にて、討死首數七十餘なり。鹽谷口へは、元春父子押寄せらるる處に、此處にても、吉川勢笠間刑部少輔・香川兵部大輔・二宮右京亮〔頭書〕二宮右京、一書に孫十郎とあり。朝枝市允・須子平左衞門・森脇采女・熊谷が家人細迫源右衞門、阿曾沼が郎黨山本某等、五百計りにて、拔駈して押寄せたり。

〔頭書〕朝枝市允父武田左近將監始小河内と名乘る後因幡守といふ云々
- 源次郎作州寺畑討死
- 五左衞門
- 仁兵衞
- 松田九郎左衞門別所市右衞門祖父
- 又右衞門
- 又六津城討死

〔同〕森脇采女云々。同若狹守四男なり。後の若狹守・森脇飛驛守・同次郎左衞門、皆采女が兄なり。後長門守といふ。小野三郎右衞門實父なり。嫡子は又右衞門といひて、有間に於て喧嘩して死し、跡絶ゆ。

此處の山上に、敵三四千計りにて備へ、森脇市正・平野又右衞門など、先陣に進みて七百餘騎、左右の尾上より、射手を先立て下合す。笠間・香川以下渡合せ、戰ふ處に、

秋上三郎左衞門・福山次郎左衞門等三百餘人、茶磨山の麓を廻りて、横槍に突いて懸る。寄手之を見て、二手に分れて相戰ふに、笠間刑部、冑の卓物の半月を打折られ、細迫源右衞門、手を負うて倒れけるに、〔頭書〕細迫をば、此方へ連歸ると雖も、少し退きて死したり。尼子勢力を得て、一度に突懸れば、寄手忽ち突立てられ引退く。元春、後陣に備へられしが、手の者共の拔駈を制すべしとて、二宮木工助・吉川與次郎・森脇市郎右衞門・山縣四郎右衞門を差遣され、彼等富田河邊迄打出でたる處に、先駈の者共崩れ來れり。二宮以下、急ぎ河を渡りて進めば、是に力を得て、笠間・香川押返して、無二に突懸れば、富田勢打負けて、山上へ引退く。其後元春父子、旗本を鹽谷へ押寄せられ、熊谷・阿曾沼五千餘騎、先陣に進みて鬨を作る。尼子倫久四千餘騎、弓・鐵炮を先に進め、立原源太兵衞・山中鹿之助、眞先に進みて打出で、散々に相戰ひ、富田勢少し勝色になれば、倫久氣を得て、鬨を作り進まるゝ處に、元春旗本勢、七百計りにて押廻り、駈けらるれば、熊谷・阿曾沼以下、身命を捨て攻戰へば、尼子勢、遂に突立てられて引退くを、鹽谷の奥迄追込めて、頸六十餘討取りたり。又菅谷口にては、尼子八郎四郎秀久・池田入道・同宗六・卯山飛驒守・立原備前守・目黑甚四郎を先に進めて、三千餘騎にて打出でらるれば、隆景の先陣米原・杉原・南條等、互に射手を揃へ、鬨を作り渡合ひ、槍になりて戰ふ處に、寄手半上源介を、本田與次郎討取りたり。城兵池田宗六をば、南條宗勝首を取り、目黑甚四郎をば、杉原盛重が手へ討取りたり。本田豐前守は、其子與次郎が駈出でたるを、心許なく思ひ、岩倉寺に出でて、山下の樣を窺ひ居たりしが、五百計りにて、眞逆に下し合せて、敵の眞中へ突懸れば、寄手忽ち突立てられ、散々になりて引退く。隆景之を見て、入替るべき由下知せらるれば、備後勢木梨・楢崎・三吉、其外小早川家の郎黨共、入替りて進み懸る。隆景も續いて突懸り、何れも稠しく攻戰へば、秀久、終に利を失ひて引退く。此處にて雲州勢を討取る首數五十三。今度三所の合戰、何れも初度の戰は、尼子の勝にして、終の軍、三家旗本を以て、勝利を得らる。然れども城兵、何れも早く引退さし故、三所に於て得たる首員、二百六十に過ぎず。城中にも、三口にて首五十七討取りたり。此時寄手三萬騎の大勢に、一萬騎の城兵を以て、此の如く働かれたる事、尼子の將卒、流石經久の

家風殘れり。

〔頭書〕吉田衆の中、若年にて働の侍、兒玉與三郎・內藤孫十郎・飯田新四郎・湯川源三・佐藤彦三郎・藤田彌六・小倉新四郎・佐武源左衞門、何れも十四五歳より、二十歳迄の者共なり。又老年、近年軍役御免、此度出陣の衆、永井左衞門大夫・赤川二郎左衞門・同源左衞門・渡邊新右衞門・三戸小三郎・三宅孫左衞門・井上雅樂・中原善左衞門・國司助七郎・林木工允以上十人、右老若の者共、褒美を給はると云々。

〔同〕福原貞俊、自身を始め、寄子南方宮內槍を合せ、其外志道源三・長屋小二郎・〔間カ〕門田宮內・渡邊源五郎・福原左京、又志道上野介も、自身を始め、寄子渡邊甚左衞門・坪井將監・井上十郎左衞門、比類なく相働き、其外天野民部・同中務、高名すと云々。

〔同〕尾小森口に於て、尼子勢引退く時、輝元口追討たんとし給ふに、元就、桂左衞門大夫・兒玉三郎右衞門兩人を以て、其勇氣を感ぜられ、長追を制し止めらるゝと云々。

元就輝元退軍

〔同〕菅谷口に於て、敵、とある藪陰に伏勢ありて、討口るを、隆景の備渡邊兵部・豐島市之助・同常陸懸合せ、近習の侍山田新左衞門・河井國貞一族共、勇み懸れば、敵引色に見ゆれば、三吉・楢崎・長・古志等、一同に入替りて突懸りて、敵を追退くと、或書に見ゆ。

二五　富田退口合戰の事

同廿八日、元春・隆景殿として、元就・輝元洗合へ打入らる。〔頭書〕或書、其日は、淨安寺山に陣を居ゑられ、三日逗留あり

て、人馬を休め、其後洗合へ打入り給ふを有と之。城中より秋山伊織助・森脇長門守、足輕五百餘人に弓・鐵炮、手毎に持たせて先に立ち、後陣に兵一千餘騎押續きて、引く敵の後を慕ふ。元春の手には、熊谷殿して引きけるが、此由を見て、元春・信直、附送る敵と戰ふべしとて、馬を靜められしが、敵、此勢には懸らず、隆景の退口へ頻に付くる。隆景、之を追拂ふべしと、下知せられければ、小早川勢、頓て取つて返して、相戰ひたり。〔頭書〕小早川勢浦兵部・椋梨・末永以下、相戰ふと云々。城兵、敵返せば颯と引き、寄手退けば後を慕ひて、附惱したり。小早川勢、

少し引兼ねたる處を見計らひて、頻に追駈け、既に難儀に及べば、隆景も馬を引返し、采配を以て下知せらるれば、〔頭書〕尼子の先勢森脇市正〔本カ〕・口田備前守眞先に進みて、稠しく攻戰ふと云々。井上又右衞門、敵の眞先に進みたる原彌四郎といふ者を突伏せて、首を取り、吉田勢三輪小次郎も、同じく敵一人討取り、城兵少し辟易する處を、宍戸安藝守・熊谷伊豆守、扶け來るを見て、尼子勢、一度に引拂ひたり。之に依つて、寄手異議なく、洗合へ打入りたり。

〔頭書〕或書に曰く、此時尼子家にて、一騎當千と呼ばるゝ鳥井某を、國司討取り、大塚を、井上又右衞門討取ると之あり。

二六　伯耆國江美落城の事

伯州江美の城主蜂塚右衞門尉、一旦毛利家に屬すと雖も、又尼子方へ成替る由、聞えければ、元春、杉原播磨守に、蜂塚退治すべき旨下知せられ、檢使として家臣今田上野介經高・二宮木工助・森脇市郎右衞門を差添へらる。各、八月五日、美保關より船にて渡り、夜半に彼館へ押寄せ、放火すれば、蜂塚は館を明けて、城中へ引籠る。翌朝

寄手三千餘騎、左右の山より、鐵炮を揃へて打懸くれば、雜兵城より崩れ出でけるを、寄手一人も殘さず、討殺したり。蜂塚右衞門尉、腹切つて城落つれば、杉原・今田以下、數百人が首取つて歸りたり。

〔頭書〕八月朔日、大風雨にて、船を本の福良とのい堺迄吹上げたるに依りて、二三日風雨を止めて、同五日渡海す。二宮・森脇、行にて鐵炮を立て打崩し、落去すと云々。

〔同〕歸陣の上、手柄の段は神妙なりと雖も、朔日の大風に、船を出したる事、二宮・森脇兩人の曲事なりとて、元春三口日（出入）計り、對面せられずと云々。

二七　大江城沒落の事

吉田左京亮が嫡子肥前守、其頃は源四郎とて、十二歳なるを、家人共取立て、二百餘人、伯州大江の城に籠り居たり。三家、三村修理亮家親に、大江城を攻落すべき旨、命ぜらる。三村、望む處なりと領掌しければ、檢使として、香川左衞門尉光景を差

大江落城

添へられ、九月三日、三村家親二千餘騎にて、大江の城へ押寄せ、大手は三村、搦手よりは香川光景攻圍みたり。大手にて、城兵稠しく防ぎ、三箇度に及びて、突出づると雖も、無勢なるに依つて、終に一二の城戸攻破られて、城中へ引入りたり。搦手にては、香川父子、城戸押破り、城中へ亂れ入れば、谷上孫兵衞・福山肥後守・熊谷又兵衞などを元め六十餘人、大手より切拔けんとや思ひけん、三村が攻口へ切つて出でければ、三村中を開いて通し、追討にせんと、追駈くると雖も、谷上・福山等事ともせず、討拂ひて落行きたり。三村は、城兵百三十餘人が首を取り、卽ち城へ入替る。斯くて富田より、牛尾彈正忠・秋上伊織助、三千計りの勢にて、夜半に大江へ寄せ來りたり。家親、城戸口に於て防ぎ戰ふ處に、香川左衞門尉、搦手より出でて、大手へ廻り、横合に懸る間、雲州勢、利を失うて引退きたり。此時敵味方、共に手を負ふ者は、少々ありと雖も、死人一人もなし。其後元就の命に依りて、南條豐後守より、當城へ、山田越中守・一條市助・正壽院利庵以下、六百餘人を入置きたり。

〔頭書〕或書に云く、此福山肥後守、丁臺寺へ入りたるが、其後富田へ行き、或時伯州法性寺へ相働きける處に、地下人共取籠め、終に福山を射殺したり。家人共、百姓に首を取られては如何とて、主の首を切り、深田へ隱したり。之に依つて、地下人共力及ばず、福山が手を切り、彼を討ちたる證據とて、洗合へ差出す。此福山、此内より、元就の味方すべき由、數通の誓紙を以て申すと雖も、終に其事正儀にあらず。今百姓に殺され、手を切られたるを見るに、彼誓紙の判に、血をあやしたる跡あり。卽ち無實の神文の罰に依りて、手を切られたるならんと、其節、各、奇特の思をなせりと云々。

二八　富田所々附城幷山中鹿之助夜討の事

今玆九月七日、吉川駿河守元春、勅詔に依つて、正五位下に敍せらる。同月二十日、元就・輝元・元春・元長・隆景、二萬五千餘騎にて、富田表出張せられ、經來木山・石原山・瀧山三箇所に、附城を拵へて、人數を入れ置かる。又末次の土居には、米原平内兵衞を入れ置かれ、其外法性寺・美保關・福良・とのいにも城を構へられければ、丁臺寺・

天滿の要害、堪へ難く明退きて、富田へつぼみたり。之に依つて元就命じて、天滿へは、杉原盛重を籠置かるれば、菖蒲左馬允・入江大藏少輔・菊池肥前以下、三百餘人にて籠り居る。又矢杉の迫門の守山の城に、長屋小次郎を入置きて、船路を差塞がせらる。是は若狹の國より、米麥を積める商人、船漕ぎ來るを、富田より潛に出でて、之を買取りける間、夫を押へん爲なり。〔頭書〕尼子内平野又右衛門を、作州小田原に於て、齋藤をいふ者討取り、首を洗合へ送ると云々。

山中鹿之助小河内を襲ふ

其後元就・輝元・隆景、洗合へ打入られ、元春は、夫より白鹿表へ打出でられたり。斯くて元春、藝州新庄の居城へ、聊か用事ありて、小河内石見守を、藝州へ差戻され、小河内、白潟の萬願寺に止宿したる處に、山中鹿之助、三百餘人にて、富田より船にて來り、夜半に鬨を作りて、寺中へ亂れ入りたり。小河内、其儘起上りて、切つて出で、其外續いて打懸り、忽ち寺中を追出しければ、敵船際迄引退きたり。小河内、味方をば寺中に殘し置き、唯一人、敵の船陰に隱れ居て、山中を討たんとためらひ居たり。之をば知らず、鹿之助、何心なく船に乘らんとする處を、小河内集（しゅう）と出で、一太刀切つて、後へ飛べば、鹿之助、膝口をしたゝかに切られ乍ら、其儘拔打に切る。

然れども小河内、足早に引取る故、少しも恙なし。其後敵手を負うて引兼ねたる者を、一人討取りて、白鹿へ歸りたり。其由、元春聞かれて、甚だ感ぜられ、元就も聞及びて、當時尼子家に於て、武勇勝れたりと聞えし山中に、一鹽付けたる事、比類なき旨、大に感賞せられたり。

山中鹿之助の武勇

〔頭書〕富田附城在番の中、益田越中守手勢、山下へ出で相戰ひ、敵方山中鹿之助と、益田内品川狼之助といふ大力の者と、河中に切合ふ處に、秋上伊織助加勢して、品川を討取り、山中も手負ふ云々。

〔同〕或說、此時味方、伊藤與四郎中間の彦五郎討死すとなり。

〔同〕又或書に曰く、石州益田内品川狼之助、富田城中へ矢文を射て、山中鹿之助と、明朝日野河原に於て對面し、勝負すべしと言ひ送りたり。鹿之助も、其旨應諾の口出（返カ）狀を射出したり。既に約束の刻限に至りて、鹿之助は、つかみ染の帷子に、白絹にて鉢卷して、靜々と打出づれば、妹壻河邊五平次、弓矢を携へて、後に續きたり。品川は、五人張の弓に、刃先七寸の大雁俣の矢取添へ、待懸けたる處に、山中

既に川端に打臨む。　狼之助、弓矢取つて打番ひ、能引いて暫く堅め居たる處を、五平次遮つて放つ矢にて、狼〔之助脱カ〕が弓の弦を、ふつと射切つたり。　夫にて山中・品川、互に河へ飛入り、渡り掛けて、川中にて無手と組合ひけるが、狼、鹿を取つて押へ、首を掻かんとする處を、山中、下より小脇差にて、品川が草摺を引上げ、三刀刺し、刎返して上になり、首掻取つて、其儘川原へ駈上り、五平次と打連れ、靜々と城中へ引歸りたり。　寄手の諸勢、只呆れて、見物したりと云々。

二九　熊谷原僞りて元就に降る事

元就初は、富田城中の者、一人も落すべからずとて、所々に關を居ゑ、落人を搦取りて、首を刎ねられけるに依つて、雜人原に至る迄、拔落つる者なく、大勢城中に籠り居たり。　是は城中の兵糧を、盡さん爲の謀なり。　其外諸所に附城を構へて、他國よりの糧道を、斷たれければ、彌〻城中、糧米乏しくなりぬ。其上にて、城中の勢落去に於ては、命を助くべき旨披露して、所々の道口を開かれければ、雜人多く落失せ、宗

熊谷原元就に降る

徒の者共も、緣を求めて降參したり。　爰に熊谷新右衞門・原宗兵衞といふ者、義久にいひけるは、我等兩人、僞りて洗合へ降人に出づるに於ては、元就、定めて對面あるべき間、隙を窺ひ、刺殺すべし。　若し本意を遂げば、兩人が子供を、世にあらしめて給はるべき旨いひければ、義久、忠志少なからずと感じて、即ち兩人が子供を召出し、五千餘貫を宛行ふべき旨、判形を給はりたり。　扨二人の者、洗合へ到りて、降參の由言入れたり。　元就許して、對面せらる。　其日は、降參の者三十餘人ありて、熊谷・原、其中に交り出でたるが、豫て思ひしには相違し、元就父子三人、一間隔てゝ著座せられ、其次に福原・兒玉以下、二十餘人並居、奏者・酌に至る迄、皆兩刀を差して、用心の體なれば、兩人の者共、終に手を出す事能はず、頓首して退出す。　其後元就、今日降參の者の中、五六番目に出でたる二人、見咎むる處あり、手堅く番を附けよと命ぜられて、侍數十人、彼の兩人に附置きたる處に、兩人隙を窺ひて、終に逃去りて、富田へ歸り、義久を始め、其外の者に、其由を語りて、大に元就を恐懼したり。　其後降參の者、毛利家に於て、其事を委しく語りたり。

尼子義久勢威衰ふ

三〇　尼子諸侍降參の事

尼子義久、籠城久しく、威武年々に衰へければ、尼子譜代の家老共、多く毛利家へ降參す。中にも牛尾豐前守は、弱年の時、美姿世に類なく、晴久寵愛して、賞祿も他に異なりしかば、よも敵に降る事は、あるまじと思ひけるに、尼子家の衰へ行くを見て、終に毛利家へ降參したり。又義久、大塚與三右衞門といふ佞人を、用ひられし故、政道邪に成行き、譜代の侍、多く恨を含みて、龜井能登守・河本彌兵衞・佐世伊豆守・湯佐渡守以下の舊要の者も、或は大塚が讒言を恐れ、或は糧盡きて、飢に臨むを忍びずして、皆降人となる。

〔頭書〕或書、佐世伊豆守下に、同與三左衞門とあり。又或書に、伊豆守下に、同勘兵衞・同助三郎とあり。其外三刀屋・三澤・宍道・馬木・櫻井・村中・熊野・吉岡・波多野は、最前より、追々元就に從ひ、河本・石橋・神代・小鴨は、因州へ立退きたりとあり。又宇山飛驛守は、元より有德なる者故、城中の落人を留め、扶持して、勢減せざる樣に、謀をなしける處に、例の大塚與三右衞門、宇山、落人を多く抱へ置く事、全く味方の爲にあらず、元就へ內通して、裏切せん用意なりと、樣々讒言しければ、義久之を信じて、永祿九年正月朔日、宇山飛驛守・同嫡子彌四郎を、終に誅戮せられたり。之に依りて、宇山が日來抱へ置きたる者共、皆元就へ降參す。又津森入道にも、義久疑心を掛けられしかば、津森、不審を晴らさん爲め、自害しければ、是より多く、義久を疎みて、牛尾遠江守・嫡子太郎左衞門・次男彌次郎〔頭書〕或書宗次郎とあり。父子、打連れて降參し、其外牛尾大炊助・同彈正忠・宇山善四郎・里田右京亮・牛尾次郎左衞門尉・察田入道等も、追々敵に降りたれば、富田勢彌〻減じて、防戰の便もなくなりぬ。〔頭書〕尼子諸士降參は、永祿八年の冬より、同九年の春夏の交なり。

三一　尼子義久下城の事

毛利元就、數年雲州に在陣して、尼子の滅亡、近きにあるべき由、毛利家の武威、諸國の聞え、强大なりしかば、永祿九年の夏、織田上野介信長、吉川元春へ、飛札を投

せられて曰く、

雖無差題目候啓達候。永々雲州御在陣之由候。依之萬端被勵武略之旨、其聞候。誠名譽之儀候。彌可被任御存分事勿論候。自元就切々承候條大慶候。恐々謹言。

卯月十一日　　織田上野介信長

吉川駿河守殿

元就病む

斯くて尼子籠城、去る永祿三年より、今茲同九年に至りて、凡そ七箇年なり。其間所々に於て、城兵或は討死、或は落失せ、或は降參しける程に、今は纔に、三百人計り殘り留り、其上兵糧乏しく、落城遠かるまじと、風說する處に、元就今年五月の末、風氣を煩はれ、後には瘧疾となり、種々藥術を盡さるゝと雖も、其驗曾てなく、病日々重る處に、或夜元春・隆景、同じ樣に見られし夢に、老翁一人、枕上に立ちて、此度元就の煩を治すべしとならば、尼子の命を助くべし、我は富田の八幡なりと宣ふと、見られしかば、即ち兄弟相議し、元就の側に寄りて、父子相談せられけるは、先年大樹義輝卿より、聖護院准后を以て、毛利・尼子和睦すべき由、上命あり。尼子には、即ち領掌すと雖も、元就、八箇條の斷ありて、上意を返されける處に、其理至極なれば、義輝卿も、此儀を持扱はれける折節、三好左京大夫義繼・松永右兵衞佐久通等、義輝を弑し奉るに依りて、其事止みぬ。然れば今度、其旨を以て、尼子が命を助け、下城さすべしと、相談を極められ、聖護院准后道增の御弟子道澄に、元春・隆景、右の趣を言ひ含めらるれば、道澄即ち米原平內兵衞を以て、立原源太兵衞尉へ、言ひ入れられけるは、先年公方義輝卿、毛利・尼子和睦の儀、取扱はれける處に、義久即ち領掌して、既に誓詞に及び、其草案是にあり。然れば今當城を明渡し、諸士の一命を救はれ然るべき旨、義久に演說すべき由、委細に言ひ送らる。立原即ち此趣を、義久に言ひ入れければ、即ち家の子郎黨を集めて、意見を問はるゝに、各〻申しけるは、當家數年の籠城に、味方悉く敵に降りて、殘卒終に三百計りになりぬ。然りと雖も、當城無雙の要害にして、今迄殘り留る者共は、義に依つて身命を抛ち、城に殘れる勇士共なれば、志を一つにして、防ぎ戰ふに於ては、尤も落城の期、近きにはある

尼子義久
倫久
秀久
等富田下城

べからずと雖も、兵糧悉く盡き來り、諸方に後詰の味方もなく、行末頼みなき城に籠りて、飢死せられんより、先づ一旦扱に任せられ、時節を待たれ候へかしと、皆一口に諫詞しければ、義久も即ち同心せられ、其由、聖護院へ返事せられければ、道澄、頓て其事を、三家へ告げられたり。是に依つて永祿九年七月六日、尼子右衞門督義久・同九郎倫久・同八郎四郎秀久、數代の居城を出でて、〔頭書〕此時侍七八人を召具し、城を出でらる。元就に降られしかば、即ち福原左近將監貞俊・口羽刑部大輔通良、二千餘騎にて、富田の城を請取りて入替る。斯くて義久・倫久・秀久兄弟三人、侍七八人召具し、元春・隆景兩手の者、一千餘騎警固し、藝州長田へ送りしかば、夫より内藤下總守請取りて、同所圓明寺といふ禪院に、押籠め置かる。警固の儀、猶念を入れられ、二重三重に柵を結廻らし、此外に、元就よりは桂少輔五郎、元春より二宮木工助、隆景よりは宗近加賀守を附置かる。

〔頭書〕或書に、元春よりは、二宮木工助・村竹與三右衞門を附置かるゝとあり。又或說には、元就よりは、内藤中務に、同心の侍多く差副へ、附置かれたりともいへり。

此時尼子兄弟に從ひて、藝州へ下りし侍は、先づ義久へは、宇山右京亮・立原備前守・本田豐前守・同與次郎・大西十兵衞尉・同嫡子新四郎・馬木彦右衞門・力石兵庫助・津守四郎次郎・福瀨四郎右衞門・本田太郎左衞門・眞野甚四郎・高尾宗五郎・大塚助五郎・正覺寺等、以上十五人なり。九郎倫久へは、田賀勘兵衞尉・長谷川小次郎・山崎宗右衞門・重藏坊、以上四人。八郎四郎秀久へは、松浦治部丞・松井助右衞門二人なり。此外内の者、少々相從ひたり。立原源太兵衞尉・山中鹿之助・三刀屋藏人・秋上三郎左衞門・同伊織助・高尾縫殿助・河添美作守・黑正甚兵衞・横道兵庫助・同源介・同權允・森脇市正以上四十九人、義久と同じく、藝州へ下らん事を願ふと雖も、元就許されず。〔頭書〕一書に、立原・山中以下の内に、秋山虎之助・池田藤兵衞・加藤彦三郎之を載す。杵築迄義久を送り、夫より散々に別れをなす。中にも立原源太兵衞は、此度扱の使なるに依りて、所領二千餘貫を與へらるべき旨、いはれけれども、義理を重んじて、毛利家に仕へず、忍びて京都へ逃上りたり。

〔頭書〕赤川左京亮事、雲州在陣の間、下の關に置かれたる處に、如何なる違目あ

元就等藝州歸陣

りてか、雲州歸陣の節、討果さる。弟赤川源左衛門をば、吉田に於て、粟屋彌四郎同源次郎、其外近習の衆に言ひ付けらる。源左衛門覺悟仕り居たる處へ、粟屋彌四郎仕懸け、刺違へたり。左京亮が養子又五郎をも、歴々に言ひ付けらるゝ處に、又五郎、殊の外相働き、時刻移る處へ、粟屋源次郎來り、難なく討果したり。扨富田の城には、天野紀伊守隆重を籠置き、雲・伯兩州の押とし、元就・輝元・元春・元長・隆景相共に、杵築へ參詣し、夫より元就・輝元・隆景・元長は、藝州へ歸陣せられ、元春は、若し敵の殘黨國中にありて、如何なる企もやすべき。又亂國の後なれば、國民安堵の爲め、其勢五千餘騎にて、暫く雲州に在陣せらる。雲州落去に依りて、翌年永祿十年三月、源義昭より、三家へ使を給はる。吉川元春へ下されたる御内書に曰く、

雲州之儀落去之由、其聞尤無比類候。然者此砌入洛之儀、元就別勵武略候樣令馳走者、可爲神妙候。委細聖護院門跡可有演說候。猶信惠可申候也。

永祿十年三月二日　義昭　御判

吉川駿河守殿

〔頭書〕或書に曰く、元就御病中、京都より、翠竹庵道三を呼下して、醫療を加へられしが、道三、雲州滯留の中、元就より附置かれたる用達の侍に、潛に私語きけるは、元就公、今の御脈にては、四五年の内は苦しからず、五六年過ぎては、夏の季を、殊に御用心ありて然るべしと、申しけるが、果して今年より六年を經、元龜二年六月、終に逝去し給ふ。道三の診脈、六七年經ての先兆を、豫め考へ知られたる事、希代の名醫なりとて、後に此事を聞及びたる者共、申合ひけるとなり。道三、雲州滯留の中、暇ありければ、百八箇條の藥方を編錄して、雲陣夜話と題號して、家の祕傳小切紙の中に入置きたりと云々。

〔同〕義輝遭害時、義昭自奈良逃入春日山、八月移江州甲賀、又入矢島鄕、賴佐佐木承禎。承禎不果。同十年八月、承禎子義弼、與三好相通、欲殺義昭。依之密出江州、赴若州、依武田義統。以國小難遂功、移越前朝倉義景、待之甚疎。依之同十一年、賴信長。信長則使不破河内守往越前迎義昭。七月廿五日、義

昭到濃州入立正寺云々。　因此說、則永祿十年三月頃者、義昭矢島鄕居住之時歟。

〔頭書〕或書に曰く、富田の城、天野隆重へ〔脫字アルカ〕き旨仰聞けられたる處に、隆重申しけるは、彼城在番の儀は、近國押の爲に候處、敵國數箇國に隣り、數代大身の尼子家の居城の跡に候へば、御幼少には候へども、少輔十郎殿、差置かれ候へば、某、元秋の知下を守りて、在城仕るべき旨申すと雖も、亂國の後、元秋若輩の者、國中の政務、尼子殘黨の押へ、旁、却て覺束なし。兎角隆重一人、遠慮なく在番の儀、思召さるゝ旨、重ねて宣ひ聞かせらる。　是に依りて隆重、三箇條の願、書付を以て訴訟を遂ぐ。

一、當城之儀、被預置候條、萬端疎略存間敷事勿論候。　併目代一人可被付下事。

一、城中山下外構爲繕、普請破損作事方存知候仁一人可被付下事。

一、尼子家中今度降參之衆被召抱、隆重被付置面々江、堪忍料相渡候仁一人付可被下事。

右之條々許容ありて、目代として長屋小次郎、普請方には進藤豐後守、堪忍料勘渡の爲には、野村白悅を差添へられたりと云々。

〔同〕公方義昭者、軍將義晴第四男而光源院義輝竝將軍義榮之弟也。　始覺慶南都一乘院門主也。　永祿八年、公方義輝、爲三好・松永被弑時、覺慶避其難逃江州、還俗改名義昭。　永祿九年十二月、義榮任征夷大將軍。　九月早世。　義昭今年七月赴美濃。　九月織田信長奉迎之。　義昭自美濃上洛。　十月十八日任征夷大將軍、參議兼左近衞中將、敍從四位下。　翌年任權大納言、敍從三位。　其後義昭與信長構矛盾、信長廢放。　而天正元年出奔京都而到宇治、又赴紀州。　其後蟄居備後鞆、號鞆公方。　毛利輝元扶助。

〔奥書〕永祿十年、備前浦上之臣宇喜田直家、殪其主浦上、奪因・播・作戰于所々而大亂。

藝侯三家誌　卷三　終

藝侯三家誌　卷四

一　伊豫國河野加勢の事

〔頭書〕今茲二月八日、左馬頭源義榮任二征夷大將軍一、九月卒。同月廿六日、左馬頭義昭自二濃州一上洛。同年十月十八日、義昭補二征夷大將軍一。永祿十一年、伊豫國の住人河野彈正忠通直・同嫡子四郎通信、或作通宣、多年毛利家の幕下なる處に、今年元就へ、使を以て申越す趣は、豫州大洲の城主宇都宮豐綱と、近年矛盾に及ぶ處に、土佐の國長曾我部元親、宇都宮に力を合せて、動もすれば、河野が領分へ相働き候。加勢を給はらば、宇都宮を退治すべきの由なり。元就、卽ち許容の返事して、南前は小早川の支配なるに依りて、隆景より加勢を遣さる。〔頭書〕一說に、河野は毛利家緣者たるに依り、加勢あり云々。吉川元春よりも、森脇大藏・井下新兵衞尉に、足輕數百人附屬して、豫州へ渡されたり。

元就河野通直に加勢す

〔頭書〕森脇大藏七郎左衞門 ─ 彌十郎 ─ 越後 ─ 大藏跡なし
　　└ 和泉守　　└ 源右衞門

河野力を得、此勢を合せて五千餘騎、大洲へ押寄する。此時長曾我部より、久竹內藏允に、千餘人を添へて加勢すれば、宇都宮豐綱、淸の黨久枝又左衞門尉淸良を先陣として、伽の森へ打出でて、終日相戰ひ、吉川勢、森脇・井下も、比類なく槍を合せたり。其日は勝負半ばにして、互に相引に打入りたり。斯くて兩川の家人共、分捕すと雖も、宇都宮多勢にして、退治輙からざるの由、藝州へ注進しければ、吉川駿河守元春・嫡子治部少輔元長・小早川左衞門佐隆景、三萬餘人を帥ゐて、四月中旬、藝州を立ちて、三日が中に、豫州へ渡海せらる。河野父子出迎へ、所の案內して、宇都宮が屬城共、多く攻落し、同廿四日、豐綱が端城上すがひへ、河野先陣して、一時に乘破り、五百餘人を討捕りたり。下すがひへは、兩川の手の者、一番に攻入り、首三百餘討取れば、其外は、多く山傳に逃退きたり。夫より伽の森の城を取圍みて、攻むる

伽の森合戰

元春隆景豫州出陣

伽の森城開城

長曾我部元親出陣

宇都宮豐綱坂降ト城

處に、城兵も稠しく防戰すと雖も、小勢なる故、即時明退きたり。此時吉田衆には、坂新五左衞門・富落小次郎・小早川衆井上又右衞門分捕したり。吉川衆香川兵部大輔、城へ乘りて、敵一人突伏する處に、益田越中守藤包が若黨吉岡平左衞門馳來り、某をも引廻され、分捕させしめ給はるべしと、賴みければ、香川頓て能き敵一人切伏せて、首を吉岡に討たせたり。其後宇都宮が大洲の居城へ、陣を寄せらるゝ處に、長曾我部土佐守、土佐・讃岐の勢二萬餘計りにて、大洲より百町計り隔て、柳原といふ所迄打出で、一夜が中に、二百間四方の陣城を構へ、宇都宮が後詰せんとす。元春・隆景相計つて、河野父子・能島掃部助・來島出雲守・平岡遠江守等に、中國勢宍戸安藝守・古志清左衞門・福原左近將監・國司右京亮・兒玉三郎右衞門、其外防・長の勢差添へ、河野が手勢を合せて、彼此一萬二千計り、後詰の押として、陣を固くし、敵を待たせらる。扨吉川・小早川、大洲の城を取圍みて、急に攻めらるれば、宇都宮も大剛の大將なる故、度々打出でて迫合ふと雖も、寄手猛勢なれば終に叶はず、降を乞うて下城しければ、兩川城を請取りて、河野に渡され、豐綱をば、隆景の領地備後の三原に於て、稠しく警固を付置かれたる處に、程なく風氣を煩ひ、終に死去したり。

毛利大友再び矛盾

〔頭書〕小早川勢浦兵部・梨羽・椋梨・井上又右衞門・豐島兼久等、槍を合せ相戰ふ。其後元春父子・隆景、長曾我部が陣へ、押寄せんとせらるゝ處に、元親、大洲落城の由を聞きて、柳原の陣を引拂ひて、本國へ歸り去りぬ。河野以下、後を慕はんとしけれども、土佐守も、さる良將にて、備を亂さず、嚴重に引取る間、追討つ能はず。其後宇和島の西園寺公廣も、兩川へ使を以て、乞うて旗下に屬せらる。是に依つて豫州悉く平均して、皆河野が成敗に任せ、吉川・小早川、中國へ歸帆せらる。

二　豐前國三嶽城攻の事

同年、筑前國立花に事ありて、毛利・大友、又矛盾起れり。其故は、筑前に兩立花として久しき國侍あり。彼の庶流の立花、好色の故にあるまじき擧（ふるまひ）して、不慮に下臈の爲に刺殺さる。家の子郎黨共、城中に集りて、上下騷動す。爰に宗像重繼、立花と年來の怨敵なる故、此時を幸に、三千餘騎にて、立花へ押寄する處に、彼城には、

大友進軍

大將不意に死する上、味方亦不和なれば、一支もせず、方々へ落散れり。宗像頓て人數を入替へ、城を守らせたり。斯くて大友此由を聞き、大勢を以て、彼城を切返して、立花彌十郎其外臼杵新次允・田北刑部少輔・同民部大輔・鶴原掃部助以下、宗徒八百餘騎、雜兵三千餘人、差籠め置き、戸次入道道攝・佐伯・清田以下に、二萬餘の勢を副へて、宗像・高橋が居城を攻めんとす。宗像重繼・高橋秋種は、無二の毛利方なる故に、此由、藝州吉田へ注進しければ、元就、即ち吉川元春父子・小早川隆景を、九國へ加勢させしめらる。兩川其頃は、藝州渡海に依りて、彼國隙明き次第、直樣九州發向あるべき旨、元就使を以て言ひ遣さるゝ處に、各、歸帆の折節、同國五々島に於て、此由を聞かれたり。兩家の老臣共は、一旦歸國せられ、軍士を休め、其後下向あるべき由申すと雖も、彼等數年、毛利家に屬し、忠志最も深し。此度其急難を救ふ事、延引に於ては、義の缺くる處ありとて、直に九州へ發向と極めらる。元春父子に相隨ふ面々は、安藝の國に熊谷伊豆守信直・同兵庫助隆直・己斐豐後守・香川左馬助・三須兵部少輔。石州に益田越中守藤包・佐波常陸介・同越後守・羽根彈正忠・富永三郎左衛門・津野駿河守・出羽・岡本・周布・久利・都治・小束。出雲には三澤三郎左衛門・三刀屋彈正左衛門・宍道遠江守・米原平内兵衛尉・中尾豐前守。伯州に南條豐後守宗勝・杉原播磨守盛重・吉田肥前守・小鴨四郎福頼等なり。吉川家の郎黨宮庄次郎三郎元正・今田上野介經高・同嫡子中務少輔經忠・笠間刑部少輔・吉川式部少輔經家・香川兵部大輔春繼以下、總勢一萬五千餘騎。隆景には、藝州に平賀太郎左衛門・天野民部大輔・同中務少輔・香川淡路守・同宗兵衛尉。石州に小笠原彌次郎長雄。備後には山内新左衛門尉・三吉式部少輔・同新兵衛尉・宮次郎左衛門尉・高野山入道久意・同五郎兵衛尉・久代修理亮・楢崎・木梨・長。備中に穗田の庄式部少輔元祐・田治部藏人・志賀入道・上原・石川一黨・細川の一族、其外小早川家の郎黨乃美安藝守・梨羽中務・椋梨次郎左衛門尉・河井大炊助・草井式部少輔・南兵庫・小泉助兵衛尉・末永七郎左衛門尉・井上又右衛門・豐島市助・粟屋雅樂助以下、一萬七千餘騎相隨ふ。吉田旗本勢には、福原左近將監貞俊・桂能登守元澄・志道上總介・口羽刑部大輔等、己が一組々々を相伴ふ。其外宍戸安藝守には、備中の者共、少々相隨へり。又防・長兩國の武士杉次郎左

元春隆景進軍

三嵩城合戰

衞門・杉森下野守・仁保右衞門大夫・吉見正賴・三浦・吉田・朝倉以下二萬餘騎。船手には兒玉内藏允・粟屋内藏允・浦兵部丞・飯田七郎右衞門・同彌二郎・桑原入道。此時伊豫の來島出雲守病氣なる故、家人原太郎左衞門を差出す。是等を合せ、都て中國勢五萬餘騎、思ひ〳〵に船を飾り、豐前の國へ押渡らる。爰にて兩川詮議して、同國馬の嶽の城主長野三郎左衞門、味方を背き、馬の嶽の城へ、大友勢を引入れ、敵の色を立つる間、先づ高橋が居城へは加勢を籠め、最初に長野が抱へたる三ヶ嵩（みつがだけ）を攻落すべしとて、高橋が居城寶萬へ、元春より森脇若狹守、隆景よりは有田加賀守を、加勢として差籠め、元春父子・隆景、十一月五日卯の刻より、三ヶ嵩を取圍む。此城には、大三嵩・小三嵩とて、丸二つあり。中國勢、先づ大三嵩へ攻登る。城兵、敵大勢故、氣怯れたる處に、元春の先手一番に乘入り、敵二十餘人を討取れば、城兵皆、小三嵩へ逃入りたり。寄手續いて、小三嵩へ攻登る。此城には、長野三郎左衞門が叔父長野兵部大輔といふ大力の剛の者、千餘騎にて籠りたるが、狹間を開き、弓・鐵炮を散々に射出せば、井上新右衞門・内藤十郎兵衞、斯るむつかしき所は、何時も我等こそ仕

三嵩城陷る

れと荒言して、乘入らんとしけるが、兩人終に其處にて射伏せらる。猶續いて進みたる吉川勢十餘人、枕を並べて射殺されたり。是にも臆せず、今田中務少輔・吉川式部少輔・香川兵部大輔・山縣四郎右衞門・二宮木工助・森脇内藏大夫、無二に塀を引破り、一度に城へ乘入りたり。其中に今田中務、能き兵一人討取りて、其日の一番首を取る。森脇内藏大夫、組討にして首を取る。森脇は、生年十七歳なり。其外吉川・香川・山縣・二宮、何れも分捕す。小早川勢、人に先を懸けられ無念なりと、射れども突けども、少しも疼まず、一同に乘入る。其外吉田勢福原・桂・志道以下、何れも乘入れば、小三嵩も程なく乘崩したり。城主兵部大輔は、兵五十人計り左右に從へ、切廻りけるが、或は討たれ或は落ちて、唯一人になり、死狂に働きけるが、三間柄の槍、二つ三つに打折られて、大太刀を拔き、一方を破り、落行かんとする處に、石見國の住人佐波常陸介隆秀・能き敵と見て追駈くる。長野取つて返し切結ぶ。長野は、三尺に餘りたる太刀の柄の先を取延べて打ち、佐波、三尺三寸の太刀にて切合ふ程に、如何にも危く見ゆる處に、常隆介が家人深井市之允といふ者、長野を後より、强く

抱き留めければ、長野卽ち太刀を我が腹へ突立て、深井をも一つに貫きて、二人共に伏したり。常陸介卽ち頸を搔きて、大將長野兵部を、佐波隆秀討取りたりと名乘りたり。森脇市郎右衞門も、長野が同氏の者一人討取る。小早川勢にも、神田右馬允・河井大炊助等分捕す。爰に年の頃四十計りに見えて、長六尺餘の大の男、茜の弓籠手さし、首一つ提げて、元春の實檢に備ふる振して、近付き寄り、首を投付け、元春に切懸る。元春、其儘床几より立上り、太刀を拔合せ、終に眉間を切破りて、卽時切殺されたり。彼者も相働きたる故、元春の胸板に、太刀の跡付きたり。此男、如何なる者とも知れざるが、長野が從弟にて、九國に名を得たる大力なりと、高橋が者共いへり。隆景の前へも、敵一人近付きたるを、桂上總介之を見知りて、此男は、敵と見えたりといふを聞きて、其儘隆景に切懸るを、桂上總介・安國寺瓊長老二人、其外側にありける者、討留めたり。是等を始め、首數五百七十餘なり。宍戸・吉見・福原・桂・志道・口羽・渡邊左衞門大夫・赤川又五郎等が手の者、分捕高名す。兩川、軍の首途よしとて、勝鬨を執行ひ、其儘爰にて越年せられたり。赤川又五郎事、一說に、養父赤川左京亮。雲州御在陣の中、遂目に依りて、御成敗の時、一同に討果されたる由、一說あり。此に出でたるは、別人なるか。但雲州にて討果されたりといふ說、正儀にあらざるが、不レ審。

〔頭書〕元春・隆景、五々島滯船の中、元就より、平佐藤右衞門・永井右衞門大夫兩人を差渡され、和知・湯谷兄弟を、此處にて討果さるべしと言ひ送らる。兩川返事に、國衆同道して、辛勞させたるに、中途にて申付くる事、各、所存も如何なれば、今度は先づ閣かるべきかと、兩川よりも、別に使者相副へ、返詞せられければ、元就重ねて、然らば先づ嚴島の押兒玉肥前・佐伯兩人に、賴み置かるべき由、いはるゝに依りて、和知・湯谷兄弟を、嚴島へ渡し置かれ、兒玉兩人、稠〻く相守る處に、和知・湯谷忍び出で、神殿に取籠り、燒草を積置き、控へ居たり。元就此由を聞かれ、熊谷右衞門尉に、何卒才覺を以て、神殿を出し、討果すべき旨言ひ含めて、渡されたり。熊谷、和知が內陣へ出入の樣子を見切りて忍入り、走り懸りて引組み、拜殿迄引出して討果す。湯谷は、詫びて社頭を出でて、相果てたり。熊谷が手柄比類なしと、淺からず感ぜられたり。是に依つて彼大御前の社建替へられ、吉田殿を請待ありて、遷宮を行はれたり。

〔頭書〕或說、和知・湯谷兄弟、隆元に毒を飼ひ、其事顯れて討果さるゝと云々。

〔同〕嚴島大木に、兩人が墓、今にあり。

〔同〕兄弟は、元就の膳夫といふ說もあり。

〔同〕又異書に曰く、十月十八日、討果すとなり。一書には、和知・木谷兄弟とあり。

備後の國侍と有之。

〔同〕又或書に曰く、河野通信、毛利家の加勢に依りて、運を開きしかば、永く毛利家を賴むべき爲とて、宍戸隆家娘、元就孫女なるを申請け、壻となすと云々。

〔同〕和知兄弟が事、異書に載する處、去る永祿六年、大友義鎭、神田の松山發向の時、隆元後詰として、防府迄下向の處に、毛利・大友和平の儀、公方より御扱の爲め、聖護院殿御下向に依りて、兩家和平相調ひ、是に依りて隆元は、岩國永興寺へ、門跡を御請待、御馳走有之、歸洛の節、隆元も、門跡の御船見送り給ひ、夫より二十日市迄、歸帆し給ひ、翌七月八日、彼處を立ちて、備後へ打出で、和知彈正が居館に、三日滯留の中、和知御膳を差上げ、其後彼處を立ち給ひて吉田に到り、幸鶴殿へ御對面あり、頓て雲州へ御發向あるべしとて、佐々部に著き給ひ、暫く御逗留、人馬を休め、八月五日、發馬し給はんとの事なる處に、四日の夜、俄に御發病ありて、終に逝去し給ふ。是れ彼和知兄弟、逆意を持つて、彼館御滯留の中、潛に毒を進めたる故なる由、後露はれて、永祿十一年、彼者兄弟を、嚴島に於て成敗し給ふと云々。

〔同〕森脇內藏大夫、三ヶ嵩にて組討にして首を取る。生年十七歲なり云々。評に曰く、永祿五年、本庄越中守、御成敗の時、二男大藏左衞門が討手として、山縣越前・森脇內藏大夫兩人を、手當とし給ふ由。然れば今度三ヶ嵩にて、高名仕りたるは、後の內藏大夫なるべし。同人なる時は、永祿十一年十七歲に當れば、永祿五年は、十一歲の筈なり云々、前の內藏大夫は、森脇後の若狹守子なり。三ヶ嵩にて高名の內藏大夫は、此時は外に若名ありて、未だ內藏大夫とは名乘らずと雖も、後世、後の名を以て語り傳ふるに依りて、是等の書にも、斯の如きか。別の名を以て書記する時は、强ひて不審もなき事なりと云々。

元春隆景立花城を圍む

三　筑前國立花城攻并大友後詰の事

永祿十二年三月中旬、元春父子・隆景、筑前の帆柱といふ所へ陣を易へ、夫より若松葦屋の渡を越え、熊が嶺を過ぎて、四月四日、段といふ所へ到り、同五日、立花彌十郎が居城立花の城を取圍む。

〔頭書〕或記に曰く、此時、大友より後詰の押として、熊谷伊豆守・三須兵部少輔・遠藤修理・香川左衞門尉・三吉・楢崎・穗田、吉川の内森脇加賀守・山縣・朝枝・堺。小早川の内椋梨・閤田・苗田・小泉、其外宍戸が手者の池田・佐々部・奥垣・内田 木原等、城より八町程隔て、方角の山の頂に陣取ると云々。又高野山入道も、後詰押の手當たり云々。

此城には、大友よりの加勢を合せて、城兵六百餘騎楯籠る。寄手三方より、仕寄を付けて攻懸る。水の手は吉川衆、南方は小早川勢、城の尾崎は吉田衆、白瀧口は吉見大藏大輔正頼、其外東西南北の山々峯々に、四萬五千餘兵陣を取る。後卷の用心に、塀を付け柵を結ひ、堀を掘り柴土手を上げ、向城の如く構へて、城を、晝夜の境なく攻め近付く。〔頭書〕四月六日より、陣に付かるゝと云々。寄手、勢樓を組上げたるに、杉原播磨守が手の者石原彌十郎〔頭書〕石原信濃子なり。吉川勢山縣小五郎・同五郎三郎二人、鐵炮に中つて死す。其外、手負多く出來ると雖も、寄手次第に詰懸けて、城中堪へ難くなりぬ。〔頭書〕或說、神主左衞門大夫も、此時討死すと云々。之に依つて、此由頻に豐後へ注進しければ、大友左衞門督入道宗麟、立花の後詰の爲め、自らは豐後の府にあり乍ら、柳川將監・田原入道重恐・同近家・其弟近廣・又弟近貫、侍大將には戸次入道道攝〔頭書〕戸次は卽ち立花飛驒守父祖なり云々。・臼杵新介・志賀市右衞門尉・佐伯權助・清田五郎左衞門尉・大友駿河守、其外武田某・吉廣嘉兵衞尉宗行國崎矢上城主・本庄新兵衞尉豐後早見郡高尾の城主・古澤右馬允豐後國崎烏帽子嵩の城主・細野善內豐後四手尾の城主・矢部助右衞門尉豐前宇佐郡入口嵩城主・田澁重富豐後尾崎城主・秋友式部少輔豐後秋山城主・武田志摩守豐後飛來城主・矢坂甚太郎・杵月右馬允・古澤入道一竿・吉廣將監・同少輔右衞門・久保田內藏允・矢坂平右衞門尉・上野佐介・同縫殿助・長松式部少輔・小野市右衞門尉・戸鄕七介・小笠原上總介・畑野勘八・味武入道一萬田入道十古・奈須軍兵衞尉・時枝平太夫・今枝土佐守・橋宇津又兵衞尉・中山內記・賀來源介・熊井越中守・宇河間右衞門・星野源次郎・同民部、都て分國豐後・豐前・筑後・肥後・日

向の勢、上は六十、下は十六歳を限りて催され、其外旗下肥前の龍藏寺・松浦、薩摩・大隅の島津等も、加勢を出し、總勢十二萬八千餘、五月五日、立花表へ差出し、中國勢の後を、くる〳〵と取卷き、山野に充滿して陣を屯す。

〔頭書〕鑑直吉弘左近大友一法師能直十一男左近丞泰廣十四代末葉

鑑宣吉弘左近大友義鎮爲二猶子一天正六年十一月十二日於二日州新納院高城一島津與大友合戰之時討死

高橋彌七郎高橋參河守秋種爲二養子一——統虎立花左近戸次伯耆守鑑連入道道爲二養子一入二筑後國立花城一後改二宗茂一秀吉公之時領二柳川十二萬石一叙二任從四位下侍從一

高橋彌七郎——女大友義鎮室

又三萬餘騎、宗像表に陣取り、秋山・鶴原の一族共七千餘騎は、船手を取切つて、磯輪浦邊を固めたり。元春・隆景は、立花の城をば、何時も攻落すべし、先づ後詰勢を防ぐべしとて、持口々々には仕寄を置き、總陣の廻に堀を掘り、塀・柵・櫓等迄、五日が間に手堅く構へ、後詰押の軍勢に、持口彌〻堅固に相守り、面々の持口の外、他の陣にて、如何なる迫合ありとも、我が持口を守りて、他の陣へ行くべからず。何れにても、弱からん陣をば、元春・隆景旗本を以て、加勢すべき旨、觸聞かせらる。〔頭書〕或書に曰、後詰勢肥後・肥前の間に支へたる由、聞きける故、夫より防戰の用意せられたり。斯くて豐後勢の先陣大友駿河守・奈須軍兵衞入道・深野七右衞門・赤尾・橋宇津等、侍大將戸次入道道攝にいひけるは、中國勢、思の外小勢なれば、我々が濕草鞋にて、踏破るべしといへば、道攝、先づ暫く敵の樣體を試みて、合戰すべしといふ。奈須軍兵衞、今日の合戰に於ては、某に任せらるべし。あの尾崎へ下りて取りたる陣へ懸りて、强弱を試むべし。此度始めての合戰に、奈須が勇の程を、中國勢に知らするに於ては、元來小勢なれば、早速引退くべし。老後の思出に、某先陣すべしといへば、大友・深野以下、尤も宜しかるべしと同じければ、戸次入道も、是に隨ひて、柳川・田原などへ、此由いひければ、各、尤と同意し、但尾崎の陣計りへ懸るならば、方々より扶け來つて、防ぐべき間、總懸にして、鯨波を揚げ、太鼓を打ち、貝を吹かば、敵、己々が陣を守りて、向の陣を救ふ事あるまじといひて、諸軍に觸傳へて、先陣大友駿河守・奈須軍兵衞入道・深野七右衞門・赤尾・中山以下五十餘騎、二陣は矢部助右衞門・秋友式部少輔・橋宇津・今枝以下、一勢々々備へて、

大友軍攻勢を取る

總勢十二萬八千、鬨を作る事三箇度なり。其外本庄・杵月・古澤以下の者共、今日の合戰、何ぞ奈須一人が高名にさせんや。彼より先に、一陣攻破りて、中國勢に、我々が勇の程を知らすべしとて進む間、豐後勢十三萬、我も〳〵と攻懸る。中國勢は、兩將の豫ての軍法を守りて、他の陣を顧みず、己が持口々々へ打出でたり。城の如く構へたる陣にして、防戰地の利を得たる故、豐後勢、弓・鐵炮に射立てられ、手負死人多く出來たりけり。奈須軍兵衞、今日の辭をや恥ぢけん、又己が勇にや誇りけん、手負・死人を踏越え、眞先に進み、小早川勢椋梨次郎左衞門が持口を破らんと、名乘り掛け、三間柄の槍を以て、敵一人突伏せ、猶も進んで戰ひけるが、弓・鐵炮に射すくめられ、終に俯伏に倒れて死したり。（頭書）異書に、椋梨が備、大友勢手ひどく懸りて、戰ひ危急なるに依りて、元春、吉川・香川をして、加勢させしめらる。之に依つて兩人、此陣に於て防戰すと云々。中國勢是に力を得て、一度に突懸れば、後詰勢一町計り引退く。元春の旗本吉川式部少輔經家・香川兵部大輔春繼二人、此陣に來りて戰ひけるが、敵の引きたる跡に、岸陰に武者一人伏し居たり。香川、既に首を取らんとせしが、敵味方入亂れたる所なれば、若し味方にてやあるべしと思ひ、打捨てゝ敵に懸りけるに、式部少輔見て、是れ正しく敵と見えたる間、首を討つべしといへば、香川、縱ひ敵にてもあれ、死人なれば、今來る敵に馳合すべしといひて、二人打連れて、深野が勢に突懸り、眞先に槍を入れ、聲を揚げて攻戰ふ。之を見て椋梨も無二に突いて懸れば、備後勢、多く馳續く間、豐後勢、引色になる。小早川衆小泉與市、眞先に進んで討死す。（頭書）異書に、此時豐後勢の中、九國に名を得たる槍の達人穗田何某・福波彦右衞門をいふ侍大將二人を、槍下にて中國勢に討取ると云々。藝州勢、餘りに戰ひ疲れて、少く息を繼ぐ。豐後勢一陣既に負色なれば、後陣入替るかと見えし處に、金の團持ちたる武者、後より味方を麾きて、靜に勢を打入れたり。是に依つて總軍一同に引拂ふ。中國勢、後を付けんとする處を、隆景堅く制せられて、面々の陣へ引退きたり。爰に兒玉三郎右衞門が郎黨、元豐前の長野が手の者なりしが、奈須軍兵衞討死して伏し居たるを見知りて、首を取り差上げけるを、香川兵部見て、如何に大力殿、其武者の首をば、嚮に某も討つべしと思ひし處に、分明に敵なりと知らざる故、打捨て過す。姓名見知りたる者なるにやと尋ねたれば、是こそ九國に名を知られたる奈須軍兵衞なり。定めて今日一陣の大將にて、向ひたるなるべし。

是れ見られ候へとて、綿嚙に付けたる金の札を取出して見するに、奈須軍兵衛入道、生年六十三、五月五日討死すと書きたり。〔頭書〕或記に、奈須が首なば、兒玉内藏允が手の者討取るとあり。香川見て、此者と知りなば、先に首を討つべきにと後悔し、共に渠が勇剛を感じ合へり。高橋右近秋種は、此間己が城に居て、敵陣に夜討などし、方々にて敵に駈合ひ、討取りたる首、度々兩川の陣へ送りたるが、我が城には、人數を殘し置き、今月十五日家城を出で、翌十六日、立花へ來りて、中國勢に相加はる。彼れ大剛の者にて、大友の多勢をも、何とも思はぬ氣色なり。〔頭書〕高橋は、常々大酒を好み、半狂人なりと云々。

四　五月十八日合戰の事

同月、戸次入道道攝は、田原入道重忍・柳川左近將監・同近家・臼杵・吉廣・佐伯・志賀・清田・武田、其外宗徒の一族侍大將に向つていひけるは、昨夜立花城より、忍の者一人出でて、城中の樣體を、委しく語れり。早や水の手へ詰寄られ、一兩日が程に、攻取らるべしと聞えたり。其外所々の仕寄、間近く付寄せ、勢樓を組みて、城内を目の下に見下し、頻に鐵炮を打入るゝに依つて、城兵難儀するの由語れり。今度九國の勢、盡く集めて後詰し乍ら、當城沒落せば、大友家の名折、各〻の瑕瑾、之に過ぐべからず。今一度敵陣に懸りて、勝負を決すべしといひければ、皆此議に同意して、同十八日卯の上刻、一戰を遂ぐべしと定め、大友の氏神を、陣中に勸請し、神前に於て、先陣後陣の鬮を取り、總相印の外、一組切に印を付け、下知なきに先駈する者は、罪科に處すべしと制法を出し、足輕を先に立て、中國陣に押し來る。敵陣を少し隔てて備へ、鐵炮の一つをも打出さず、戸次入道が本陣にて、貝を三くさり吹立てけるが、總軍、是より鬨を作りて攻懸る。敵陣の中にも、高野山入道久意・楢崎彈正忠が口、又宍戸安藝守隆家が陣、熊谷伊豆守信直が持口へ、殊に稠しく攻懸る、各〻其陣々を堅めて、打出でて防戰す。〔頭書〕異書、隆景の内椋桑・問田・草井・小泉、楢崎が陣へ攻懸るとあり。此事別所にあり。兩川の旗本勢は、五百・三百づつ引分け、弱からん所を救ふべしと、定め置かれしが、楢崎が陣、手弱く見えける間、元春より、伊志源次郎・井上平右衛門に、鐵炮六十挺差添へ、加勢せらるれば、吉川式部少輔・香川兵部大輔・山縣四郎右衛門・江田宮内少輔・香川雅樂助・山

縣惣右衞門・境與三右衞門・荒木又左衞門など續き來る。伊志・井上、味方を待受けて、鐵炮を頻に打出す、井上平右衞門、吉川・香川に向ひ、敵の眞先に進んだる足輕を、打殺して見せんといひて、鐵炮提げ出で、卽ち打伏せ、二重の空堀を越して、其首を取り歸る。是れ今日の一番首なり。其後吉川式部少輔・香川兵部大輔・同雅樂助・江田宮內少輔・山縣四郎右衞門・伊志源次郎など突いて出で、稠しく迫合ひたり。

〔頭書〕實平（土肥二郎）
- 遠平（彌太郎）
  - 景平（小早川二郎 一說惟平子遠平孫）
    - 茂平（美作守）
      - 季平（新庄二郎左衞門 小田・椋梨・和木・大草・上山等祖）

香川兵部が家人猿渡壹岐・沖源右衞門・塚脇彥右衞門、兵部が先に進み、槍を入れて

- 信平（小田三郎左衞門）
  - 長平（和木）
- 國平（椋梨）
  - 爲平
    - 貞範（大草）
    - 信平（上山）

防戰し、同香川與七郎、十九筋の矢を以て、敵二十人射伏せたり。是に依つて、合戰終りて後、元春對面して、太刀一振與へられたり。香川兵部大輔を、敵槍十本討にて、すくめたる處に、沖源右衞門走り懸り、敵の槍六七本押籠めて、横樣より抱きけるを、敵槍を引取つて、突伏すれば、沖、其槍にしがみ付きて死したり。此隙に兵部大輔、敵を突伏せて、進み戰ふ。然れども敵大勢なれば、押返して進み來る。兵部が家人塚脇彥右衞門、敵一人突伏せける處に、又一人走寄りて、塚脇が高股を切落せば、塚脇、太刀を拔いて、切られたる片股を岸にすけて、打拂ひ〳〵、暫く戰うたり。兵部大輔、堀の中より外を見れば、敵二人、太刀を拔持ちて、塚脇が首を取らんと懸る間、兵部、あれ助けよといひければ、家人材間四郎三郎走り出で、向ふ敵一人切伏すれば、今一人は逃退く。塚脇、材間が手に懸けて、首を討つて給はれといひて、首を延べて討たすれば、材間、其首を討つて、敵の首と二つ提げて、陣中へ歸り入りたり。檜崎は、我が持口を破られじと、危き働き愼みけるが、我陣に寄せたる敵を、人に先をせられし事口惜しとて、眞先に突いて出づれば、岡又十郎・兒玉內藏

丞・同又五郎・小早川勢磯兼左近・粟屋雅樂允・兼久内藏允・河井新右衞門（頭書）一書に河井源右衞門とあり。山田新右衞門等、續いで打出づる。之を見て、先に戰つて息を繼ぎ居たる吉川勢、又一手になつて突出でたり。中國勢微なりと雖も、嵩より突懸る間、九州勢每事突立てられ、足竝しどろになりけれども、大勢なれば押返し、入替へ〳〵攻上り、東西に入亂れ、喚き叫んで相戰ふ。斯る處に、大友勢の後陣より、押退け〳〵曳や聲にて攻寄せたり。中にも上杉主殿助・同佐介と名乘りて、眞先に進み懸れば、中國勢後崩して、既に此陣、破れんと見ゆる處に、楢崎を元め、吉川式部少輔・香川兵部大輔・岡又十郎・磯兼左近大夫・粟屋雅樂允・山縣惣右衞門・江田宮内少輔・山縣四郎右衞門・香川雅樂助・河井・山田以下踏止りて、槍先より火を飛ばして攻戰へば、境與三右衞門・同又平（後井筒女之助）荒木又左衞門など四人、刀にて切合ひ、江田宮内少輔・境與三右衞門・同又平、能き首討つて差上げたり。其外吉川式部少輔・香川兵部大輔・岡又十郎、比類なく働きたり。今朝辰の刻より、未の終迄の迫合なれば、敵味方、手負・死人數知らず。日既に斜なる時、豐後勢戰ひ疲れて、引色なるを見て、藝州勢、一際進んで揉立てければ、上野主殿助・同佐介・楢尾繁澤等三十餘人討死して、豐後勢、七八段程颯と引けば、後陣の吉廣以下、押返して備へたれども、暫く控へて進み得ず。藝州勢は、終日入替る味方なくて、殊の外に戰ひ疲れ、皆下り居て、休息する處に、豐後勢、一段づつ繰引に勢を引拂へば、藝陽勢も、頓て陣中へ打入りたり。又高野山久意入道が持口にて、味方戰ひ疲れ、饑渴に及ぶ處に、吉川治部少輔元長、粥と水を贈られければ、諸卒粥を呑んで力を得、水を以て火矢を消して、終に敵を追拂ひ、退口を慕ひて、山下に於て、數百人の首を討取りたり。熊谷が陣へは、佐伯・臼杵の者共寄せ來る。何れも大剛の侍大將にて、入替へ〳〵攻寄する間、此陣危く見ゆる處に、熊谷伊豆守が四男三須兵部少輔、足輕共の鐵炮の打ち樣惡しとて、一挺奪ひ取り、四つ五つ打ちけるに、何れも中りたり。中にも團扇を以て、下知して廻りける武者を、强く狙うて打ちけるに、胸枚に中りて倒れけるを、其手の者共、肩に掛けて引退く。

〔頭書〕信直熊谷伊豆守
- 隆直熊谷兵庫助
- 女吉川元春室
- 直清山内隆通室 初嫁二野間隆實一
- 女熊谷左馬助
- 廣直熊谷右近大夫
- 隆經三須兵部少輔 三須筑前守爲二養子一
- 女八木八右衛門室 香川事
- 就直熊谷玄蕃

宍戸が陣へも、敵、頻に攻入らんとしけれども、隆崎が家人深瀬〔頭書〕一書に深・末兼・深兵庫とあり。奥垣・佐々部等、防ぎ戰ひて、敵破る事を得ず。戰半ばなる時、城兵も後詰勢と、一つにならざる樣に、其道筋を掘切り、柵を結はしむべしとて、元春の家人森脇市郎右衛門、鐵炮百挺連れて行向ふ處に、城中より、散々に射けれども、難なく道を掘切り、柵二重に結ひて歸りたり。斯くて豐後勢、中國勢を破る事能はず、盡く打入りける處に、中途より、又一同に取つて返し、小早川家の椋梨次郎左衛門が陣へ、透間なく突いて懸る。〔頭書〕異書に、隆景の内椋梨・門田・草井・小泉・檜崎等が陣へ寄せ來ると云々。此事五月十八日合戰の所に之を載す。浦兵部丞宗勝・坂新五左衛門・乃美少輔五郎・山田源五郎・豐島九郎右衛門、打出づると雖も、豐後勢此勢を程なく突立て、既に柵迄押込みたり。之を見て吉田衆材間越前守、小早川衆末永源六郎・裳懸（おしあげ）六郎・田中源七、爰を破られじと防ぎ戰ひ、何れも討死すれば、敵勝に乘つて攻入れば、味方突立てられ、散々に引退き、此備破られんとする處に、吉川治部少輔元長、手勢五百餘騎にて、椋梨が陣へ扶け來らるゝ處に、突立てられたる味方、元長の備へ雪頽れ懸りければ、元長、井下五郎右衛門といふ者を以て、元長、椋梨が陣を救はん爲め馳向ふなり。敗軍の各々は、せめて道を開かるべしといはせらるれば、是に恥しめられて、多く立ち止りたり。

〔頭書〕異書、此時小早川内討死の内に、小泉與一郎之を載す。私に曰く、與市郎討死の事は、前段本文に之を載す。

〔同〕異書に曰く、同八月中旬、又大友勢、熊谷・穗田が陣へ懸りて相戰ひ、敵味方、手負・なだれ・討死多し。隆景、敵の多勢を見て、熊谷・穗田危し。駈向つて無二の合戰して、敵を追散らすか、有無存亡を究むべしと、既に駈出でんとせらる。吉見正賴曰く、公一身の讐敵に於ては、進退存分に任せられん事、勿論なり。元就、長府

にありて、味方の勝敗を謀りて、後度の合戰を期し給ふ折節、心の儘に勇戰を遂げられ、勢を損ぜらるれば、長府に於て思召されん事、却て如何に候はんといふ。宍戸以下一同に、是れ尤なり。御一戰御遠慮ありて、宜しかるべしと諫止す。敵も、頓て打入りたりとなり。

元就輝元下關在陣

豐後勢、既に柵を破り、亂れ入らんとする處に、元長、五百餘騎を一手になし、吉川元長と名乘りて、眞驀に突いて懸り、自ら眞先に進まるれば、宮庄・今田・桂・粟屋・香川・伊志・小坂・森脇・境・廣枝、我れ先にと突懸る。豐後勢、暫く戰ひけれども、終に叶はず、一度に山下へ引退く。吉川勢、後を慕はんと進みけるを、元長制して、輕く勢を打入れられたり。元長此時の擧、隆景を初め中國勢、何れも稱美せしとなり。此日諸手へ得る處の首、五百餘なり。其頃元就・輝元は、九州の軍の樣を聞かん爲に、長門へ下りて、下の關に在陣せられけるに依りて、元春・隆景より、右の合戰の次第、具に使者を以ていひやり、討取る首の註文を贈られければ、元就、喜悅淺からず。元長の働を感じ、近習の者を使として、左文字の刀、寒梅といふ馬を、元長に寄與せらる。

〔頭書〕元就・輝元、永祿十二年三月下旬より、下の關に在陣せらる。

〔同〕異書に曰く、五月十八日、豐後勢、小早川の備椋梨・門田・草井・小泉・楢崎が陣へ突懸る。小早川勢、數刻迫合ふと雖も、敵大勢なる故、手の者討死多くして、此陣既に危き處に、小早川一手の打廻磯兼左近・粟屋雅樂允・兼久内藏允等を頭として、河井源右衞門・山田新右衞門を始め、其外歴々駈合せ、又吉田勢楢崎又二郎・兒玉内藏允・岡又十郎等、扶け合すと云々。本文には、此者共、楢崎が陣へ扶け合する由、見えたり。

其頃内藤左衞門佐隆春が家人勝間田土佐といふ者、長府に在宅しけるに、大友より、元就・輝元を討つて出さば、防・長の間に於て、所領望に任せて宛行ふべき旨、竊に言送らる。勝間田曾て同心せず。卽ち使を搦め、大友よりの書狀を添へて、元就の陣所へ差出す。〔是に依つて彼使をば、首を刎ねて獄門に掛けられ、土佐守には、勸賞を行はれたり。

五月十八日合戰の事

五　庄式部少輔豐後勢と合戰の事

斯くて豐後勢、久しく中國勢と對陣し、合戰兩三度に及ぶと雖も、さして仕出したる事もなかりけるを、無念にや思ひけん、同七月二日、古澤右馬允・姫島閑齋等五千餘騎にて、備中の國の住人穗田の庄式部少輔元祐が陣へ、鬨を作つて切懸る。元祐は、中國に、我に勝れる勇者あらじと、自讃する程の者なれば、手勢七百餘騎、唯一手になし、暫く支へて相戰ひ、難なく敵を追立て、山下へ遙に捲り落す。敵大勢なる故、押返して追上げ追下げられ、四五度迫合ひけるが、元祐終に勝利を得て、陣中へ歸り入りたり。

六　尼子勝久雲州亂入の事

同年八月、雲州富田の城の在番天野紀伊守隆重より、尼子孫四郎勝久、當國へ打入り、富田城を取返すべき企する由、長府へ注進す。勝久雲州亂入の次第は、先年尼子右衞門督義久、富田下城の後、山中鹿之助幸盛・立原源太兵衞尉久綱・吉田八郎左衞門・眞木宗右衞門・横道兵庫助・同權之允以下、悉く流浪の身となり、京都に上り、一所に集り居けるが、今天下の諸將を試みて、何れにても勝れたる家を賴み、何卒本國を取返すべしと言ひ談じて、山中・立原・眞木三人打連れ、順禮の姿になりて、武田・長尾・北條・朝倉以下、諸家を徘徊し、又京都へ上りける處に、此頃毛利・大友矛盾起り、吉川・小早川九州へ發向し、大友と對陣して、勝負未だ決せず。元就・輝元も、長州に在陣の由聞及び、是れ幸の時節なりとて、諸浪人を招き集む。權道兵庫助・同權之允兄弟、松永彈正を賴み居けるに、山中・立原、此趣を言遣しければ、横道兄弟喜びて、彈正に仔細を語りて暇を乞ふ。彈正が曰く、浪人の身として、當時毛利家に對して、楯を突かれん事、中々力及ぶまじき旨、頻に制し留むると雖も、兄弟達つて言斷るに依つて、松永力なく、後悔せらるべしとて、鎧一領・太刀一腰づつ兄弟に與へければ、夫より横道は、急ぎ京都へ上りたり。山中・立原以下數人、京都に馳來り、僉議して、尼子式部大輔、先年晴久（誤カ）の爲に誅せられしが、其三男、其頃嬰兒にて、乳母

尼子勝久雲州に起る

抱いて遁れ出で、備後の德分寺に隱し置きて、出家せしが、此頃洛陽東福寺に居られしを還俗させ、大將に取立つべしとて、卽ち其趣を告げければ、頓て還俗して、尼子孫四郎勝久と名乘らる。之を大將として、山中・立原・横道兄弟・眞木宗右衞門・吉田八郎左衞門・河添右京・目黑助次郎・米原助十郎・月坂助太郎・力石・宇山・三吉・三砥以下、但馬の國へ馳下り、山名宗仙・垣屋播磨守（鹽冶カ）を賴み、奈佐日本助が海賊船に乘りて、永祿十二年六月廿三日、雲州島根郡忠山に取登り、名字の侍六十三人、雜兵共に二百餘人の者共、尼子勝久、今度入國なり、志の輩、早く味方に參るべしと喚いて、夜半二三箇度鬨を作る。國中に殘り留りたる侍秋上三郎左衞門・同嫡子伊織助、二百餘騎にて、一番に馳加はる。森脇市正・横道源介・匹田右近・原田孫六郎・田原右兵衞以下六百餘騎、大山の衆徒經悟院三百餘騎、中井平藏・加藤彦四郎・寺本市允・進左吉兵衞・高尾右馬允・目加田采女・同彈右衞門・福山次郎左衞門・長森・吉田・羽倉某（頭書羽倉孫兵衞尉とあり。）・日野の一族等、五百餘騎にて馳付く間、五日が中に、其勢三千餘騎になる。

（頭書）森脇市正云々。

東市正（尼子侍後仕二吉川家一）
小兵衞（法體而號二自安一。實香川又左衞門春繼三男、市正爲二養子一）
—三郎兵衞（正之江月齋）
—三太夫（三久學二神道一）
—勘右衞門（亂氣自殺）
—釣玄（俗名問田兵允）
—市郎左衞門（實綿ス）

又隱岐隱岐守爲清、三百餘騎にて、隱岐の國より渡りて、山中・立原にいひけるは、某事、近年毛利家に隨ひ、隱岐一國領知せしむ。身に於て本意ならずと雖も、忰家相續の爲め、力なく打過ぎたり。今度勝久、當國歸入の事、恐れ乍ら我々一族の端に候へば、大慶之に過ぎざる處なり。舊好を思はれて、隱州相違なく給はり置かるるに於ては、身命を忠戰の爲に抛つべく候といひければ、山中・立原、其由勝久に申入るべき旨會釋して、忠山に假屋をかけ、大幔を打つて、三百餘人に饗應し、其後山中いひけるは、爲清演說の趣、晴久に申述べ候處に、當家昔の好を思ひ、早速入來、芳志の至なり。然れば隱州の事、尤も望に任すべしと雖も、御同姓三郎五郎、近年

晴久の勢威振ふ

流落の間も、其志變せず附隨ひ、忠志淺からざる間、本國なれば彼に宛行ふべく候。爲清には、本意の上、雲・伯の内に於て、何れの地なりとも、望に任せ、日來の領地に倍して、安堵せしむべき旨いひければ、隱岐守、此度の弓矢、御本意あるに於ては、外に所領の望なし。味方に參る上は、所を嫌ふべきにあらず。何國にても、相應の小郷一所給はるべき旨いひて、さらぬ體に持成しけれども、此事を本意なく思ひて、終に又心變せしなり。其後勝久、國中を打隨へん爲め、三千餘騎を帥ゐて、最初に多賀左京亮・同吉六が籠り居たる新山の城を攻落し、末次の土居を勝久の居城に構へて、猶國中の者を語らはれければ、一味の者多く出で來り、一箇月が間に、當國に於て、敵城六七箇所攻落しゝかば、國中盡く手に屬し、雲・石兩國はいふに及ばず、伯州にも多く志を通ずる者出で來りしかば、尼子の勢、高大にして、總勢六千餘になりぬ。其後富田の城を攻むべしとて、宇波・山佐・日部・丸瀨、其外數十箇所向城を構へ、日々足輕迫合あり。

七　天野紀伊守敵を方便る事

富田の城の在番天野紀伊守隆重は、纔三百計りにて籠り居ければ、駈合の勝負なり難く、又一戰せざるも武勇の不足なれば、敵を方便つて利を得べしと思ひ、秋上伊織助が方へ使を以て、今度勝久、當國へ打入られ、國中盡く打隨へられ候事、威武恐怖するに餘りあり。然るに某、獨り當城を守り得ん事、螳螂の斧たるべく候。殊に當城は、御當代の御居城なれば、某望む所、御許容に於ては、速に明渡し申すべく候。御本意の上、某唯今の本領の上、五萬貫の所領給はるに於ては、味方に參りて、忠節を勵むべし。然りと雖も、唯今故なく城を明渡しなば、某が武名永く捨たれ、藝州に留め置く妻子共の行方、不便に候間、明朝御勢を切岸迄詰寄せられ候はば、防ぎ兼ねたる體にて、本丸へ引退き、和を乞ひて城を明渡し、藝州へ歸り、妻子を家城へ引越し、御發向を待受け、國中に於て旗を揚ぐべしと、委細に言送れば、伊織助、即ち此由を鹿之助に語れば、是れ此度、尼子家再興の端たるべしと喜んで、勝久へ

披露し、翌日卽ち、秋上伊織助を大將として、匹田・遠藤・岸・池田・相良・有村以下二千餘騎、富田の城へ押寄せ、七曲を馳上りて、切岸へ付き関を作る。豫ての相圖なれば、天野定めて、甲の丸へ引取るべしと思ふ處に、狹間を開き、弓・鐵炮を散々に射出せば、秋上以下、是は天野が方便りて謀りしなりと、周章する中に、早や手負・死人數十人に及びければ、叶はで引かんとする處を、隆重三百餘人にて、朝霧の中より突いで出づれば、寄手一支にも及ばず、大勢討たせ乍ら、我れ先にと逃退きたり。此時寄手の討死は、岸與九郎・相良新三郎以下十七人、手負は岸左馬進を始め、六十餘人とぞ聞えし。鹿之助を始め、尼子家の者、此由を聞きて、大に腹立したり。

八　米原心變附南條山田伯州に歸る井立花城明渡す事

尼子勝久、雲州に入りてより、敵城十五箇所攻取り、武威漸く强大になりぬと聞えしかば、備前赤松家の諸浪人、勝久へ一味して伯州岩倉の城を攻取りて楯籠る。

又福屋隆包、石州へ歸り入らんとするともいへり。之に依つて、所々の味方より、長府竝に立花表へ此由注進す。元春・隆景相議して、米原米内兵衞綱寛に、急ぎ雲州へ上り、高瀨の居城を守るべしと命ぜらる。米原三百餘騎にて、石州迄登りたるが、折節濱田の浦へ唐船著きしかば、四五日逗留し、唐物買取りて、緩々と打解けてありけるを、諸人怪み、家城、敵の爲に奪はれんとするを、救はん爲め登る者が、斯く路次に滯留する事、如何樣怪しき米原が擧動なりといひけるが、綱寛豫てより、雲州へ使を上せ、勝久一味の內通に依つてと聞えし。扨平內兵衞は、雲州へ歸り著いて、彌〻尼子へ一味すべき由言送れば、勝久悅び、毛利家退治の上、米原が本領に七千貫を添へて、宛行ふべき旨、約諾せらる。又伯州南條が居城羽衣石を、敵取圍む由聞ゆるに依りて、南條豐後守・山田出雲守兩人、長州下の關勝山の城に籠め置かれしを、元就命じて、伯州へ登せらる。其後勝山の城には、防州油宇の正覺寺周音を在番せしめらる。南條は急ぎ羽衣石へ入り、山田出雲守は、岩倉の城に尼子勢籠り居たるを攻め落し、首六十三討取りたり。山田が家人も、梶屋藤兵衞・林甚

四郎・同又兵衞・長安甚左衞門・谷川久之允、其外中間八人討死す。又石州へは、元春の家人森脇市郎右衞門尉を、立花表より上せられ、石州三子山に城を拵へて居たり。然る處に福屋隆包、國人共を語らはん爲に、新藏主といふ僧に廻文を持たせて、忍んで國中を觸れさせけるを、捕へて首を刎ね、獄門に懸けたり。爰に米原平內兵衞が、立花に殘し置きける人質の者、豫て綱寬、言聞かせけるにや、山下の風呂に入ると方便りて、豐後勢に走り入りたり。斯くて雲・伯兩州の者、多く尼子に與する由、注進たび重なるに依りて、兵を少しづつ引分けて上せられける故、立花表の味方、彌〻減じけり。是に依つて元春父子・隆景評議して、一日も早く立花の城を攻落すべしとて、急に攻め近付き、一時に乘破るべき勢を見て、城兵防ぎ兼ねて周章する間、城中へ使を以て、城明渡さば、命を助くべしと言遣りければ、立花彌十郎其外臼杵・田北等悅んで、速に城を渡しければ、卽ち人數を入替へ、城中の者をば、皆敵陣へ送り歸さる。

立花城明退く

九　雲州富田麓合戰の事

山中鹿之助・立原源太兵衞尉は、先日、天野隆重に、方便られたる事を憤りて、此方よりも敵を方便りて、討取るべしとて、七月十七日、山中鹿之助幸盛・立原源太兵衞久綱・牛尾彈正忠・秋上伊織助等一千餘騎、淨安寺の寺中に陣を取り、三箇所に伏兵を置き、城中より、山下の田を刈らんとする者を、足輕を出して討たんとせば、天野、山下へ打出づべし。其時淨安寺より出合ひ、弱々と會釋ひ、敵を呼引き出して、伏兵を以て、一人も殘さず討取るべしと謀りて、山中以下、夜半より兵を出して、三箇所に隱れ伏して待つ處に、天野、物見を出して見せけるに、伏兵ある事を告げければ、弓・鐵炮を手毎に提げて下し合せ、伏兵の眞中に、射かけ打懸けゝる程に、敵積へず逃退く。山中・立原も、淨安寺より出でて戰ひけるが、忽ち押立てられて引退く。之を見て隆重三百餘騎、足輕七八十計り先に立てゝ、靜々と打出づる。牛尾彈正忠、動もすれば取つて返し追拂ふ。天野が足輕に、神代の某と名乘りて、眞先に

進み、敵返せば颯と引き、敵引けば又跡を慕ふ。尼子勢、足輕を討たんとすれば、天野勢備を堅め、後陣に控へ、又急に引取らんとすれば、先に散りたり敵の足輕、一所に集りて附送る。されども牛尾、後陣に下りて防ぎける間、尼子勢、辛うじて岩坂を引越しければ、天野は十四五人の首取つて、頓て勢を打入れたり。其後は天野が智勇侮り難しとて、押を置きて、攻むる事なし。

一〇　雲州原手合戰の事

吉田物語に小田助左衛門討死とあり。

石州銀山の城に、毛利家より、吉田彌左衛門父子・服部左兵衛・池田何某・河村備前守・岩崎出雲守・熱田對馬守・矢野民部少輔・同石見守・二宮加賀守・高橋與三兵衛・栗栖備後守等を籠め置かれたる處に、吉田父子、尼子方へ一味して、山吹の城を燒かんと内通せしが、隱謀忽ち顯はれければ、孫左衛門父子雲州へ落行きたり。是に依つて河村・服部・岩崎以下、尼子勢と一戰して、毛利三家の疑を散ずべしと相議す。之を聞きて、坂・出羽が留守居の者共相加はる。又藝州佐東の小田助右衛門尉、佐東・佐

西郡の者を催し、石州へ越え來れば、彼を大將として、出羽が手の者、坂が家人彼此三千餘、雲州原手表へ出張す。山中鹿之助、此由を聞きて、小田はさる者なりと聞及ぶと雖も、手勢百と持ちたる者にあらず。出羽が手の者は、主、他所にありて大將なく、坂も同じく立花にあれば、殘し置きたる者、或は年老い、或は弱年にして、物の用に立つまじ。如何樣手痛く當らば、一支にも及ぶまじと、山中鹿之助・立原源太兵衛・横道源介・同權允等二十餘騎、原手表へ打つて出づる。之を聞きて隱岐守爲清七百餘騎、二陣に續けば、米原平内兵衛五百餘騎にて、高瀨の城を出で、尼子勢に加勢と號し乍ら、勝負を窺うて、遙に隔てゝ控へたり。斯くて銀山の勢、方角なれば先陣をすべしとて、池田・服部五百餘騎、先陣に進み、二番は出羽・坂が手の者一千餘騎、其次小田助右衛門、七百計りにて備へ、軍士に向ひ、我れ能き程を計つて下知すべき間、猥に懸つて、不覺すべからずといひけれども、何れも大將なしの集勢、小田が下知にも從はず、口々にいひける程に、備騷ぎて正しからず。斯くて山中・立原以下、貝・太鼓にて寄せ來れば、出羽・坂が手の者、一二陣の差別もなく進

む間、段々の備、亂雜せり。鹿之助此體を見て、味方必勝、掌にありと、味方を進め無二に懸つて戰へば、銀山の者共、散々に突立てられて、逃散りたり。小田之を見て、七百餘の勢を折敷かせ、弓・鐵炮を前に立て、靜まり返つて待懸けたり。尼子勢、一陣二陣を追立て、小田が手へ討つて懸る。山中・立原、敵の備只ならず思ひければ、隱岐守が許へ使を立て、急ぎ敵の後を遮る樣に、懸からるべしと言捨て切つて懸る。小田は、先陣散亂して引く中に、踏留まつて、控へたる程の者なれば、多勢をも事ともせず、三箇度迄射立てたり。斯る處に隱岐守爲清、關を作つて懸れば、米原も同じく押續く間、小田、心は猛しと雖も、味方或は討たれ或は落ちて、主從五六騎になり相戰ひ、痛手あまた負ひて倒れけるを、横道權允、押へて首を搔きたり。其後は、勝久大勢になり、今は國中に手を遮る者なし。出羽元資は、纔三百計りにて、十倉の城にありけりが、小勢なれば城守り得難く、十倉を出でて雲石の境赤穴に陣取り、毛利家へ使を以て、餘り無勢なる故、十倉を明けて罷退き候。さりながら某あらん程は、石州へ敵に足を踏ませまじと、言送りたり。

〔頭書〕十倉、異書に、德良に作る。舊古志因幡守在住。義久富田下城の時、因幡守、德良を明けて、上方へ浪牢す。其後晴久、雲州に打入る由聞きて、又立歸り、德良の城、毛利家よりの在番明退くに依りて、因幡守又彼城に在住すと云々。因幡を、異書には、玄蕃と記す。

一一　雲州美保關合戰の事

山中・立原以下、原手表に於て勝利の後、彌〻勢附隨ひければ、此勢に石州へ打入り、佐波・益田以下の家城を、攻むべしと議しける處に、伯州大山の經悟院より、飛脚を以て、當國に於て志の者數多之あり、早く伯州へ出張せらるれば、經悟院先陣して、杉原が家城泉山を攻落すべき旨、言送りたり。是に依つて山中・立原、所々の城に籠め置きたる勢を一所に集め、三千餘騎にて、先づ伯州へ越えんとす。然る處に、米子の濱の目の在家に當りて、煙夥しく立ちければ、是は如何樣、伯州の敵逆寄にして、民家を放火するならん。然れども隱岐守爲清、美保が關に在陣すれば、定めて

手痛く戰ふべし、趣に依つて、隱岐守に加勢すべき間、樣體を見て歸るべしといひて、足輕共を差遣しけるが、敵にてはなく、隱岐守逆心なりと告げければ、山中等怒つて、さらば速に押懸けて討果すべし。然れども彼が勢も、七八百はあるべければ、陸地より懸つて、手詰の勝負を決せば、味方にも多く討死あるべし。縱ひ軍に利ありといふとも、爰にて多く勢を損せば、後度の合戰に力足るまじき間、引違へて、夜半に船にて押寄せば、敵は定めて、陸より寄すべしと、專ら山の手を固むべければ、思ひ寄らざる方より押寄せて、一々討亡すべしと詮議して、船を點檢しけるに、纔に小船八艘を求め得たれば、大勢乘る事能はず。山中・立原・横道・松田・遠藤・匹田以下四百餘人、船に取乘り、美保關に漕付くる。隱岐守も敵寄すべしとは思ひ乍ら、船手より懸るべしとは、曾て存寄らず。山の手を大事に、眞野嶽・聖返へ、三百餘人差向け、我身は、美保關に、古き禪院のありけるに陣取りて、敵の寄せん方へ打向ひ、有無の合戰し、毛利家に對し、此程尼子一味の科を謝すべしと、思設けて待ち居たり。山中鹿之助・立原源太兵衞・遠藤甚九郎・匹田右衞門尉など、二百五十

山中幸盛等隱岐爲清を攻む

餘人、一番に船より上り、町屋に火を放ち、鬨を揚げて押寄する。寺中の勢、隱岐兵部少輔・中畑藤左衞門・眞野三郎左衞門・中畑忠兵衞・田平市之允など二百餘人、突いで出で防戰す。尼子勢原田孫六、一番に槍を入れて、進んで戰ひ、胸板の外を突かれて、討たれければ、寺中の勢、力を得て、槍先を揃へて突出づれば、山中・立原突立てられ、美保關の明神指して引退く。殘る軍兵は、皆船に乘るべしとて、渚を指して逃行きたり。隱岐が兵は、山中・立原を討留むべしとて、明神の華表の前を追駈け、階の本にて、山中に追付きたり。鹿之助は、今は遁れまじとや思ひけん、立ち止り、太刀を拔いて待つ處に、中畑藤左衞門渡合ひ、槍を以て透間を窺ひ突かんとす。鹿之助、打物の達者にて、三尺有餘の太刀の、柄の長やかなるを以て、斬結びけるが、中畑が突く槍を打ちそむけ、鹽首取つて强く引きければ、中畑、眞俯伏に倒れける處を、山中、太刀振上げて切りけるが、階の石に打當て、目釘際より、弗と折れて、遙の脇へ飛びたる處に、中畑忠兵衞、藤左衞門が後に續きて、長身の槍を突懸くる。鹿之助、脇指を拔くべき隙もなければ、力なく傍の山へと志し、足に任せて逃

入りたり。立原も、暫く戰ひけれども、之も叶はず、山中と共に山中へ逃登りたり。敵猶頻に後を付くれば、鹿之助、立原に向つて、今は是迄なり、敵の手に懸らんより、自害すべしといへば、立原、死するは、何時も安き事なれば、何卒爰をば遁れ、後日に此度の恥を雪ぐべしとて、相共に山深く隱れたり。然る處に、横道源介・同權允・松田兵部少輔は、船を洲崎へ乘懸け、兎角する中に時刻移り、初度の合戰には逢はず、漸く船より上りける處に、早や味方打負けて、町頭へ崩れ出でたり。横道以下、爰にて樣子を尋ね聞けば、山中・立原利を失うて、生死の境を知らず。關の明神の方へ、敵多く追駈け行きたれば、定めて其邊にて、兩人共に討死あるべしといひければ、松田・横道、こは口惜しき次第かなとて、敗軍の味方を押立て、其勢百五十餘人、町頭より鬨を作りて、寺の門前へ押寄せたり。隱岐守が勢は、盡く山中・立原が後を追行きける故、寺中に殘る處の兵、纔五十餘人なり。其上、敵は皆逃去りたれば、重ねて寄すべしとは思寄らず、油斷して居たる折節なれば、以の外周章す。寺本安藝守が一族二三十人、大門を固め、身命を捨てゝ防戰す。横道兄弟、早く揉破らんと、稠しく攻戰ふ。中にも備後の國の住人長森與一郎といふ者、初めは弓口差詰め射けるが、頓て太刀を拔き切つて入り、敵一人討取りければ、横道已下、是に力を得て、一際勇んで突懸る。斯る處に眞野嶽・聖返に置きたる隱岐勢、鬨の聲を聞き、寺の邊に戰ありと知り、急ぎ走り歸り、鬨を作り、曳々聲を出して馳下る。寺中の者共、之を味方とは知らず、敵又山の手よりも寄すると心得て、何れも寺内へ引退く。横道・松田、透さず攻入れば、爲清、今は叶ふまじとて、既に鎧の上帶引切り、自害せんとする處を、一族若黨共押止め、無理に引立て、小船に乘せて漕出せば、其外の者共、船に乘らんとするを、太刀・長刀にて切拂へば、味方の爲に、溺死する者、數十人に及びたり。立原・山中を追行きたる勢も、引くべき方なくて、皆山中へ逃隱る。鹿之助・源太兵衞は、とある藪の内に隱れ居たるが、後度の軍に、味方利を得たる由聞きて走り出で、十死一生を免れたりとて、悅び合へり。斯くて翌日、水練を以て海をかづかせ、船に乘らんとして、斬殺されたる者、六十三人の首取つて、美保關の濱に掛け竝べ、又山中に隱れたる四百餘人を搦めて、三箇度悅の鬨を作

り、四百餘人の者共をば、太刀・刀を奪ひ取りて、大根島へ放ちたり。　鹿之助、敵兵の中に、梨打烏帽子に、赭熊植ゑたる冑著たる武者を、討つべからずと、士卒に下知しければ、頓て生捕りて來りたり。　其姓名を問へば、中畑忠兵衞尉と答ふ。　鹿之助、敵乍らも今度の働、感じ入りたりとて、太刀・刀・物具以下皆與へて、今度の武勇、群を拔きたりといふ一筆を添へて、隱州へ送りたり。　扨勝久は、合戰の次第を尋ね聞き、松田・横道を、大に感ぜられたり。　然れども初度の軍に、山中・立原利を失ひたれば、兩人定めて、□□なく思ふべしと、彼等が心を計つて、横道・松田に、感狀をば出されざる處に、此由鹿之助傳へ聞きて、勝久にいひけるは、軍は勝つも負くるも習なれば、我等美保關に於て、初度の軍に駈負くると雖も、全く瑕瑾にあらず。　今度横道兄弟・松田が功を賞せられざる事、我々が心を計りての事なるべし。　斯くの如きの軍功を、感ぜられざるに於ては、向後誰か味方の爲に忠戰を勵むべきやといひて、山中感狀を認め、自ら持行きて、松田・横道に與へたり。　隱岐守爲清は、其後又雲州へ渡りて、隱州を給はるまじとの仰に依つて、一旦恨の程を知らせんと、存

虫入〔本意カ〕

神西三郎左衞門尼子に與す

ずると雖も、大根島の者、命を助けらるゝに於ては、前の如く味方に參りて、戰忠を抽づべしとて、頻に詫言しければ、鹿之助、其由を勝久へ披露して、四百餘人の者共の命を助け、隱岐國へ歸し、爲清には、美保關に於て切腹させ、彼が領地をば、約束の如く、隱岐三郎五郎に與へられたり。

一二　神西三郎左衞門再び尼子に與する事

伯耆國末石の城に、毛利家より、神西三郎左衞門を置きて、城を預け、元就の家人中原善左衞門・小寺佐渡守を附け置かる。　此神西は、もと尼子家の者なりしが、先年尼子義久兄弟、富田籠城の中、毛利家へ降りて、忠功を勵ます。　是に依つて元就、當城を神西に預け置かるゝ處に、今度勝久、雲州亂入の後、山中鹿之助・立原源太兵衞、舊好を思はれて、兎角勝久へ一味あるべき旨、勸むるに依りて、神西、毛利家の約□□へて、尼子方に成替りたり。　元就より附け置かれたる中原善左衞門・小寺佐渡守、三郎左衞門が隱謀を早く見知りて、兩人の者言合せ、神西を討果すべしとて、既

虫〔を違カ〕

に一戰に及びしかども、終に叶はず、小寺は城を出でて立退き、中原一人留り居て、終に討死したり。

〔頭書〕神西、此時、山中・立原へ、潛に扇を遣し、其扇に、ふるから己が玉柏と書きて、尼子家の舊恩、今に忘れざる志の程を、密に通じ知らせたるとなり。此心は、古き歌に、「いそのかみふるから己が玉柏もとの心は忘られなくに」といふ心を取りてなり。

一三　美作國高田城合戰の事〔朱書〕吉田物語と異なり

作州高田の城に、毛利家より、長左衞門大夫・牛尾太郎左衞門・足立十兵衞尉・國衙隱岐守等を籠め置きて、在番させしめらるゝ處に、毛利家へ注進しけるは、當國蘆田・三浦の者共、尼子へ一味して、高田の城を攻めんとす。城中小勢にて、守り難く候間、大將一人給はるべしと、言越したり。是に依つて元就、香川左衞門尉光景を、美作守になして、高田の城に差籠め、嫡子少輔五郎廣景を、左衞門尉になして、光景に

附け添へらる。斯くて三浦・蘆田・市等、高田を攻むべしとて、宇喜田和泉守に、加勢を乞ひければ、即ち長船紀伊守・岡信濃守・同强介・沼本新右衞門などに、四百餘騎差添へて、作州へ遣したり。蘆田五郎太郎は、未だ幼稚なるに依りて、叔父蘆田民部大輔に五百人、槇野勘兵衞に五百人、玉串監物に八百人相添へて、備前勢を後に立て、我が手勢を先陣として、毎日城下へ相働き、度々足輕迫合あり。然る處に熊野入道といふ者、城の二の丸に居けるが、元來雲州の者なる故、尼子に志を通じて、兵糧藏に火を掛けて、敵陣へ立退きたり。是に依つて城兵、殊の外騷動す。爰に香川美作守が次男香川兵部大輔春繼、父の加勢として、九州立花表より、高田へ赴かんとて登り、藝州に入りて、八木仁保島に殘し置きたる家の子郎黨を相具して、八十餘人、高田の城下を、白晝に打通るを、敵篠吹（さゝふき）の城より、勢を出して、打留めんとしけれども、悉く追拂ひて、城に入りたり。此時城中に、佐伯七郎次郎といひて、大力の、殊に智勇勝れたる者あり。先年尼子、富田籠城の中、山中鹿之助、彼を懇望して、我が妹を嫁せしめて賞翫せり。然れば今尼子家、再發の時節なれば、此者、鹿之助に、

志を通ずる事もあるべしと、香川美作守之を疑ひ、佐伯が僕の、十二三歳計りなる者を近付け、折々酒食など與へて、能く懷け、其後様々の事を尋ねけるに、彼の僕、三の曲輪の懸出（かけだし）の雪隱の下より、文持つて通ふ者ありといふ事を語りければ、香川、さてこそと思ひ、宗像三郎左衞門・江戸三郎右衞門などに下知して、彼の雪隱の邊に、伏を置きて待ちける處に、敵一人忍び來りけるを、即ち搦め取りて、持ちたる文を奪ひ見れば、蘆田五郎太郎が文にして、佐伯が逆意、紛れなし。然れども彼れ力量の者なれば、輙く討果すべき様なく、各〻詮議して、先づ矢倉の普請を言付け、佐伯に奉行させ、其虚を窺ひて、斬殺さすべしとて、討手の者迄、言付くると雖も、佐伯以の外用心して、少しも油斷の體なき故、討手の者、透間を窺ひ得ざる處に、香川兵部大輔、普請場へ出で、佐伯と同じく、工匠を見合せけるが、佐伯が綏む處を計つて、拔討に、眉間を二刀打つ。佐伯、矢倉より飛下りけるが、痛手なれば、其儘顚れて、寐ながら刀を拔かんとする處を、兵部續いて飛下り、其腕を切りければ、佐伯、刀をも拔き得ず討たれたり。品川市右衞門、遙か餘所に居たるが、此由を見て走り來り、佐伯が倒れたるを處、一刀打付けたり。斯くて敵方へ、兵部といふ者、九州より、高田の城へ來りて、佐伯を手討にしたる由聞えければ、高田表へ一働して、兵部大輔が手並の程を、試むべしとて、永祿十二年十月五日、玉串監物・槇野勘兵衞等、大將として一千餘騎、高田の山下を放火して、打出づる敵を待懸くれば、城中より、牛尾太郎左衞門・足立十兵衞など打出で、足輕迫合して、能き敵六人討取り、味方にも、香川が手の者香川宗右衞門・財間・大乃美三人、討死したり。又城中より、香川左衞門尉廣景・同兵部大輔春繼・入江與三兵衞尉・遠藤左京亮等打出づれば、敵早々引退きけるを、香川が家人三宅源次郎、後を慕ひ、蘆田民部大輔が同朋と渡り合ひ、首を討つて歸りたり。斯て三浦・蘆田已下、詮議しけるは、明日所々に伏兵を置きて、小勢を出して、戰ふ體に持成し引退かば、香川兵部大輔、年未だ三十にも足らざる者と聞けば、血氣剛く、己が勇に誇りて、戰を愼まず、引く味方を追うて來るべし。其時思ふ圖に引受け、伏兵を以て取圍み、一人も餘さず、討取るべしと謀る。又城中にも、伏兵を置きて、槇野・玉串が、山下へ働くを討つべしとて、同じ

き六日、牛尾太郎左衞門・足立十兵衞・品川市右衞門・香川が家人門田彌次郎・香川右衞門大夫・同石見・芥川・江戸以下五百餘人、三箇所に伏居て、敵を待つ。槇野・玉串は、二手になりて、敵を呼引んとせしが、何としてか、敵にも伏勢ありと聞きて、其儀ならば、伏兵へ切懸るべし、戰利あるに於ては、直に城へ乘入るべし。然らば後陣の備前勢も、續いて懸けらるべし。若し又利あらずば、引退くべき間、長船・沼本・三浦・齋藤已下は、豫て定めし如く、伏兵を置きて待懸け、敵、勝に乘つて進み來らん時、相圖の旌旗、同じく太鼓を聞きて、伏兵を起し、敵を取込めて、討取るべしとて、一千五百餘騎、先陣に進み、備前勢三千餘騎は、久瀨といふ所に、三箇所に伏兵を置き、山の高みに、貝・太鼓を隱し置きて待ち居たり。槇野・玉串、二手に分れて、敵の伏兵へ、弓・鐵炮を打懸くれば、牛尾・足立以下五百餘人、起し合せ相戰ひたり。然れども敵大勢なれば、終に城兵、突立てらる。之を救はんとて、城中より、又打出づれば、槇野・玉串、豫て謀りし如く、弱々として引退く。城兵後を頻に付くれば、敵は多勢なれば、長追するなと制すと雖も聞入れず。小坂一つを追越したり。長船・沼本・齋藤已下、相圖の太鼓を打つ。三箇所の伏兵、一度に起つて、三千餘騎、四方より突懸れば、城兵、忽ち崩されて引返す。寄手、稠しく追駈くれば、牛尾・足立取つて返し、一支しけれども、所は廣し、敵大勢なれば、終に叶はず引退く。香川が家人香川右衞門大夫、我れ一人討死して、多くの味方を助くべし、早く引取るべしと、味方にいひて、唯一人踏留り、敵多く突伏せ、終に討死す。敵其首を取らんとて、死骸に十五六人取付き、引合ひける處に、右衞門大夫が草履取又五郎といふ者取つて返し、首を奪ひ合ふ敵を討取らんとて、八人迄切伏せけるが、我身も段々に切られて死にけり。然れども、又五郎が刀刃損じけるか、又もとより、鈍き刀にてやありけん、八人切伏せたる敵二人は、脈筋切られて死し、外は薄手にて、命生きたりとなり。門田彌次郎も、返し合せて討死す。其外多く討たれて、既に當城附入に、乘破らるべく見えければ、香川美作守・同左衞門尉、門を開いて、山八分迄打出で、次男兵部大輔、家人の宗像三郎左衞門一人具して、鄕中迄下し合せけれども、敵大勢にて進み懸り、味方立つ足もなく引きける間、押返すべき樣なくて、終に是も引退

く處に、爰に薄一村枯れ立つて、前に狹田ありけるに、兵部大輔只一人、此薄の蔭に、槍を持ちて、追ひ來る敵を待ち居たる處に、玉串監物、城を附入に、乘取らんとや思ひけん、小具足計り差固め、一丈計りの槍を提げて、味方に五六段先立ち、狹田の畔を飛越え〳〵、進み來れば、其後に手勢八百計り續きたり。香川兵部、能き敵と見て、薄押分けつと出で、互に名乘り合ひて渡合ひ、終に玉串が細腰を、草摺懸けて貫き、倒るゝ處を、兵部首を取らんと太刀を拔き、一打々ちけるが、早や後陣の大勢馳來る間、太刀をば鞘に納め、ざすがを拔いて、其處の驗に挿し置き、槍を取つて、待ち居たり。家人猿渡壹岐、味方と共に引きけるが、又此處へ走り來り、玉串が後に續きて、二人進み來る。敵一人突退け、今一人は、宗像三郎右衞門突倒したり。後陣の大勢馳來る間、兵部大輔、取込めらるべしと見ゆる處に、玉串討たれたるに驚きて、其死骸を取上げて、次第々々に引歸りたり。向の山の尾には、香川佐渡・同石見、槇野勘兵衞が手の者と戰ひしが、二人共に、敵に槍を突付けて、兵部に詞を懸け、御覽候かといひて、討取りたり。玉串討死して、先陣皆引退けば、後陣の備前勢も、進むに及ばず、打入りたり。然る處に、土俵空穗付けたる武者一人、出で來る。敵の足輕にあるべしと思ふ處に、此者、某、あの山の其方迄敵を慕ひ、見濟して來りたるが、寄手は悉く早や打入りたりといふを見れば、品川市右衞門なり。此由を聞き、城中の者安堵したり。此品川は、元來安藝の武田の一族なり。武勇勝れたる上、弓の上手にて、此度も、敵數多射殺したり。一年武田流浪の時、若州の武田義統を、賴み居けるが、義統、丹後の一色が城を攻められける時、城中に、矢間より手を出して、其脇に立ちける矢を取りて、寄手を射る者あり。品川市右衞門、其手を又出さば、塀へ射閉づべしといひて、矢一筋、矢間の脇七八寸程置きて、射立てたれば、敵、例の手を出して、其矢を取らんとする處を、品川、敵の腕頸を込めて、塀へ射付け、又箭を番ひ、其脇腹を通して、射殺したり。義統を始め、諸卒大に感じたるとなり。扨高田には、玉串討たれて後は、敵寄する事なし。作州に香川が槍場とて、今に田畠も作らず、薄生茂りてありと聞ゆ。

一四　備後國神邊合戰の事幷防州關所合戰の事

神邊城合戰

備後國神邊の城は、杉原播磨守盛重が家城なるが、其身は、元春・隆景に隨ひて、九州へ赴き、其上盛重は、先年より伯州泉山に居城せしかば、神邊には城代として、所原肥後といふ者を殘し置きたり。然るに同國の住人藤井能登入道といふ者、神邊前の城主山名宮内少輔忠興が家人なりしが、國々蜂起しける費に乘つて、舊好の者共を催し、百餘計りの人數にて、此歳八月三日の夜半に、神邊へ押寄せて、関を作る。所原、思懸けぬ事にて、驚き乍ら、城戸口に出でて、防ぎ戰ふ。されども敵多勢にて、所原に續きたる八人の者、皆討たれ、其身も三箇所疵を蒙り、其外の者共は、何れも寐怯れて、周章てける故、寄手難なく攻入りたり。所原一の城戸、既に破れ、甲の丸も危く見ゆれば、今は是迄と、自害せんとする處を、前原入道といふ者、樣々に申留めければ、所原、盛重が次男又次郎景盛を誘引して、一方を破り、落行きたり。寄手頻に追駈くれば、高橋の某等、返し合せて討死す。藤井城に入替りて、彌〻近境を打從へんとす。其後所原、手疵を療治して、杉原が家人共を催し、神邊の城へ寄せんとす。同國楢崎參河守、其身は隱居して、嫡子彦左衞門尉を、九州立花へ下しけるが、末子少輔三郎を相具して、杉原が家人と一手になり、神邊の城へ押寄する。藤井、弓・鐵炮を以て、專ら防ぐと雖も、所原、先度の無念を散ずべしとて、稠しく攻懸り、楢崎も、少輔三郎手を負ひ、家人多く討死しけれども、事ともせず攻付く。城兵防ぎ兼ねて、甲の丸へ逃入るを附入にし、藤井を始め、敵多く討取りて、城を取返したり。又周防國關所の城に、毛利家より、桂兵部丞在番しけるが、同國山代の一揆原、蜂起して、關所の城を取圍む。桂、城保ち難く見ゆる處に、當城に、此一揆原が人質二三十人ありけるを、縛り搦め、壁の上に楯の如く竝べ置きて、防ぎければ、寄手、弓・鐵炮を放たば、吾妻子共に中らん事を歎きて、徒に守り居けるが、頓て盡く討入りたり。

一五　大内輝弘山口に入る事

大内太郎左衞門尉輝弘、永祿十二年九月、防州山口に打入つて、當家數代の本國を切隨へんとす。此太郎左衞門尉輝弘は、大内政弘の晩年の子なり。政弘昔日、年長らる迄、子なき事を歎きて、天神地祇に祈誓せられしが、漸く晩年に及んで、彼妻室懷姙せられたり。政弘喜び、あはれ男子誕生せよかし、大内介と名乘らせ、家督とせんといはれければ、妻室も、何卒男子を生まばやと、立願とせられけるが、終に女子を生まれたり。政弘の機嫌、如何あるべきと、思ひ煩はれけるが、其頃京都より、或名家の殿上人、大内家を賴みて、山口に居られけるが、其妾、政弘の妻室と同日に、男子を生みければ、彼誕生の女子と、竊に取替へ、男子誕生と披露せられたれば、政弘を始め、上下悅び合へり。此換へられたる男子、左京大夫義興是なり。其後又政弘の妻室、懷姙して、男子を生めり。是れ卽ち今の太郎左衞門尉輝弘なり。義興旣に嫡子として、大内家相續せられければ、輝弘は出家して、尊光と號し、氷上の別當になりけるが、後還俗して、大内太郎左衞門高弘と名乘らる。又氷上を、直に領じらるゝ故、氷上太郎ともいひけり。其後義隆の代となりて、或者讒しけるは、高弘常々、大内的々の子孫は我なり、左京大夫義興、多々良の血筋を傳へたる子にはあらざれども、さる仔細ありて、父政弘、嫡男と號して、家督を讓られける故、力なく義興を主とし兄とせり。今の義隆、此事を知り乍ら、領國の内、半國の主ともせず、纔氷上の鄕一所を與へ置く事とて、常は恨を懷かれ候。若し〳〵國中に事出來せば、次に乘じて、高弘は當家へ望を掛けらるべしといひける間、義隆、高弘に對し、不快の色顯れければ、高弘、山口を出奔せられたり。是に依つて義隆、高弘の子二人を搜し出して、首を刎ねられたり。高弘は、夫より京都へ上り、公方義輝卿へ、爾爾通り訴へ、身に科なき由を歎きたれば、大樹、不便に思召して、諱の字を給はりて、夫より輝弘と改め、雲州へ下りて、尼子を賴み、義隆へ讐を報ぜんと、巧み居たる處に、義隆、陶全薑が爲に殺されければ、日頃の恨は、さる事なれども、大内家の絕えん事を、歎き入りて居けるが、富田七年の籠城をも、六年迄は堪へけれども、糧盡きたる故、忍びて城を出で、夫より豐後へ下り、大友金吾入道を賴みければ、大友、壻に取りて馳走せり。然るに今度、吉川・小早川、立花表在陣し、尼子勝久、雲州